
BLADE 連載版

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLADE 連載版

【Nコード】

N2640H

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

長く続いた大戦の末に6年前、遂に魔王と呼ばれた大悪魔が倒された。だが平和は束の間しか訪れず再び魔王が世界を侵略し始める。魔王に住んでいた村を滅ぼされ復讐を誓う少女、リースはある青年に出会う。

第1話：その名は“刃”（前書き）

始めにある程度用語の説明いれときます。

【戦人】ウォリア 魔物と戦ったための戦闘の訓練を受けた人間

【破壊者】バスター 戦人の中でも実際に上位の悪魔を倒した認定を受けた人間。証を示せば宿などを割り引きで利用出来る。

【悪魔】 元々世界に居なかった者。魔力を持つ。

【魔物】 悪魔の魔力によって動植物が悪魔化した存在。肉は美味だったり

【震術】 所謂魔法。震力というエネルギーで炎や雷を発生させる物を指す。また震力自体を使う無属性が存在する。選ばれた一握りの術者は光の術を使えるとか

【魔術】 所謂魔法。周囲の分子を直接操る物を指す。魔力を持つ悪魔にしか使えない。選ばれた一握りの術者は闇の術を使えるとか

第1話：その名は“刃”

魔王 魔界に君臨する悪魔達の王者。

この世界を侵略し、長く続いた大戦の末に6年前に倒されたはずの存在。

ならば、この惨劇はなんだろう……

金の髪をした小柄な少女 リースは思う。魔王は居なくなっただけだった。人間同士が争いを起こすほど国に力は整っていない。

『第七魔王（Seventh） バオウ』と呼ばれていた悪魔が訪れたのは、いまからたった1日前のことだった。

それまでリースの暮らしていた小さく平凡な村は、あっという間に破壊された。

押し寄せる塩の匂いのする巨大な水壁。

吞まれる人々。

倒壊する家屋。

転がる死体の山。

なにより脳裏に焼き付いて離れないのは去り際のバオウの嘲笑。

何人も、何十人も、死んだ。それだけでなく海水の降り注いだこの地にはもう作物は育たない。

何十年と生きてきたはずの村は昨日、死んだ。

リースが助かったのは彼女が『震術師』だからだ。

『震術』というのはいわゆる魔法の一種で、主に炎や雷を扱う物を指す。他に無属性震術という分類の物があり、壁を作ったり小さい物体を大雑把にだが動かすことができる。

術者の周囲に壁を作り出す『リフレクション』という術をリースは使えた。水流に吞まれながらもリースの術は水の威力に耐えきることが出来た。

だが、生き残ったのは井戸水を汲みにきていて談笑していたリースが守れた数人だけだった。

「あいつと、戦おうよ……」

リースは記憶喪失の孤児だった。自分の年齢すら覚えていない。おそらく15〜6だろうと言われたので勝手にそう思っている。なぜこの村に流れ着いたのかもわからない。だが見ず知らずのリースに村人達は衣類と食事と住居、それから仕事を与えてくれた。

それが目の前で壊されていくのが堪らなく悔しかった……
壊していったバオウが憎かった……

だけど、

「無理だ……」

若い男が呟く。

「お前も見ただろう？ あの力を やつらは人間とは次元が違う存在なんだよ……」

「私達に出来る選択は2つ、ここで先に殺された人々と運命を共にするか…… 他の街を探して移り住むかだ」

「山を降りよう リース」

村人達は、違った。

悔しさもあるだろう。

憎くもあるだろう。

だけど生き残ったことが何よりの幸福だと考えているのだ。

ふざけるな リースは内心で思う。

たしかにそういう考え方もあるだろう。

だけど、悪魔は天災ではない。山火事や土砂崩れと違って意志があり起こった殺戮だ。

「誰も行かないなら、私一人で行く……！」

リースは駆け出した。

悲鳴に近い声で叫ぶのが聴こえたがリースは既に聞く耳持たなかった。

さようなら。

一人で戦えば待ち受けるのは万のうち九千九百九十九の死。

だから、どうしたというのだ？ どうせリースには記憶がない。村が無くなればリースには何も残らない。

死んでしまえばいい。万が一、刺し違えることができれば、本望だ。

山中を通る大きな川のあるほうへバオウが引き上げて行くのをリースは昨日見ていた。

山中を息を切らして走り、川の上流にある洞窟に辿り着きリースは近くにあった大きな木の影に身を隠す。

(あいつの連れていた魔物だ……)

洞窟の入り口には鱗に覆われた人型の槍を持つ魔物　　マーマンが居た。凶鑑で見たことがある魔物だ。

リースは呼吸を落ち着けてから小さく呪文を唱えて離れた場所にあった石を飛ばして洞窟を挟んで向かい側にあった木にぶつけた。無属性の震術だ。

「なんだ？　敵か？」

2匹のマーマンの注意がそちらに向く。リースは躊躇わずに地を蹴った。

「焰よ 穿てっ！」

叫んだ。

『火炎の弾丸 (フレイムブレット)』

リースの手から放たれた火柱がマーマン達を一瞬で呑み込んだ。

肉の焼ける嫌な匂いが鼻腔を突き刺す。

生き物に自分の力を向けたのはこれが初めてだった。

吐き気を堪えようとして、やはり堪え切れずにその場で嘔吐した。

だけど……やれる。

自分は魔物を倒せるのだ。

小さな自信を手にしたリースは口許を拭い、息を整えて洞窟の中へと歩き始めた。

「あの子が……リースが死んでしまっ」

生き残った村人達は半ば錯乱していた。悪魔の襲撃という悲劇、

さらに自分達を守ってくれたリースまで死んでしまつたら……

身体全体を黒いマントで覆つた、一目で手入れされていないとわかる長髪の男が現れたのはそんな時だった。

「ここに村があると聞いて来たんだが……」

マントの男はそれの上からでもハッキリとわかる長い剣を2本、腰に差していた。

「あんた、【戦人】^{ウォリア}か?! お願いだつ あの子を連れ戻してくれ」

村人は1も2もなく彼にすがりついた。

「……ここで何があつた?」

村人がここであつた全てを話し始めた。時間をかけないようによ約はされていたが十分な危機を理解させる内容だった。

村人は気付いた。魔王が居ることは言うべきではなかった。

例え【戦人】と言えど逃げ出してしまつに違いないからだ。

洞窟はリースが思ったよりも狭かつた。幸いだつたのは苔のような植物が淡い光を放っており薄暗いながらも歩くことは出来る程度の視界はあつたことだ。

しかし、妙だ。リースは思う。先程の二匹のマーマン以外の魔物の気配が全くしない。もしかしたら、ここにあの『バオウ』という悪魔は居ないんじゃないだろうか…… そう考え始めたときだ。

大きな空洞に突き当たった。その一番奥に座しているのは紛れもなく、

「……俺様の眠りを妨げるとは関心せんな 小娘」

両腕に刺青のある蒼い瞳と髪を持つ『バオウ』と呼ばれていた悪魔だった。

眠りを妨げるのを恐れた 魔物が居なかった理由はおそらくそれだろう。つまりは、外にいたマーマンなどとは格が違うことを示している。

リースは身震いした。

恐怖によるものが、武者震いか、自身にもハッキリとはわからなかった。

ただやるべきことはわかっていた。

「焰よ 穿てえっつっ！」

リースの放った火弾がバオウ目掛けて疾走した。

ジュツ っという音を立てて焰は水に包まれて、消えた。

「っ…… 焰よっ！」

もう一度、放つ。

しかし、

「身の程を知れ 小娘っ」

リースの作り出した焔のゆうに数倍の大きさのある水の蛇が焔を呑み込んだ。

バオウが片腕を振るうとそれはそのままリースに向いた。

咄嗟に『リフレクション』を発動する。

ばきいっ！

「きゃあっ?!」

だが、水の蛇は壁を突き抜けた。真後ろの岩壁に背を強く打ち付けて倒れる。

ゆっくりとこちらへ歩んで来る悪魔が、一度散った水を再び集め始めた。

殺られる

一矢報いたい。それすら出来ない自分の無力を噛み締める。痛みよりも悔しさのほうが大きかった。

リースは目を閉じた。

バオウが腕を振るった…

ぼとっ

…トドメの代わりに聴こえたのは何かが落ちる音だった。

「ふう、やっと見つけた……」

バオウとは別の誰かの声でリースは目を開けた。目の前に切断された腕があった。魔族特有の青い血が地面を濡らす。

バオウの腕だ。

「貴様……【戦人】か……？」

「さあ？」

黒いマントの男が、バオウから5歩ほど離れた場所で愉悦を目の端に浮かべて微笑する。手にした双剣の片方にはべっとりと青い血が付着している。

「なるほど…… 【破壊者^{バスター}】か！」

忌々しげに口許を歪めたバオウが後ろへ跳んだ。マントの男がそれを追うべく疾走する。男のほうは僅かに速いようにリースには見えなかった。

「水蛇の大牙 我に仇為す愚者を貫け」

バオウが呪文を唱える。マントの男は足を止めない。

「ダメツ！」

リースは叫んだ。

リースが震術で焰を使えるように、バオウは『魔術』という悪魔の血統だけが持つ力を使って『水』の属性の技を使う。

先程までバオウは『呪文を唱えず』に魔術を使っていた。その威力は正式な呪文を用いた本来の発動よりも比べ物にならないほど、威力が低いのだ。

『水棲の蛇王』ダイタロス

『蛇』というよりは『龍』に近い形状をした水の塊がマントの男を呑み込む…

…寸前で、龍が縦に斬れて、消えた。

龍に食い破られたマントの下、男の背には丁度X字になるように四本の剣が差している。そのうちの一本が引き抜かれているこ

とにリースは気付く。

（魔封剣だ……）

魔封剣とは人間の産み出した対悪魔用の武器の1つで、一本につき1つの属性の震術、魔術を無効果する希少な剣だ。

背に差した剣はおそらく4本とも全て魔封剣だ。腰に差した2本と合わせて6本の剣を携帯した異様な姿。

（この人 いったい……？）

バシユッ！

青い血が宙を舞った。間合いを詰めた剣士がバオウのもう片方の腕が落としたのだ。

「クソ……が……」

人間がたった一人で悪魔を圧倒している…… 目の前の光景がリースには信じられない。

（悪魔っ……？）

もしかしてこれは仲間割れ……？ 助かったと思ったのは間違い……？

そんな思考がふとよぎり、次の瞬間に霧散した。というより考える暇が無くなった。

「オオオッ！」

『九重の水破王』
ヤマタノオロチ

八本の首と巨大な尾を持つ水の化け物。

満身創痍のバオウが最後の力を振り絞ったであろう無数の水の鞭がガムシヤラに辺りを薙ぎ払う。

『リフレクション』を発動しようかと思ったが、耐えられる威力でないであろうことは容易に想像がついた。

「ちいっ！」

男が舌打ちし、鞭とリースのあいだに割って入った。

それこそがバオウの狙いだとも知らずに

「あっ!?!」

頭上から迫る。バオウの手から伸びる龍の形をした『九重の水破王』とは別の水塊。リースの声に反応し男は咄嗟に身体を捻るが、かわし切れずに剣越しの背にぶち当たった。

「か…はっ………」

くぐもった悲鳴が漏れ、体勢が崩れる。片手から剣が落ちる。
そこに密集する水の鞭

助けないと……

だけど、どうすればいい？

おそらく『火炎の弾丸』では程度では話にならないだろう。

わからない、わからないから

「\$¢£?%#&*@§!」

リースはガムシヤラに叫んで震術を放った。無我夢中だった。

自身の力に負けてリースの意識が途切れる。

そうして放たれた光が

「……………奇跡だな」

男が呟く。

「ああ…………… 奇跡だ」

力なく呟く。バオウは最早方に1つも勝機はないと悟っていた。

この男はそれほどに、強い。と…… そうしたとき、一つの記憶が蘇ってきた。この男を、バオウは以前に一度だけ見たことがあったのだ。

「そうか……」

水底に石を落としたようにバオウの脳裏に男の情報が浮かび上がる。

「『刃の王』^{フレイト} か？ 6年前に、ベリアル様の首を撥ねた……」

男はそれに答えずに静かに剣先をバオウに向けた。

「動かなければ楽に殺してやるが、どうする？」

「大人しくするとしよう…… 俺は俺よりも強い男に負けたのだからな」

満足気に笑みを浮かべたまま、バオウを目を瞑った。

ザクッ

青い血が洞窟の壁一面に広がった。

(……助けられたな いや、この子が居なかったらそもそもああはならなかったのか)

ブレイドは苦笑した。

あのとき、リースの放った『光』はバオウの水の鞭を全て打ち消したのだ。

リースが意識を取り戻したのは、それから2日が経過してからだった。

剣士は自分が『4人の王』の1人、『刃の王』であることを明かし、それから移住を受け入れることの出来る街があること、結界の外で暮らしている人々を結界のある街までを自分が魔物から護衛することを説明した。

村人達に選択の余地はなかった。元々彼らは山を降りようとしていたのだ。

村人達は彼に導かれ移動を始めた。

不安は大きかった。何度も魔物にも出会った。しかし2日間の旅を経て結界のある街に到着し、リース達はさすがに歓迎とはいかなかったもののなんとか受け入れられた。

「……もう行くの？」

辿り着いてから1日だけ休んでブレイドは旅支度を整えて新調したらしい黒いマントを羽織り、街の出口に居た。どうやらマントは目立つ六本の剣を隠すために羽織っているらしい。

「……ああ まだ危険に晒されてる人々は大勢いるからな」

振り返った彼の髪が大きく揺れた。整える暇もないであろう傷んだ長髪 彼の1人の旅の証。

直線距離で2日程度だったリースの居たあの村を見つけるまでに彼はいつたい何日、孤独な旅を続けたんだろうか。

それ以前から何度も旅を続けて人を集めているらしいことは、その街の人々の様子から容易に想像がついた。ほとんどの人が彼を慕っていた。

「……決めた」

「あ 何を？」

「わたしも一緒に行きたい 連れてってください！」

「はあっ?! 冗談じゃない 足手まといだ！」

「じゃあわたしが勝手に旅に出て勝手にのたれ死ぬのはわたしの自由よね？」

「っ……」

彼の頬が引きつる。根が優しいのだろう……とリースは思う。そしてそれに漬け込む。

「お願い、絶対役に立つから わたし……身寄りがないの

いまみんな自分のことで手一杯だろうし…… 文句も言わない 夜の相手でも何でもするから！」

「っ……見くびるな…… 俺はロリコンじゃねえよ」

呆れ顔で一度大きく息を吐いて、彼は諦めたように右手を差し出した。

「レグナ・ゼオングス 『BLADE』だ」

「リースよ 残念ながらファミリーネームは記憶にないわ」

2人は固く互いの手を握る。

第1話・その名は“刃”（後書き）

これから後書きには小ネタ的な物を

前書きにはちよいちよい台詞を入れていきます

ウザけりゃ辞めるので、言ってくださいm（
（ m

第2話：究極の相性（前書き）

……ねえ 襲わないの？ あーあ、つまんない男
半熟震術師
リース

『屍喰らい』の類い ……にしても綺麗すぎるな
血痕や骨の1つも無い だいたいやつらはこんな無意味に住居を破
壊したりはしない B L A D E

グオオオオっ！！！！ 地上最強の生物 ドラゴン

まるで人間みたいでしょう？ 【第5魔王】 エヴァンス

第2話：究極の相性

レグナは無言で、リースのほうは上機嫌に鼻唄を歌いながら歩いていった。

「リース その歌は……？」

どこかで聴いたことのある歌だ。とレグナは思ったがどこで聴いたのか思い出せなかった。

「あ、ごめん うるさかった？」

「……いや」

よく考えればリースは記憶喪失なのだ。もし記憶を失う前から知っている歌だとしても、それをどこで知ったかまでは覚えていないはずがない。

2人はただっ広い荒野を西のほうへ歩いていく。

リースの村に居た若者が西のほうに集落があることを知っていたのだ。

「あ ねえねえ、レグナ」

半歩前を歩くレグナを呼び止める。レグナが振り返る。ボサボサだった長い髪はリースがバツサリ切り落として以前のようになびいたりはしない。

「なんだ？」

「魔封剣ってたしか普通に切れるはずよね？ 背中の4本はわかるんだけど、腰の2本はなんで持ってるの？」

「あー……」

レグナは少し考えるような素振りを見せたが結局こう言う。

「そのうち見せてやるよ」

「んーじゃあ次の質問」

「どーぞ」

「他の『4人の王』はいまどうしてるの？」

『4人の王』 6年前の魔王ベリアルを撃ち倒した4人の【破壊者】のことをそう呼ぶ。

「…… 『本の王』^{マスター}は死んだらしい それ以外は知らん」

ぶっきらぼうに答えるとレグナは少し歩調を速めた。

あまり触れられたくない話題だったのかもしれない。と、リースはこの話はしないで置こうと思った。

「……」
「……」
「……」

レグナが以降無言だったので、リースも特に話し掛けない。

それからは何時間も止まらずに歩いた。時々襲って来る魔物をレグナは見事に撃退する。1匹を1回以上斬ることはほとんどなく、それどころか1振りで数匹を切り裂くこともあった。

たまにリースが震術でサポートすると数の勘定間違えて全滅させてからも周囲を警戒していて、リースが自分の止めた焦げた魔物を指差すと曖昧に微笑んで礼を言った。

戦闘に関しては本当に必要そうなき以外に手を出すべきではないのかもしれない。

夜はテントを張り『簡易結界』キャンセラーというのを作って寝た。震術で起動し展開する輪のような物で弱い魔物を寄せ付けないそうだ。

それと火をつけたままにするのは逆効果だと教わった。

ある程度知性のある魔物、特に簡易結界を突破出来る程度の力を持つ魔物は明かりを好む傾向があるらしい。

「……ねえ 襲わないの？ あーあ、つまんない男」

と、からかつてみたりもしたが大した反応が得られなくて本当につまらなかつた。……期待していたわけじゃないんだけど。とリースは誰かに言い訳する。

強くなりたいな とリースは思った。せめてレグナに必要とされるぐらいに……

そうして3日ほど経って、レグナとリースは廃墟を見つけた……

「……滅びてる」

まだ真新しい、一目で魔物の物だとわかる巨大な爪痕がかつて住居だった場所に無数に点在していた。ただどこ何処か違和感のある光景だとリースは感じた。何か引つ掛かるのだ。

「いや…… よく見る」

レグナが腰の剣を一本抜いた。警戒心をフルに発動させているのがわかる。

「あ……」

リースは違和感の正体に気付いた。リースの村にあって、ここにはないもの。

死体が、ない。

これだけ派手に壊されているのに。

「『屍喰らい』の類い……にしても綺麗すぎるな
血痕や骨の1つも無い だいたいやつらはこんな無意味に住居を破
壊したりはしない」

「何があっただら……?」

「おそらく、逃げただらろう 魔物の襲来を予測してそれより早く

街を捨てた

この惨状はその腹いせに魔物が荒らしたつてところか
まだこの近くにその人達が潜んでいる可能性は高いな」

「じゃあ……なんでレグナは警戒解かないの？」

「それはな」

… 建物の影が、揺れた。

「！」

碧の鱗に覆われた人の数倍はある巨体

怒りをたたえた深紅色の瞳

巨大な爪、牙、尾

二本の足で直立する魔獣

図鑑で見たことのある地上最強の生物、

ドラゴン

「魔物もまだこのへんに潜んでる可能性も高いつてことだ！」

「グオオオオっ！！！！」

雄叫び。ビリビリと空気が震える。威嚇行動だ。

誇り高い彼等は不意打ちを嫌う。とたしか本にあった。

「小さいな…… まだガキか」

「ウソっ　これが!？」

普通に3〜4mあるんですけど!？」

臨戦体勢に入ったそれとレグナは正面から向き合っ。

と、ドラゴンが予備動作なく突然に火を吹いた。

「離れてろ!」

リースを突き飛ばしレグナは逆側に跳んで炎を避けた。

リースのほうには見向きもせずドラゴンはレグナに爪を振るっ。

「あっ……」

思い出した。ドラゴンの鱗は鉄よりも硬いのだ。

例えレグナが『ブレイド』でも『斬れない魔物』は倒しようがない。

逃げよう!　喉元までそう出かかったとき、

キンっ　と澄んだ音が響いた。

どおおんっ!

続いて大きなドラゴンの腕が本体を離れ落下し土煙を盛大に巻き上げる。

「嘘っ…………」

リースは息を飲んだ。鉄よりも硬いはずの鱗を、レグナは一刀の元に断ち切ったのだ。

「ぎいあああつ!?!」

鋼鉄の皮膚に守られた魔物の王者たるドラゴンは、その頑強さゆえにこれまで感じたことのない激痛に大きく怯んだ。

明確な隙　レグナがそれを見逃すはずがない。

跳躍と同時の一閃。蹴足の速度のままに放たれた斬撃は寸分の狂いもなくドラゴンの首に食い込み、斬り落とした。

「すっっ…………」

「…………これがこの剣を俺が持ち歩いてる理由だよ」

単純にして明快な圧倒的威力…………　鋼鉄さえ両断する切れ味。

「『ウルスラグナ』　世界最強の剣だ」

「そう　それを捜してたんですよ　僕達」

「「!?!」」

廃墟の家屋の、おそらくは屋根の上から聴こえた声。
同時に僅かに漏れたのは 魔力。

(悪魔…… 気配がまったくしなかった)

レグナは反射的に納めたばかりの『ウルスラグナ』に手をかけた。
高さに互いに斬り込める距離ではないが、警戒するに越したことはない。

「こんにちは 僕は【第5魔王 (Fifth)】エヴァンスと申します

バオウを倒された方ですよね」

悪魔はにっこりと微笑む。邪気なく感じられる柔和な笑みだった。
悪魔で無ければリースは警戒を解いていたかもしれない。

「フィフスだと……?」

「はい 『^{ファースト}First』^{セブンス}Seventh』まで存在する魔王の強さの序列です

僕は『5番目』の強さということになります
あなたの倒したバオウは最も弱い『7番目』 とはいえ彼も魔王にはかわりはないですから、大したモノですよ あなたは」

楽しみに、饒舌に語るエヴァンスの姿はレグナからすれば妙だった。振る舞いが明らかに悪魔らしくない。レグナがこれまで見てきた悪魔はもつと短絡的に破壊衝動に身を任せていた。

だが、エヴァンスの姿は人間のそれがダブるほどだ……

「だからといって警戒を緩めたわけではない。リースも呪文を唱えれば直ぐに震術を放てるように集中している。」

「……『ウルスラグナ』を捜してた。ってのはどうということだ？」

レグナはとりあえず会話を引き延ばすことにした。饒舌なエヴァンスから情報を引き出すことは必要だった。

しかし所詮は悪魔の言うことだ。ただの虚言の可能性も視野に入ればならないのは勿論わかっているのだが。

「やだなあ そんなこと、あなたがわからないはずがないでしょう？ 『ブレイド』」

笑みの端に走らせたのは、愉悦ではなく僅かな狂気。レグナは剣を抜いていた。

「『^{タイラント}暴君』ベリアル』 魔界指折りの実力者である彼を殺害した唯一無二の武器。ぶっちゃんけ恐れてるんですね。『ブレイド（あなた）』と『ウルスラグナ（それ）』を」

ダンッ！！

レグナは別の家屋の壁を使って三角跳びの要領で跳躍し、エヴァンスに斬りかかった。

エヴァンスの言葉が真実だとすれば自分とウルスラグナの所在があきらかになってしまったことは明らかに不味い。

(こいつはいまこっで 消すっ！)

だがレグナが屋根に着地した時には既にエヴァンスの姿は別の屋根にあった。

(速い……)

「まあまあ、そう慌てないでください 順を追って話しましょう
どーせこの距離だと僕にはあなたの剣は届きませんよ」

「……そうだな」

レグナは構えていた剣を下ろした。

『火炎の弾丸!!!』

「!?!」

エヴァンスが予期していなかった方角からの強襲。エヴァンスはリースの存在を認識はしていたがただそれだけだった。それだけ震術師は希少な存在なのだ。

大した威力はなくともエヴァンスは意表を突かれ防御のために一瞬だけ身体を強張らせた。

レグナにはその一瞬で充分だった。

踏み込んだ。確実な間合いの内に入り込む。

閃光のような速度の斬撃が繰り出される。

……エヴァンスはそれをただ後ろに避けた。

「!？」

横薙ぎ、逆袈裟と連続して斬撃を繰り出す。どれもエヴァンスに取って致命のタイミング、致命の間合いのはずだった。

しかし、当たらない。易々と回避が繰り返される。間合いに入つてからのエヴァンスの動きは決して速くはないのに。

なら、なぜ？

「……………」

「ま、長く使うと気付いちゃいますよね 僕としてもこんな早くに見せるつもりはなかったんですけど……」

エヴァンスは後ろに飛び別の屋根に飛び移る。チラリと一瞬リースを見た。あくまで笑みは崩さないのが逆に不気味だった。

「僕の能力は『遅延^{スロウ}』。ありとあらゆる物体の『速度を殺す』力で
す。僕に近づけば近づくほど“速さ”は劣化します」

「っ……っ」

「わかりますよね？ あなたのような“ただの剣士”とこの能力は
究極の相性です。速度の無いに等しいあなたの剣が僕に当たること
はありません」

レグナは死刑宣告を読み上げられた気分だった。こんなタイプの
術を使うやつは初めてだ……

レグナの背には四本の魔封剣があるが、エヴァンスの術はおそら
く4属性のどれにも該当していないだろう。

自分の剣が役に立たないとなると、この場に戦えるのはリースし
かない。

（リースが勝てるはずがない……）

希少な『光属性』ではあるが、見たところリースは自分の意思で
それを引き出すことはまだ出来ていない。

制御不能のジョーカー。都合よく発動したとしてもそれがエヴァ
ンスに効くかどうかは怪しいモノだ。

別の可能性。例えば逃げ切ることが出来ても自分の情報は確実に
他の魔王に伝わる。いまの状態で2人以上の魔王に来られたら確
実にレグナは死ぬ。

いや、そもそも自分一人ならともかくリースを連れて逃げるのは

不可能だ……

「……」

「そう緊張しないでください。話し辛いじゃないですか」

足掻けるだけ、足掻いてやる。剣を握る手に力を込める。

「あ、そっか、『First』や『Second』に情報が伝わることを恐れてるんですね？」

『一之太』「ご安心ください。あらゆる意味で僕はあなたに何もしませんから」

「……は？」

思わず力が抜けた。

「悪魔らしくないんですね。僕

安全圏から他の魔王が倒されていくのを傍観するのも楽しいかなあ
って

まるで人間みたいでしょう？」

エヴァンスは声に出して低く笑った。

「僕が姿を見せた理由はかの『暴君』を倒したというあなたの力量を間近で見たかったんです。やっぱりスゴいですね。ほぼ人間の限界値と言えるステータスです。感激しました」

それでも、まあ……

「っ!?!?」

「僕のほうが強いんですけどね」

レグナは後ろから肩を叩かれた。

反応さえ出来なかった……

振り返ろうとするが、ほぼゼロ距離のため『遅延』がもろに働きそれは異常に緩慢な動作となっていた。

「あ、そうそう この場所に住んでいた住民は南に2キロほど行った場所に隠れてます

それじゃ期待してますよ 頑張つて魔王を倒してくださいね 『ブレイド』」

レグナが振り返ったときには既にエヴァンスは居なかった。

「……消えた?」

「なんだったの……? あいつ」

「わかんねえ…… あんな悪魔には初めて会った」

ただ一つだけたしかなことがあるとすれば、もしエヴァンスが本
気ならレグナの首は簡単に落とせた ということだけだった……

第2話：究極の相性（後書き）

ボツになつた敵方の異名集

：以下はボツにした理由

闇の支配者ダイクロード：闇なんか形ないもん支配してもなあ……

電速の魔剣ゲロリアス：どうやって倒すんだよ

完全破壊メルトダウン：どうやって倒

絶対零度セルシウス：どうや

偉大なる剣グランドセイバー：なんか安直

第3話：最奥の闇（前書き）

あと、ありがとう 半熟震術師 リース

ぐちゃみそになるまで、殺りあおうぜええっ！！！！ 【第六魔

王】 ドレイク

お前の相手は、俺だっ B L A D E

解離と集約 真なる空間の摂理 許されし境界を踏み越え万物を圧
し潰せ ????

首洗って待ってる 伏魔殿に君臨する大鎌の男 グラナ

第3話：最奥の闇

半信半疑ながらレグナとリースは南へと歩を進めていた。

魔王エヴァンス　行動は理解不能だったが嘘を言う理由も特に見当たらず手掛かりが全くないよりは少ない可能性に賭けてみたのだ。

そう長くない距離を行ったところで大きな河に当たった。澄んだ水だった。言うまでもなく生活に水は必需だ。エヴァンスの言葉は嘘ではないようだ。とレグナは思った。

「居るとすれば……この向こう岸を少し行ったあたりだろうな」

「どうして？」

「魔物でも水を嫌うやつつてのは以外と多いんだ　廃墟のほうに魔物が居たんなら河を挟むだけで遭遇の確率はグッと下がる」

「でも　あそこにいた人達がそれを知ってるとは限らないんじゃないの？」

「いや　襲撃を事前に察知して逃げれるだけの魔物に対しての知識を持ったやつがいる、はずだ」

そいつがこの程度のことを知らないはずがない」

レグナが言い切ったので2人は橋を探して歩いた。しばらく歩いたが対岸にそれらしき物はなかった。

そのうち河を呑み込んで広がる密林にさしあたった。

「……オイオイ まさかとは思うが」

密林という場所は魔物の巣窟だ。しかし言い換えるならば食料の宝庫でもあり、生活に必要な資源も数多くある。腕の立つ者はあえて森の中を拠点にすることも多い。巨大な植物は雨露を凌ぐ天然の傘となり、毒草や魔物の嫌がる匂いなどを駆使した疑似的な結界を構築することも可能だからだ。

「この中…… か？」

密林を見上げて呟く。

そこまで考えてレグナは矛盾に気付いた。

【戦人】クラスなら恐らく森の中に拠点を構えようなどとは思わないはずだ。

推測があたつていれば【破壊者】クラスの強さを持つ者が居る。

ならば、なぜあの廃墟となった街に残って戦おうとしなかったのか？

魔王……？

例え【破壊者】であっても魔王を相手に出来る者はほとんど居ない。彼らのほとんどはもっと下位の悪魔を狩ることを生業としている。

多分だがエヴァンスではない。
奇怪ではあるがエヴァンスは積極的に街を滅ぼしたりするタイプには見えなかったのだ。

つまりは……

(近くに別の魔王が居る可能性もあるわけか)

そして恐らくはレグナ達と同様に姿を消した街人達を探している。

「行くか…… リース」

「うんっ」

めんどろなことになるそうだ…… ぼやきながらもレグナは密林に足を踏み入れた。

密林には一応道らしき物があった。が、4〜5年は前に使われていた物らしく短めの雑草に覆われていた。

(なんか、不気味……)

密林に入ってから恐いぐらいに魔物達が突然襲い掛かって『来なく』なった。リースの側から姿が見えていても襲ってこなもので居た。

「ねえ……なんで襲ってこないんだろ」

「この魔物がそこそこ強いからだよ」

なんてことのないようにレグナは言うがリースには益々わけがわからなくなってしまう。

レグナが思うに、彼に襲い掛かって来る魔物はおおよそ二種類だ。ドラゴンのような王者たる自覚ゆえにプライドが引くことを許さない魔物。

食欲と狂暴性だけで行動するがゆえにレグナの強さが理解出来ない魔物。

他の魔物は危険を本能で理解する。

密林という場所で生き残るためには魔物同士ですら勘が必要らしい。

「まっ、気を緩めるなよ　ここで襲い掛かって来るやつが居るとすればかなりの強力な魔物だ」

リースは頷いてレグナの三步程後ろを離れずに歩いた。それ以上離れたら時々口惜しそうにレグナを見送っている魔物にも飛び掛かれられそうな気がしたのだ。

「……見る」

レグナが少し離れたたわき道の地面を指差した。

複数の人間の足跡。それからいくつかの罫の痕跡があった。どうやらレグナの読みはあたりらしい。

「足跡の続くほうへ行こう」

レグナが獣道に入って行く。リースもそれに続いた。

しばらく行くと太い丸太を組み合わせた簡素な橋があった。真下の流れは速いが躊躇わずに渡る。

鬱蒼とした密林の中で、そこだけが青い空を確認出来てリースはつい足元を疎かにしてそれを見上げた。

「え……」

転げそうになり、レグナに手を掴まれる。

「大丈夫か!？」

コクコクと頷く。

別に目眩がしたわけでも、足を滑らせたわけでもない。

ただ、腰を抜かしたのだ。

リースは真上を指差した。

太陽光に目を細めながらレグナもリースの指差したほうを見た。そしてぺたんつと、端の上に尻餅をついた。

「ワイバーン……か？」

翼のある巨大な竜種が、数十m上空ではあるが優雅に旋回していた……

「不味いな…… とつとと渡り切ろう」

レグナは気を取り直して立ち上がる。

木の葉の防備のない橋の上はあきらかに危険地帯だった。ワイバーンはさして凶暴ではないが、桁外れに強い。気紛れに人を襲うこともある。

だがそれはあくまで気紛れだ。

ワイバーンとは魔物というよりは神格化した動物に近い。そういった生き物には魔王ですら手を出さないモノが多数存在する。

というより手を出す意味がないのかも知れない。悪魔と彼らは別段対立しているわけではないのだ。

橋を渡り終えると、今度は数匹のジャッグウルフの群れが通った。二人は咄嗟に身を隠したが匂いで気付かれたのだろう。

一匹がこちらを見て唸った。レグナが剣を抜いて威嚇すると仲間にしたしなめられて去っていく。

「……びっくり箱だな　ここは」

二人は深く息を吐いた。

ジャックウルフは『酔い狼』と呼ばれる種族で戦闘になると引くことを一切しなくなる。仲間が何匹死のうが目的を達するか全滅するまで決して引かない、かなり厄介な魔物だ。

しかしその習性のせいで個体数は酷く少ない。

ジャッグウルフが視界から消える寸前でレグナは突然振り返って

切っ先をかなり奥にある木のほうへ向けた。

「……で、さつきからあんたはなんで俺に武器を向けてるんだ？」

レグナは樹上で長い筒状の物を持っていて、それが端だけ見えて
いる誰かに視線を向けた。やや大きめの声で呼び掛ける。

リースにはまだ見えないので何がなんやらである。

「死角にいるつもりだろうが、殺気を隠さないという意味がないぞ」

レグナがそう言うと言ったのか男は筒を降ろして樹から飛び降りた。背にその筒を背負いなぜかフレンドリーに片手をあげてこちらに歩いてくる。距離は40mぐらいだろうか。レグナ達も若干警戒しながらも歩み寄る。

「失礼 ごく希に人型の悪魔も出てくるもんで、姿形が人間でも一応警戒するサ」

一目で警戒心を解かせるような人懐っこい笑みを見せる赤い髪の男。細身で身長はレグナより少し低いぐらいか。

その様子にレグナも相好を崩し笑みをかける。

「で、あんたら誰さ？」

「レグナ、こっちはリース 東のほうから旅をしてきた旅人だ」

「俺たちはシーク ヘエ……東か まあとりあえずみんなのところへ行くサ 俺っちが案内するサ」

二人はシークの先導で歩き出す。

「……変わった武器だな？ それ」

大剣…… に近いが明らかに違う。どちらかと言つとあいつの

……

シークは足を止めずに首だけで振り返る。

「俺つちとしてはその黒マントの下の、剣6本もなかなか異様だと思つサ」

……どうやって見抜いたんだか

「ここが俺つち達の隠れ里サ」

レグナは驚いて目を剥いた。

森の中に、結界があった。

それも簡易結界のようなチャチな物じゃない、頑強な結界。

「魔法……結界か……？」

現在の主流は『機械結界』と呼ばれる種類のモノだ。

地中に循環する魔力の一部を機械により吸い上げ流れを変え、元々この世界に存在しなかった悪魔や魔物を阻む。

対して『魔法結界』は土地に魔力を定着させてその威力だけで障害する。

魔法結界には構築するためにいくつかの条件がある。

先ず一定以上の力を持った術者の存在すること。

強力な魔力の塊が近くに存在すること。

そして魔力の循環を示す『陣』を描くこと。

かなりの知識と高度な魔術を必要とする難易度の高い術だ。

……といっても人間とは本来まったく無縁の物である。

なぜなら魔法結界は『魔術』だからだ。

魔術、つまり悪魔にしか使えない結界術。それが森の中に堂々と居を構え中に人が生活している。

「……どういうことだ？」

「まっ細かいことは気にしないサ 入った入った」

シークに背中を押されてレグナは結界の内に足を踏み入れる。

「……普通だな」

急拵えで作られたらしい雨露だけを凌げるような簡単な屋根がいくつかあり、その下に何人かが生活している。

結界はかなり広範囲を包んでいるらしく木の実は実か果実などをその内で調達してきたり……

普通の村の光景とあまり変わらない景色があった。
結界を除けば悪魔など無縁の景色だった。

「みんな森暮らしに慣れてないけど、ここは物がいっぱいあるからなんとかなってるサ

北のほうに住んでたときから来訪者なんて初めてだからもてなすサ
っ」

シークは嬉しそうに言って歩き出す。

だがその半分以上がレグナの耳には入っていなかった。

(じゃあ、この結界は誰が……?)

エヴァンス……か？

……違うな。

(あいつはあくまで『傍観者』だ。自分の利にならないことはしない……)

レグナを生かしたのもエヴァンスにとってなんらかのメリットがあったからに過ぎないだろう。

エヴァンスも人間の命を虫けら同然に思っているのは他の魔王と変わらないのだ。

出なければ【Fifth】であるはずがない。

「……まあいいか」

歩きだそうとしてレグナは腰の違和感に気づいた。見るとリースがマントの端をしっかりと掴んでいる。

「どうした？」

「わからない……」

何かを否定するようにリースは首を横に振る。

「でも、さっきの人……なんか」

躊躇うように口を閉じて目を伏せる。

そつと髪を撫でてやると、上目遣いにレグナを見上げて言った。

「……怖い」

「わかった」

レグナもおそらく同様の違和感を感じている。

眼前に魔王がいるような、そんな恐怖を。

「こちら、長老サ」

そんなやりとりがあったことを露とも知らずにシークは相変わらず人懐っこい笑みを見せる。

「どうも 旅人様、満足な宿も用意出来ませんがおもてなしいたします」

枯れ木のような老婆が微笑み軽く頭を下げる。

レグナ達もそれに習い多少の雑談を交わしたあとで、移住の件を切り出してみた。

東に結界のある街があることを説明しそこに移住する意志があるかを訊ねた。

彼女の答えは、ノーだった。

「これだけ大きな結界があれば移り住む必要もないわよねえ……」

と、リース。

だけどそれは間違いだ。

「魔法結界は時間と共に効果が弱まります 術者がこの地に残っていないと半年と立たずに消えてしまうでしょう…… それでも？」

「知っています だけど大丈夫なんですよ」

老婆は言った。

「どういう 「食事の用意が出来たサ」

「お食事に致しましょうか」

彼女が席を立ったことで流れてしまった。

食事の際にもシックがしきりに旅の話をお聴きたがり、結局結界の

ことを聞き出すタイミングを逃してしまったのだった。

夜になり二人は集落の外れにテントを張った。

「……………」

レグナはいつも膝を立て剣を抱えるようにして座ったまま眠る。その姿は目を閉じているだけなのか眠っているのかいつも判別がつきにくかったけど、今日はしっかり寝息を立てているのがわかった。

「……………お疲れ様」

歩幅の違うレグナはずっとリースの歩調にあわせて歩いていた。なんの役にも立てていないリースを守るために。

「あと、ありがとう」

その顔をなんとなく眺めて、リースは寝袋に入って眠ろうとした。

その時だった。

「グオオオオオツツツ！！！！！！！！！！」

耳をつんざく叫び声が夜の闇を引き裂いた。

「……………リース」

目を覚ましたレグナが半ば無意識のまま剣を引つ掴む。

「うん……………」

リースにも直ぐにわかった。

先程の声は昼間聴いた物と同様であり、それよりも遥かに大きいドラゴンの唸り声。

「行くぞっ！」

四本の魔封剣を背負い、ウルスラグナを引き抜いてレグナとリースはテントを飛び出した。

「みんな逃げるサっ！」

シークは叫んだ。

こいつは成龍、なんかではない。

いつの間ここに近付いたのだろうか……………もしかしたらあの二人をつけてきてこの場所を突き止めたのかも知れないが突き止める術はない。少なくとも剣士のほうはつけられるようなノロマには見えなかったが……………

『第六魔王（SIXTH） ドレイク』

人型の、しかし闇に映える淡い光を放つ翡翠の鱗を持つ悪魔
『竜人』と呼ばれる種族の魔王。

「あんだ、しつこいサ……」

街を襲った悪魔もこいつだった。

引き連れてきた数頭のドラゴンが鳴らす微かな地響きにシークが
気付か無ければ住民は間違はなくみな殺しだっただろう……

どうやら前回と違い今度は一人で来たらしい。だからシークも気
付けなかった。

(1匹なら……！)

内心でそう思っていたシークの思考は、次の瞬間消し飛んだ。

「……邪魔、だな」

ドレイクが片腕を振り上げる。

(バカが……何の用意もなしなら腕が消し飛ぶのがオチサ！)

ベキベキベキッ！！！！

唸りを上げて、結界に風穴が開いた。

「っ……」

「なんだ、戦えるのはテメエ一人か？」

興醒めだ。とドレイクの口が動いた。

「!!!？」

同時に爆炎がシークを包んだ。吹き飛び、真後ろにあつた木に背を打ち付ける。

「ハアツ！」

そして横合いから飛び出したレグナが跳躍と同時にドレイクの腕を斬りつけた。

「!!!」

咄嗟に反応したドレイクが腕を下げた。薄い血の筋が走る。

「リリース！ シークをっ」

「っんっ」

駆け寄ってシークに肩を貸し、その場を離れる。

「悪い ちょっと油断したサ……」

「俺の鱗に剣を通すとはな…… テメエがバオウを殺ったやつか？」

ドレイクの瞳が楽しげに輝く。
レグナは舌打ちする。

「エヴァンスのやつ……なにが『何もしない』だ」

「お前……エヴァンスに会ったのか？」

「お前に俺のことを話したのはエヴァンスじゃないのか？」

少し黙ったあとドレイクはめんど臭そうに手を振った。

「やめだ 問答なんてくだらねえ」

待ちきれない、とばかりに解放された魔力は巨大な殺気となって
距離を殺して伝わる。

いまはただ

この戦いを

楽しむうぜ？

「なあっ ニンゲンっ！」

バキィッ！

ドレイクは近場にあつた木に拳を突き立て、へし折り、

「オラァッ！」

無造作に振り回した。

「人間ね……」

対してレグナは左から来た樹を初太刀で幹を切断し、2撃目に柄で慣性に従いそのまま飛来した先端部分を叩き落とす。

即座に間合いを詰め、振り抜いたドレイクの剥き出しの身体に――閃する。

「痛……」

ドレイクの肩辺りの肉が抉れる。

「『ブレイド』だ、覚えとけ」

「！」

2撃目を繰り出すレグナより僅かに早く、ドレイクが木を振り抜いたままの勢いで半回転した蹴りを繰り出す。

そんな大振りの技に当たってやる義理もなくレグナは後方に跳躍し蹴りから逃れる。

その蹴りが別の木に当たり、木が粉々に碎け散る。

(なんて莫加力……1撃でも当たればヤバいな)

「なるほど…… 『ブレイド』、か」

正攻法だけじゃ難しい……か

呟いたドレイクがパチンっ、と指を鳴らした。

火花のような小さな火がレグナに向かって打ち出される。

(なんだこれは……?)

ウルスラグナでそれを打ち払おうとすると、寸前で

ドゴオンっ!!

はぜた。

「っ!?!」

ギリギリで手を翳して目だけは守ったが、耳は当分効きそうもない。ダメージも小さくはない……

2発目の火花。

同時にドレイクが間合いを詰める。

レグナは『炎属性の魔封剣』を抜いた。

ドゴオン！

「何っ!?!?!?」

爆発が魔封剣を貫通した。

レグナは爆発をモロに受けてしまいよろめく。

拳が目前に迫る。

「くっ……」

かわせない……！ 咄嗟にそう判断したレグナはウルスラグナを
引き上げて衝撃に備えた。

ゴキイツ

(!?)

しかし予想以上の衝撃に堪えきれずに数本の木をへし折って吹き
飛ばされた。

「死んでねえ……な」

好敵手の生存を確信してドレイクは口端を歪める。
まだ遊べる。そう思うと彼は楽しくて仕方がなかった。

だが先ずは、

「前菜、済ましちまうか」

並みの【戦人】では反応不可能な速度での突進。

レグナだからかわせたその速度の先には、シークを置いて戻って
きたリース……！

「っ……」

間一髪で『リフレクション』を起動する。が、

べきいっ！

(そんな……な……術もなしで……)

ただの素手の一撃でドレイクは『リフレクション』を砕いた。

そのまま鳩尾に拳が食い込む。下段から突き上げられるように打ち出された拳にリースは吹き飛ばすことさえ許されずに、血液の混じった胃液を吐き出す。

「……生半可に障壁に守られて死ねなかったか」

吐血し、地をのたうつリースを一瞥しつもらなさをそうに言う。

「苦しいだろ　いま楽に　!？」

ドレイクは殺気を感じて飛び退いた。

ドスンッ！

一瞬前までドレイクが居た地面に投合された魔封剣の一本が突き刺さる。

(ほっ……)

「お前の相手は、俺だ」

レグナから明確な殺意が、ビリビリと空気を震わせる圧力として伝わってくる。

ドレイクは歓喜する。

戦いはそうで無ければならない。

ドレイクが求めるのは純然たる闘争だ。

圧倒的な強さで打ちのめすのではなく、極限の命のやり取りの中で初めて快樂は見い出せるのだ。

「ぐちゃみそになるまで、殺りあおうぜえ　『ブレイドオッ!』」

朦朧とする意識の中で、リースは見た……

(悪……魔………?)

ドレイクではない。

『ブレイド』が、悪魔に見えた。

たった一瞬だった。次の瞬間にはレグナの姿に別段変わったところはなく、それはただの幻覚だったのだろうとリースは思った。

ぼっ……

何かがリースの頬を打った。指で拭くとそれが水滴であることがわかった。

(雨………?)

冷たい水の感触でリースはなんとか意識を保つ。

(あの燃焼は、変だったサ………!)

シークは考える。

(どんだけ炎が強くて、あんな小さな炎がいきなり爆発したりはしない………)

少しでも助けになる可能性があるなら、

「黒雲 停溜と放出 我が魔よ 大いなる自然が機構に僅かに干渉せよ」

シークは術式を広げる。

「俺っちあんま“水”は得意じゃねーけど、降るサ！」

「……………雨だっつ」

ドレイク的能力は『塵』^{ダスト}だ。ドレイクは魔王にして魔法が得意ではない。魔力量が大きすぎて不安定なのだ、とかつて『Second』に言われた。

だからこの能力で空中に塵を浮遊させ『粉塵爆発』という現象を引き起こして爆炎を行使する。

魔封剣は『魔力によって生み出された炎』は斬ることが可能だが、『その炎によって生み出された爆発』までは斬ることは出来ないのだ。

(この雨、偶然……………か!?)

ともかく『塵』が全て叩き落とされて、ドレイクは満足に炎を行使出来なくなった。

ズウウン！

レグナが肩のベルトを外すと背に固定していた3本の魔封剣と4本の鞘が落ちて地面に食い込んだ。

（こいつ、いったい何キロ背負って……！？）

ダンっ！

刹那と時間を置かずレグナは地を蹴った。

（はええっ！）

ドレイクは斜め下から斬り上げられた切っ先を、半歩下がって紙一重でかわす。更に踏み込んでの2撃目の唐竹割り。寸前で身体を捻りこれもかわした。そのまま側面に回り込み側頭部に向けて拳を繰り出す。

レグナの姿が突然、消えた。

（下っ……！？）

深く身体を沈めたレグナが逆袈裟に一閃する。

拳を突き出した不安定な体勢ながらも踏み込んだ右足に無理矢理に力を込め斜め後ろに身体を倒すことに成功した。逆の足で体勢を

立て直しレグナの足を狙って蹴りを放つ。

レグナはそれを易々と真横に跳び回避。離れ際に伸ばされた足に向けて一閃する。

「ちいつ……浅いか」

「くっ……」

左半身と脛に血の線が浮かぶ。

深くはないがけて浅くもない傷。

(致命傷以外は眼中にねえ、ってか)

心中で毒づき、再度加速するレグナの突きを上体を僅かに逸らし
てかわす。剣先が脇を掠めるがそれを無視して左腕を振るう。唸り
を上げてそれは、空を切る。

刹那前に真上に跳躍したレグナがドレイクの顎を爪先で蹴りあげ
る。鉄板でも仕込んでいるような衝撃がドレイクの脳を揺らす。

空中で無理矢理身体を捻り右手の剣を斜め下に見える首筋を目掛
けて振るう。

瞬間、ドレイクが地に伏せるように沈んだ。

「っ！」

剣先がドレイクの髪を掠める。レグナは左の剣を降りおろそうと
する。しかしそれよりもドレイクの跳躍のほうが早い。

身体を捻り繰り出された膝蹴りが肋骨に突き刺さりへし折る。重
力に逆らって再び浮き上がる身体をドレイクが腕を掴んで引き留め
る。

「オラアッ！」

荒々しい叫び声と共にレグナは離脱を試みるよりも速く真下の地
面に叩きつけられた。

「かつ……」

圧迫を受けた肺のなかの酸素が全て排除され小さく無益な悲鳴が
あがる。投げられたと、理解するよりも意識がブレるほうが先だっ
た。吸い込め、命じると霞む視界に誰かの腕があった。

その様は死が口を開けて自分を待っているように見えた……

『リフレクション！』

「！？」

しかしその腕が降り下ろされることはなかった。リースの起動し
た震術による壁が、加速するよりも手前で拳の威力を押し殺したの
だ。

す……すき？……隙……隙…… 脊椎反射よりも速くレグナの

身体は反応した。倒れた体勢のまま目の前に見えたドレイクの首筋

を目掛けてウルスラグナを投合する。

(ヤベエ……)

ドレイクはよろめいた。リフレクションが解けた瞬間に勢いあまり転倒しそうになった。投合された剣を回避出来たのはただの偶然だった。

「……つぶねえ」

後方の地面にウルスラグナの片方が突き刺さる。

ドレイクはなんとか踏み留まり不安定な体勢を立て直そうと2、3歩フラフラと千鳥足で動き、地面をきつちりと踏み締めた。その隙に全身のバネをフルに行使してレグナが間合いを離脱し、虫の息の金髪の女を庇うように立つ。

「……捨てとけよ」

「……、？」

「認めてやる。テメエは強い、少なくともその女から俺を逸らすような動きを無くせば俺様と、少なくとも互角には戦えるはずだ」

「……それじゃ意味がないんだよ」

「あ……？」

「『刃』は敵を斬るために振るわれるんじゃなく、その後ろにある

物を守るためにあるんだ」

死の恐怖を押し伏せることは独力では不可能だ。とレグナは知っている。

一人の意志は弱く、容易く折れる。

決意は、覚悟は、
そこに背負う誰かから受け取る物だ。

「くだらねえ……」

…わからないか？ だからお前は死ぬんだぜ……？

いままでで一、二を争うほど痛快だった時間を終わらせるべく、

ドレイクは息を吸い込み肺に限界まで空気を溜め込む。

竜人の容量は人間のそれよりも遥かに大きく風船のように身体が膨らむ。

「つつ……」

そして、吐き出した。

ドレイクの身体が膨らんだ瞬間から、回避は不可能だな……と、レグナは思考を開始していた。

龍種とは何度か戦ったことがあり、その『吐息^{ブレス}』こそが彼らの最大の切り札であることも知っている。

が、放たれたそれはレグナの知る『ドラゴンブレス』のどれともそれは違った。違い過ぎた。

肺の中で『粉塵爆発』により爆発的に高められた炎が、吸い込んだ酸素により助燃されさらに魔力と混合し超圧縮された、『ドラゴンブレス』が直線上の全てを薙ぎ倒して猛進してくる。

あまりにも魔力の量が大きすぎる。もしかかせたとしても後ろにリースもいる。

(出来れば頼りたくなかったが……)

レグナは剣のはらに掌を沿わせた。

《一之太刀 刃神》

ウルスラグナを両手持ちに構えて、ブレスに突っ込んだ。

「オオオッ!!!」

ずどおおんっつ！！！

「はっ……ははっ……」

信じらんねえ……

ドレイクの『ドラゴンブレス』は魔王の魔術と竜種の元々持つ特異な能力を混合させた最大の切り札だ。

ワイバーン、セラフィム、サタンウォーグ。

『ドラゴン』がこれらの“神獣”を差し置いて『最強の生物』と呼ばれるのは地上最強の攻撃、ドラゴンブレスを持つからに他ならない。それに独自の改良を加え魔王としての魔術をミックスした超破壊閃光。威力だけならばかつてみた『Second』の最大魔術にすら負けないと自負している。

それを……

生身の人間が、

斬りやがった……

「1ついいかい？」

守るための、刃……か

「エヴァンスといいお前といい、なんで俺より強いやつは腹の立つクソ野郎ばかりなんだ？」

ずしゃっ……

ドレイクの上半身だけが、残りの半身を置いて斜めにズレた。

「立てるか？ リース」

「ん…… なんとか」

「そうか、俺は無理だ」

レグナはがつくりと膝を折りそのまま地面に突っ伏した。リース

が慌てて駆け寄る。がこちらも蛞蝓のように鈍い。

「くそっ……年だな」

たしかベリアルのは時は2、3発は撃てたはずだ。6年間のあいだに錆び付いたか……

レグナは自嘲気味に笑みを浮かべ、吐血した。

「……………あれ……………？」

思ったよりダメージは深刻らしい。
あの膝蹴りで骨が何本か逝ったか。

「あー……………くそ……………」

喉の奥に血が詰まりそうだったので横を向いて耳を地面につける。
そうすると複数の足音が大地を踏むのが聴こえてきた。
集落の人間が戻ってきたのだろう。

助けて貰うか……

何気なく足音のほうに視線を向けて、

(！?)

レグナは無理矢理身体を起こした。

「っ……………こんなときに　よりによってジャッグウルフかよ……………!!」

狼の群れが二人を取り囲むように動く。

構える。が、『刃神』を放った自身に既に満足にそれを振るうだけの力が残されていないのはわかっている……

「リリース お前は……逃げろ あのシークって野郎連れてこい」

「嫌っ……わたしも、戦うよ」

よろけながら言われても死体が2つになるだけだ。

(絶体絶命……)

「あの……連れてこいって言われても俺っちもうここにいるサ？」

木陰から聴こえてきた声に、レグナは肩から力を抜いた。

「……はぁ」

おもわずため息を吐く。

「あ、心配しなくてもあんたら恩人だからちゃんと助けるサ」

飛び出したシークが何も無い空間に剣を突き出す。と、空中に何かの紋章のように見える模様が広がって行く。

「解離と集約 真なる空間の摂理 許されし境界を踏み越え万物を

押し潰せ」

『群がる弾圧』
スウオーム・スウオーム

周囲の風が、剣先の一点に向かって猛烈に動いた。
ジャックウルフは一匹残らず空間の一点に圧縮され、互いの身体をぶつけあいながら絶叫する。

(これ……《風の魔術》!?)

シークが大剣を担ぐように構え、それが 変形した。

「《機械仕掛けの神 (デウス・エクス・マキナ)》起動っ！」

振り下ろす。

同時に光線状のエネルギーが放出され、巨大な刃になり密集させられていたジャックウルフの群れを一撃で消し飛ばした。

「一丁上がりサっ」

変形していた剣が元の形に組み直される。

「……やっぱり【半神】ハルムシか」

「デミ……ゴッ……ド……?」

「そ、俺たちは特別製 だけどみんなが逃げ切る前にこの力は使いたくなかったのサ」

リースとレグナに向かって剣ともう片方の手を翳す。先程と別の形の魔方陣が浮かび上がる。

「……ここで俺っちが最大魔法発動したら、あんた確実に死ぬサ」

リースの肩が微細に揺れる。

レグナは微動だにせずに平坦な声で言う。

「《機械仕掛けの神》で突き刺されても死ぬだろ さっさとやれ」

「……つまんないサ」

魔方陣が光を放った。すると、

「あくまで応急措置 痛んだらまた言うサ」

2人の身体から傷が、消えた。

少なくとも外傷は全て。

「か……活性化治癒震術……？ 魔術と震術を、両方使えるの……！」

魔術はともかく、震術はけして人間にしか使えないということはない。
魔物や悪魔にも震術を行使するモノは多く存在する。

ただ技術や適正において人間は他の種族を凌駕する。

魔法への理解、陣の解釈、操ることの出来る言語の総数。

悪魔ですら震術という分野に置いて人間を越えることはない。
だからそれらを組み合わせ、駆使して人間はこれまで悪魔を退けてきたのだ。

『活性治癒術』 早い話が『回復魔法』はそうした他を凌駕した、人間のみが使える高等震術のはず。

彼は魔術を行使出来る存在でありながら、それを使った。

つまり…

「『半神』って……人間と悪魔の……」

「そ、混血サ みんなには内緒にして欲しいサ ビビらせたくないから」

リースが真っ先に思ったのは、敵か？、味方か？ だった……

味方に決まっている。

現に彼はレグナとリースを助けたではないか。
それでもリースは、人間は疑ってしまう……

「……いいサ 慣れてる」

視線の意味を察したシークが先回りする。

「う……うめんなさい」

「みんなのとこ行くサ」

シークが微笑む。微細な痛みが滲んだ気がした。

レグナとリースは一晩泊まり、そこを出た。

「俺達と一緒に行かないか？」と、レグナはシークを誘ったが彼の答えはノーだった。

「俺たちは昔、ベリアルが攻めてきたときに魔族の血のせいで元いた街を追われた。ここの人達が拾ってくれなかったら死んでたサ

俺たちはその恩を返したい……だからここを守るサ」

「そうか」

「代わりにいいものあげるサ」

と言って丸まった紙のような物を渡された。

開いて見るとそれは地図だった。

「もうこんなところまで来てたんだな……」

「ん ぞじぞじっ」

レグナの広げた地図をリースが覗き込む。レグナは現在地を指差して言う。

「近くに《城壁都市ヴァルクリフ》がある 装備もボロボロだしと
りあえずはそこを目指そうか」

バンデモニアム
伏魔殿

レグナ達が居る地から遙か南にそう呼ばれる1つの大陸がある。
そこはかつて『暴君』^{タイラント}と呼ばれた1人の魔王が君臨した大陸だった。

「いい場所だな」

水平線に昇る朝日を眺めて大きな鎌を持った男は嘲笑とも取れる
笑みを浮かべる。

男は地上の人間が希望の象徴とするあの太陽を、黒く塗り潰すところを想像する。

「はっ」

正面から太陽を見据えて子供が手のひらの血管を透かすように手を翳し、握り潰す。

(首洗って待ってる)

心中で宣言する。

1つの世界に向かってそのセリフを吐くだけの力が、その手にはあつた。

「グラナ」

「あ？」

名を呼ばれて男は特におもしろくもなさそうに首だけを動かす。

「……セカンドSecondか」

そこには服装から髪や肌まで、なにかもが色素の薄い白い女と、たしかドレイクが使い魔にしていた一頭の飛龍が居た。

Secondと呼ばれた白い女は連れていた龍を飛び立たせ、グラナの隣に立つ。

「端的に報告だけするけど『Sixth ドレイク』が死んだわ」

「……なに？」

「最奥の闇が動き出す。」

第3話：最奥の闇（後書き）

いまだから言える話。

初期のタイトルは『半熟魔導師と天才剣士』だったこと

『ブレイド』は女でレグナはその弟子だったこと

その『ブレイド』はゴミ屋敷に住んでてゴミ溜めから『ウルスラ
グナ』を引っ張り出してくるのが第一話だったこと

シークとレグナの性格は逆だったこと

まだあるけどとりあえずはこのくらい

第4話：【大震】（前書き）

#&*@§

半熟震術師 リース

1人の力で救える人間の数なんてたかがしれてるんだよ
のりトル 怠け者

さて、光の術者と言ったな？ 大陸最強の震術師 スティア

あなたには指一本触れさせん B L A D E

わ：私は悪魔の奴隷になどならんぞっ！ ベル・バークライト

あれ もしかして死んじゃいました？ 【限り無き炎】 ゼクウ・
ファイアレス

第4話：【大震】

「ばちいっ！！！」

電流がはぜたような音でレグナは目を覚ました。

いまは夜、レグナはテントの中に居る。リースはまだ静かに寝息を立てている。

レグナはテントの中を見渡す。灯りは切つてあるしそんな音を立てるような物は元々テントの中には存在しないはずだ。

と、なると可能性は1つしかない。

(外の……簡易結界が破られたか……！)

ウルスラグナを抜きテントを飛び出した。

そこには全身が赤く光る人型の悪魔が居た。

「いーこと教えてやろうか 剣士くん」

レグナを見て次にその武器に目を移して悪魔は薄く笑う。

「俺の血液は灼熱の温度だ 並の剣なんかを溶かしちまって効かねえぜ」

躊躇いなく踏み込んでレグナは悪魔を一閃した。

「バカが せっかく忠告してやつ……た の………に……？」

並の剣ならたしかに灼熱の温度に溶けてしまっただろう。だがそれはあくまで『並の剣』の話だ。

「悪いな、『ウルスラグナ』は普通じゃないんだ」

噴き出す灼熱の血液を回避すべくレグナは後ろへ跳んだ。

「はぁ………」

レグナ・ゼオングスは憂鬱だった。

朝、あたりが明るくなってから簡易結界をきちんと調べてみたら見事にぶっ壊されていた……

「ヴァルクリフに技師が居ることを祈るしかないな」

簡易結界の値段は桁外れに高い……

下手をすればそれだけで家一軒を買ってしまったりする。

一介の旅人であるレグナとリースにそんな金があるはずもなかった……

「まあ、目的地に近かったのが不幸中の幸いか」

《ヴァルクリフ》

世界最大の結界を持つためその街は城塞都市と呼ばれ、その北にある王国の守りの要だ。

当然入国管理などもされているがレグナ達は武器を持ったままそれを容易にすり抜けた。

「【破壊者の証】だ」
バスターライセンス

レグナが自分の鎖骨のあたりを示し門番がそこにある入れ墨のような物を認めた。ただそれだけで。

「ねえ ヴァルクリフってすごく審査が厳しいって聞いてたんだけど……」

門番から1つずつ手渡された小さな筒みたいなものを眺めてリースが首を傾げる。

「非常時だからな バスターはライセンスさえ示せばだいたい場所に入りが許されてるんだ
ただ発信器を手放すと直ぐに憲兵が飛んでくるぞ 風呂に入るときと寝るとき以外はその筒、手放すなよ」

「わかった」

「さて……久々の街だが、何かしたいことはあるか？」

「お風呂入りたい！」

「……だろうな 今日休んで、動くのは明日からにするか」

逆ではないだろうか？ とリースは頭を抱えてみた。ちなみに彼女は既に湯上がりホカホカである。

【破壊者の証】を見せれば格安で泊まれたのだがそれでもお金の節約に2人で一部屋 というのは既に慣れていいるからあまり抵抗はない。

ベッドが1つしかない なんてお決まりのパターンも存在せず
にフカフカの柔らかそうなベッドが2つ並んでいる。

彼女の頭を悩ませているのはそんなことではなかった。

レグナが、お風呂に入っているのだ。

これを、覗くべきか、覗かぬべきか……！

そんな葛藤をいざ知らずにレグナは湯にひたり眩く。

「限界、近いな……」

しほらくこつて

「……………」

風呂場を出たところでレグナは困惑した。

「……何をやってるんだ リース」

レグナのそれは純粹に脱衣場で踞るリースを案じての物で決して他意はなかった。そこには一欠片の邪気も込もっていないからだ。だが頭上から聴こえた声にリースは思わず顔を上げて、そこにはレグナの顔があり腕があり足があり胴体があり

「#&*@§」

リースは悶死したのだった。

翌日。あのあとリースが盛大に鼻血を噴いてぶっ倒れた、とかそんなことはおいといて、ともかく翌日。

「まずは道具屋を当たろうか 技師が居るなら紹介してくれるだろう」

完全に外敵の心配のない寢床は久々で昼まゆっくりと睡眠を取ってから二人は宿を出た。

レグナにある程度の土地勘があるらしくそう歩き回らずに道具屋は見つかった。

適当に買い物をしたついでと言った口調で訊ねたレグナに道具屋

の主人は快く答えてくれた。

「簡易結界の修理かい？ それなら『怠け者のリトル』を訪ねるといいよ 仕事は遅いが腕はたしかだ

あー 彼女、仕事が嫌いでも居留守を使うから10〜20分は粘る覚悟でノックするようにね」

「わざわざすまない」

軽く頭を下げてレグナは道具屋を出た。しかし違和感を抱いて振り返る。

「リース！」

「はひいっ！」

店の中で【よく効く媚薬】のコーナーを真剣な目付きで眺めていたリースが小さく飛び上がった。

こんこん

「リトルさん」

こんこん

「リトルさん 居たら返事してくれ」

「こんこん」

「リトルさん 居るんだろー？」

「…… 5分経過」

「げしげしっ」

「リトルさん 早くでやがれ」

「…… 10分経過」

「ドンドン」

「リトルさん 扉壊していいかー？」

「…… 20分経過」

「リース 下がれ」

「え？」

「叩き斬ってやる……！！」

「ガチャッ」

「ちよつと君、人ん家のドアに何しようとして、……」

扉を開けて出てきたいかにもだるそーな言葉使いとだるそーな目

付きをした女とレグナは、お互いに何か理解不能なモノでも見たかのようにその場でフリーズした。

「……ブレイ……バー……？」

呆気に取られた口調でレグナが呟き、

だんっ！ カチ

……凄まじい勢いでドアが閉められ鍵がかけられた。

「ちょ……ちょっと待っててっ 化粧してくるからっ！」

あーもう髪型があ、あうっ ゴミ散らかってるし……… なんて来るなら連絡くれないんだよおっ！

……ドア越しにそんな独り言が聴こえてきたのだった。

「レグナ 彼女……知り合い？」

「ん……まあ 知り合いというか、なんというか……」

レグナは困り顔で後ろ髪を書く。

「あれが【銃の王】^{ブレイバー}だ」

……それは行方不明の『四人の王』の、1人に与えられた称号だった。

それから更に20分後

「お お待たせ……」

17〜8歳にしか見えない少女がおそろおそろと言った感じで改めてドアを開く。

伸びすぎな髪はとりあえず…… と言った感じでポニーテールにされていて前髪は前分けにされて頬が隠れている。荒れた肌の上に乱雑に化粧が乗っているがそばかすが隠れ切っていない。

だけどそれでも…… 美人、いや 160cmに少し届いていないリースよりも背の低い彼女には『かわいい』という表現のほうが正しいだろうか。

「……待たせすぎだろ」

レグナが呆れ切った顔をする。

「う……うめん」

「はあ…… 普通、昔の戦友を1時間近く玄関の前で待たせるか？」

口調と裏腹にレグナは楽しそうに、少なくともリースには見えた。

(む…… ライバル出現?)

そんなリースの様子に気付くはずもなく『怠け者のリトル』は眉に微妙に皺を寄せて、だけどその口元はやっぱり嬉しそうに背の高いレグナを見上げる。

「だからごめんって…… 散らかってるけどとりあえず上がった」

…リビングに招かれて、二人は先ず困惑した。

床に埃が積もってる上に、なにやら室内が金属臭いのだ。足を前に進める度に何かの繊維や砂のような細かい粒子が舞い上がる……

「お前よくここで生活してるなあ……」

「住めば都だよ」

呆れ顔のレグナに微妙に用法が違う気がする諺を言い親指をぐっと突き上げて満面の笑みを浮かべるリトル。

そんな二人の様子にリースは内心おもしろくなかった。

(わたしといたら仏頂面なのに……レグナなんか楽しそう)

てゆうか……あれだ。

『銃の王』 つまり6年前の勇者の1人なら少なくともレグナと同じ年ぐらいのはずだ。

……すごく若く見えるのは気のせいだろうか？ どちらだろうみても二十歳を越えているようには見えない。

「しつもん」

リースは手をあげた。

「ん なに？」

柔らかい微笑を浮かべるリトル。その仕草はやっぱりどこかに幼さがあるような気がする、と年下のクセにリースは思う。

「あんた何歳？」

「……………いくつだっけ？ 今年で……………1……………8？」

ああそうそう18歳ね……………じゃあ六年前はって、

「18歳っ?!」

「うん、多分」

なんてことのないようにリトルは頷くがベリアルを倒したときの年齢を逆算すれば、12歳ということになる。

「こいつが大戦に参加してたのが11〜12歳の時でたしか【小さな勇者】リトルプレイヤーって呼ばれてた、よな？」

「不本意だけど」

頷く。

(12歳でもう戦ってたんだ……………)

「っーか……………悪い 俺、お前のこと男だと思ってたわ」

「ガーン……………」

ガックリ項垂れるリトルを横目にリースはレグナの死角で小さく

ガッツポーズを作る。

「にしても『リトル』ね 本名を名乗るのが嫌いなのは知ってるが……」

「え 偽名なの？」

「……名前訊かれて咄嗟に出ちゃったんだよ」

不服そうに口を尖らせる。

どうやら『リトルブレイバー』の前半部分を口走ったきり“リトル”を払拭出来なくなってしまったらしい。

「いいんじゃないか、『リトル』 似合ってるぞ」

レグナがからかうとリトルは顔を真っ赤にした。

「うっ……あんまりだ」

キツ、と目付きを細くしてレグナをにらみつけるがその拗ねた顔付きがまた童女のようで、

「ぶっ……」

レグナが嘔き出す。

「……笑ったね？」

リトルが言葉に怒気を孕ませる。

(！)

自身に向けられたモノではない、傍目のリースにもわかるほどの殺気

刹那、リトルが懐に手をやり、何かを抜き払うように動かした。

レグナは咄嗟に剣を抜いてそれを防ぐように構える。

(ウソッ……)

リースは戦慄した。

弾丸に近い速度のバオウの『水棲の蛇王 (ダイダロス)』を見切り、

人間を遥かに超える身体能力を持つドレイクと互角の肉弾戦を繰り広げた、

『ブレイド』の防御よりも、

目の前の少女の抜き打ちは速かった。もしもそこから銃弾が発射されていたとすれば、レグナは確実に死んでいただろう。

「……腕は鈍ってないか」

少女の手に『何も握られていない』ことを確認してレグナは剣を納める。

「もちろん まあ僕はもう『破壊者』は引退したんだけどね」

「…………！」

「この街は安全だし」

「っ…………あんた………… 戦える力があるのにどうしてっ!? ここ以外に困ってる人はたくさんいるのにな」

「1人の力で救える人間の数なんてたかが知れてるんだよ レグナはどうか知らないけど僕はもう戦うのは嫌だ

【銃の王】だからって別にそんな義務もないしね」

「…………それがお前の答えか」

「…………うん」

「そうか」

レグナは頷いただけだった。

「あ…………そうだ 簡易結界の修理ってどれくらいかかる?」

「簡易結界? ちょっと時間かかるよ 3日は欲しいかな? あ、君からお金は取らないから安心して」

「悪い、頼むわ 邪魔したな」

壊れた簡易結界の入った荷物をおろしてレグナは玄関へ踵を返す。リースはリトルを一瞥して、振り返りそのあとを追った。

「……腕は鈍ってない、か」

「レグナさん……？」

大通り。雑踏の中で名前を呼ばれた気がしてレグナは振り返った。

「やっぱりレグナさんだ 僕ですよ、覚えてないですか？」

軍服を着た少年が、その後ろに十数人の兵士を引き連れて片手をあげる。

……背の低いクセに煙草をくわえていて隣の女兵士が

「何度言ったら止めていただけるんですか!？」

と噛み付いて来るのを鮮やかにスルーしている。

「……ゼクウ、か？」

「貴様つ、無礼な!」

「待って」

いきり立つ女の兵士の前にゼクウと呼ばれた少年が片手をつき出して制する。

「しかし、ゼクウ様！」

「ゼクウ様が 偉くなったもんだな」

「つつ……」

女が懐の剣に手をかけ、

「やめろって言ってるだろ？」

ゾツとするような冷たい目でゼクウは女を睨んだ。空気が熱を帯び、その影響で対流現象が視界を僅かに歪ませる。

（火炎系の震術！ それもすごい使い手だ……）

「す………すみません」

「うん、いいよ」

軍服の少年はあっさりと矛を納める。

「お前、その服………」セイバー『大震』に入ったのか？」

「うん 去年からね」

「………じゃあ『星の隷属者』アストララルもここに居るのか？」

「いますよ いまは多分、詰め所のほうに」

「丁度いいところであつた 会わせる」

「構わないけど、珍しいね 彼のこと嫌いだったんじゃない？……？」

「まあな」

『セイバー
大震』という王国の一部隊がある。

構成人数はたった4人。しかしその名は『王国最強』と広く知られ、6年前の戦争のときも『四人の王』に匹敵する力を振るつた部隊でもあつた。

そして四人の頂点に君臨する術者が『星の隷属者 スティア・クロイツ・マグナビユート』だつた。

が……

「……酷い有り様だな」

「笑いたいなら笑うがいい」

両手足に包帯を巻きベッドに横たわるがスティアが自嘲するよつに言つ。

「ゼクウ」

「ん 何？ 僕、視察の続きが…… ゴンツ！」

「あぐつ……」

「煙草それを寄越せ 未成年だろうが、貴様」

「うう…… 職権乱用……」

吸っていた煙草がゼクウの手の中で燃え上がり、差し出されたスティアの手のひらに煙草の箱を乗せる。

「……まだあるだろう？」

「じゃ、僕はこれで！」

ゼクウはくるりと180度回転し、全力で逃げ出した。

「……まったくあいつは」

「相変わらず、だな」

レグナが苦笑する。

不意に表情を変えた。

「お前はいままで何をしてた？ 『大震』は1人も魔王を倒す動きを見せていないらしいが」

「話したところで貴様のような一介の破壊者にはわからん話だ」

「政治的な干渉か？」

「……くだらん」

「その怪我はなんだ？ 『王国最強の震術師』がどうしたってんだ？」

「……Secondを名乗る悪魔と交戦して、負けた」

「お前が?!」

ステイアが舌打ちする。

「……で、貴様はなんのようだ？ 貴様に限りまさか見舞いではあるまい」

「あー、1ヶ月ほどでいい 俺の連れを預かってくれ」

蚊帳の外に居たリースが凄まじい勢いで顔をあげる。

「……貴様が私を頼るなどという風の吹き回しだ？」

「『光』の術者だ」

「ほう……」

「ちょっとレグナ!？」

半泣きでポカポカ叩いてくるリースの頭を片手で抑える。

「……大丈夫だとは思うが『喰われる』なよ」

「……それほどか？」

「『九重の水破王ヤマタノオロチを打ち消した って言えばわかるか？」

「エンドクラスの魔術を？ なるほど……たしかに異常だな しか
し 『警戒警報LV2を発令 結界に悪魔の接近を確認、繰り返し
します

警戒警報LV2を発令 結界に悪魔の接近を確認！』

「ちっ……またか 話の腰を折りよって……」

「なんだ？」

「悪魔さ このところ多くてな」

ステイアは傍らの無線のスイッチを入れる。

「こちら『星の隷属者』だ 認証コード『765 Ta Abyss
Le Sinfonia Es 5980』守備隊聴こえるか？
……OK、認証した 『大震こぶ』からはゼクウを出す それから『
破壊者』を1人増援に行かせる 間違ってもそいつとは敵対するな
以上だ、それまで持ちこたえろよ」

「アストラル……？」

「そいつは預かってやる、から代わりに私のために働け こちら猫
の手も借りたいほど忙しいんだ」

「……わかった」

「待て、ウルスラグナは置いていけ」

「なぜだ？」

「それがお前の手元になれば我々はお前を止めるすべを持たん
それなしでようやく対等だ」

レグナは少し考えたあと、

「わかった じゃアリースに預ける
勝手に変な研究に使ったら……」

魔封剣の一本を抜き払い『アストラル』の首に突き付ける。

「我々は貴様を敵に回せると思うほど傲慢ではないよ
そら、さっさと行くがいい こうしているあいだにも守備隊は傷を
負っている」

本格的に泣き出しそうなリースを置き去りにしてレグナは走り出
す。

「……さて、光の術者と言ったな？」

「っ……っいつ、強い……！」

ヴァルクリフ守備隊は形勢不利だった。元々、力で悪魔に劣る守備隊は『呪縛の術式』を展開し動きを封じた上で掃討することを定石としていた。

が、おそらく集団の長であろうイグザードと名乗る翼のある悪魔が『呪縛の術式』を強硬突破したのだ。

「退避！」

たった一体の猛威を前に部隊長が叫ぶ。

(いける……！)

イグザードは確信する。この人数ならば『大震』が出てくるまでにカタをつけられる。『大震』はあとでノコノコ出てきたところを数で押せばいい。

「！ 新手か……」

そんな打算の中に1人の剣士が疾走してくる。

イグザードは術式を展開、風の大槍を発動しそれを迎え撃つ。が

……

ばきんっ

鈍い音を立てて風が、砕けた。

「っ!？」

4本の魔封剣を所持しているレグナには一切の純魔法攻撃が通用しない。

もし回避されても数秒は足を止めれるはずだ、そう踏んでいたイグザードの注意は既に半ば他の人間に向かっておりレグナへの対応は酷く緩慢なものだった。

ざくっ!!!

一閃。

たったそれだけで一部隊を苦戦に追い込んだ悪魔の腕が落ちる。

2撃目 !

イグザードはそれを回避する術を持たなかった。

…だから、もう片方の腕を盾にした。

「ぐっ……」

鮮血を撒き散らして腕が落ちる、が腕が邪魔になり剣速は鈍る。激痛が身体を跳ね回るが気にしている余裕はなく、イグザードは後方に翔ぶ。

当然人型の構造上、バックステップよりも前進のほうが速い。だがイグザードは魔術の助けを借りて自身の翼に風を浴び加速した。

イグザードは風に乗りそのまま上昇する。

(逃がしたか……)

レグナは咄嗟に魔封剣を投合しようとしたが既にイグザードは遙か上空に逃れていて追撃を諦めた。

2閃。レグナのリーチに入った魔物が唐突に崩れる。

(とりあえず残党のほうを狩るか)

守備隊と連携を取ろうかと周りを見たがどうやら既にこの場を離れているらしい。

「貴様………?」

声が出たほうを向くと、ゼクウの後ろにいた女兵士が魔物に囲まれていた。

「待ってる!」

弾丸のような速度でレグナは疾走する。

魔物の包囲を崩す程度レグナには雑作もなかった。

ベル・バークライトは舌を巻いた。

彼女はヴァルククリフ第6守備隊の部隊長だ。だからこそ部下を退避させ自分は殿しんがりとして残った。

腕にはそこそこの自信があった。

だが目の前の男はそのなけなしの自信を完膚なきまでに叩き潰した。

先ず最初に甲殻虫の硬い背を無造作に切り裂いた。メキィツという鈍い音に他の魔物が彼の存在に気付く。彼は先ず手持ちの剣の一本を投合した。ベルの真後ろにいた魔物の顔が潰れる。

魔物が爪や牙を剥き出しにする。

その瞬間、彼の姿がブレた。

消えた？

そう思ったときには彼は既にベルの隣にいた。

2体の魔物が血を噴き出して倒れる。

「安心しろ」

男はベルを庇うように立ち、言う。

「あなたには指一本触れさせん」

…惨劇が展開された。

「バカな……」

43体。イグザードと名乗った悪魔が引き連れてきた魔物の数だ。守備隊が倒した魔物の数は僅か10体。しかもそのうち4体はベルが一人で倒したモノだ。

残ったのは33体。それを、この男は一人で倒した？

「なんだお前はっ 悪魔か!？」

「……悪魔ならあんたを助ける理由はないだろ」

男は呆れたように溜め息を吐く。

息？

ベルは気付く。男の呼吸がほとんど乱れていないことに。

(こいつは息1つ乱さずにこれだけのことをやって退けたといつのか?)

後退り、武器を抜く。

ベルには最早この男が悪魔にしか見えなくなっていた。

「わ…私は悪魔の奴隷になどならんぞっ！」

「……………」

男は無言で剣を納め、それを支えていたベルトを外して手元の剣全てを鞘ごとベルの足元に放り投げた。

「これで信じて貰えるか？」

「っ……………」

「俺は流れの『破壊者』だ 『大震』の1人と知り合いでそいつに頼まれて ってあんたさっきの……………っ!？」

不意に何かに驚いたように男の肩が大きく動いた。

「!?!」

再び、男が消えた。

ベルがそう認識した瞬間に男はベルの足元の剣を拾い上げていた。

(殺られる……………!)

思わず恐怖に目を閉じる。

しかし、予想に反してベルは自分の身体が浮かびあがるのを感じ

た。

「逃げるぞっ！ 掴まってる」

怒声に近い声が響く。薄く目を開くと肩に担がれているのがわかった。

それから、

『吼える失墜の翼王！』

無数の真空の矢が周囲一体を撃ち抜いた。

「っ……！！！ なんだこれはっ」

「逃げた悪魔だっ 上で魔法の詠唱してやがったんだ……！」

矢を剣で振り払いながらレグナは疾走する。

(クソッ…… 1本じゃ上手く捌けねえ)

外れた矢で粉塵がまきあがり、更に回避を困難にする。

(どうする？ 他の剣を回収して、いや この魔法の属性は風だ……
… ウルスラグナじゃないと、他の魔封剣じゃ折られるのがオチか
結界の中までこのまま……？ 俺一人ならともかくこいつ担いだ
ままじゃ持たないぞ……！)

「このままじゃ、当たる……！」

「あっはっは 苦戦してますね、レグナさん」

声のしたほうに視線を向けると、煙草をくわえた軍服の少年が十数m先に立っていた。

その周囲の空気が熱によって発生する対流で、歪む。

「っ！」

「ちゃんと避けてくださいね？」

両手を広げて展開した魔方陣を回転させより大きな空気の渦を巻き込む。

「行きます」

『垣間見る地獄の業火』

この一撃で、空が炎に染まる。

「……あれ もしかして、死んじゃいました？」

『限り無き炎（バウンドレス・ファイア）』の異名を持つ震術師、ゼクウ・フィアレスは首を傾げた。レグナの姿が消えたのだ

「ってか、なるべく上に放ったつもりではあったのだがどうやら地表まである程度の影響は出ていたらしく、背の高い草などは一瞬にして灰と化していた。あまりの高温で焼かれたため逆に火災にはなっていないようなのが救いか。」

「ちょっと強すぎたか…… ちゃんと成仏してくださいね」

ゴンツ！

「い……ッタアっ!？」

鞘を側頭部をおもつきり叩かれて涙目でそちらを向く。

「ゼクウ……!」

レグナと、ベルが居た。その近くの地面に人間一人が入る程度の穴があいている。

（咄嗟に『矢』のいくつかを一ヶ所にはたき落として地面に穴を……
それで『垣間見る地獄の業火』を逃れたのか）

「覚悟は出来てるよなあ……? ゼクウ」

「え いや、ごめん マジ切れされると思わなくて……」

がくっ……

「っ……」

唐突にレグナが膝から崩れ落ちた。

「え……レグナさん……？」

うつ伏せに倒れる。その背中には、ゼクウの術により酷い火傷を負っている。

「！ なんてっ……」

ゼクウはレグナの力量を知っている。自分程度の術なら漠然となんとかするだろう、と思っていた。

ゼクウは隣のベルが無傷なことに気付く。

（まさか庇ったのか……？ 冷酷無比な、『ブレイド』と呼ばれたこの人が……）

守備隊の隊長など使い捨ての駒の1つに過ぎない。それを……

「……ベル、彼を医務室のほうに運んでおいて」

「……は、はいっ……」

「もしもし、【星の隷属者】アストラル 聞こえる？」

『 ……ゼクウか どうした？』

「殲滅完了したよ でも僕の術で負傷者が出た、ナタクを回して欲しい」

『 ……珍しいな お前の術を受けた者が生きているのもそうだが、いつもなら必要な犠牲と割り切るのが貴様だろう？』

「 ……ゴメン」

『構わんよ 医務室に放り込んでおけ 手配してやる』

第4話：【大震】（後書き）

小ネタ

765 Ta A b y s L S i n f o n i a E s 5980

ステイアが言った認証コード

765 ナムコ

A B Y S アビス

S I N F O N I A シンフォニア

T a l e s テイルズ

5980 5980円（新品のPS2ゲームのだいたいの値段）

……テイルズ万歳

第5話…ひとやすみ？（前書き）

ううっ……レグナに捨てられた

半熟震術師 リース

暴走させるのだよ
マグナビユート

王国最強の震術師 スティア・クロイツ・

……俺で遊びやがったのか

BLADE

……朴念仁

【裁断者】

ナタク・エルステイン

こ、こんなハズじゃなかったのに
ークライト

第6守備隊隊長 ベル・バ

第5話：ひとやすみ？

【星の隷属者^{アストラル}】の異名を持つ震術師、スティア・クロイツ・マグナビユートは杖について詰所にある訓練所に来ていた。この場所は床や壁に魔法障壁がかかっており震術では容易に破壊されないようになっているのだ。

その傍らにはリースがなんだかわからないままついてきている。

「さて、呪文など適当で構わんから全力で何か撃ってみる」

「え……でもそれって、暴走しちゃうんじゃない？」

「暴走させるのだよ 術師は先ず自分の属性を認識することから始める」

暴走で引き出されるのは術式や思い込みに左右されない根源の震力だから、それを見れば属性がハッキリとわかる」

スティアはリースには光の適正があるとレグナから聞いていたが、適正があってもリースに光が向いているとは限らないのだ。

「他に質問はあるか？ 無ければさっさとやれ」

「……えーっと、じゃあ行きます」

リースは大きく息を吸い込み、

「&*@§

卍

!!!!!!」

がむしゃらに叫んだ。

同時に強烈な閃光が室内を包み込む。

その光が、ステイアの前で突然に折れた。ステイアが術を使ったのだ。

折れた光は障壁の展開された壁や床に激突し鎮静される。

「!」

ぐぎぎいっ 妙な音を立てて軋み対魔法に特化したはずの障壁が破裂した。

「……なるほど たしかに光の術者だな」

ステイアは笑う。

王国最強と呼ばれた自身を超えるかも知れない才能を前にして。

レグナ・ゼオングスは暗い病室の中で目を覚ます。

「っ……」

背中に痺れるような鈍い痛みがあった。どうやら気絶していた最中に治療は済んでいるようだ。が麻酔なしでやったらしい。

しかし『そんなこと』よりも……

「あの、バカ……」

レグナはゼクウの振る舞いに微量の苛立ちを覚え自らもかつてそうだったことに憂いた……

レグナの知るゼクウは天才だ。あいつはあんな極大の術式をあえて起動せずとも対象の悪魔を魔術ごと消し飛ばすことが出来る。

高温で作り出した対流を操る『地獄の熱風（ヘル・テンペスト）』など、もつと小規模で事態を納める術式は数多く存在し、空を焼く程の威力を持つ『垣間見る地獄の業火』などというふざけた術を行使できるゼクウがそれを使えないはずがない。

（……俺で遊びやがったのか）

焦る無様な『ブレイド』の姿を見て楽しみたかった。

おそらくゼクウの行動の理由はその程度だ。そしてたったそれだけの理由で1人の人間の命は、

ゼクウを慕っていた守備隊の女の命は奪われかけた。

（……軽いな）

レグナは思う。

命は、軽い。

簡単に潰れる。

【銃の王】の放った言葉が頭の中で揺れる。

「……………」

レグナは上半身を起こそうとして、

肩口を押されてベッドに押し倒された。

「っ！！？！？」

思わぬ不意討ちにレグナはベッドに倒れ込み、包帯と火傷が擦れて悲鳴をあげそうになるが『破壊者』としての意地にかけてそれを飲み下す。

「……………絶対安静」

カーテンを開き月灯りが病室に射し込み、前蹴りを放った人物の姿があらわになる。それは（主に胸部に）身体的な特徴のある女性だった。

「ナタク・エルステイン……………？　じゃあいま『大震』が三人もこの街にいるのか」

「……………肯定」

無表情でナタクは頷きベッドの上に這い上がる。

「……………拘束」

「やめてくれ……」

「……却下」

レグナの両手を封じるようにナタクは手首を這わせて押さえ込む。半ば覆い被さるようになったナタクはそっとレグナに顔を近づける。

ナタクの口から魔方陣が展開されてレグナの口にそれが吸い込まれた。

「……まったく、相変わらずけったいな術式だな」

レグナは舌打ちする。

背中痛みはもうない。

『大震』の1人、ナタク・エルステインは無属性震術の達人だ。そこには『治癒震術』も含まれるのだが、彼女の術は効果範囲が極端に狭く半ば口移しに等しい範囲まで近づかなければ作用しない。

ちなみにシークは同種の術を軽々に行ったが、それはおそらく《機械仕掛けの神》によるなんらかのサポートが働いたのだろう。

「……完治？」

ナタクがベッドから降りる。……やや顔を赤らめているのだが薄暗いためレグナにはわからない。

「ああ わざわざすまなかつたな」

「……………退室」

なぜか急に拗ねたような表情（レグナにはわからないのだが）になりナタクが部屋を出ていこうとする。段差に躓いてこけかけてこちらを凄まじい勢いで振り返るがレグナは視線を逸らしてそれを見なかったことにしておいた。

「……………朴念仁」

ナタク・エルステインは病室を出て呟く。

（うー……………あれだけ顔を近づけたのになんで意識されないかな……………もしかして私って魅力ない？ せっかく術式使って名目でゼクウがチャンス作ってくれたのに、や 別に私のためじゃなくてゼクウが愉快犯なのはわかってるけど、あーもう自分が口下手なのがヤダ…………… 何よあの色気の欠片もないしゃべり方 死ねばいいのに 躓いてコケそうになるし、もう恥ずかしすぎてほんと死にたい……………）

「エルー！」

俯いていたナタクが小さく飛び上がる。向かいから歩いてきたゼクウが無邪気な笑みを見せる。

「どうだった？ キスくらいしたの？」

……訂正、邪悪な笑みを見せていた。

「……………！！！」

ナタクは顔を真っ赤に染める。

「そういえばレグナさん、今日大通りであったときは女の子連れてたよ あの子 彼女かなあ」

「……………！？」

「そういえば行方不明の【銃の王】とも親しくしてたよね もしかしたらレグナさんって年下が好きなのかな」

「……………！！！？」

ちなみにレグナは24歳、ナタクは26歳だ。

「まっ ガンバってね 僕しーらないつと」

かき乱すだけ乱してゼクウは鼻歌まじりに去って行った。

「！！！？、！！！？、！！！？！？！？」

ベル・バークライトは果物の入ったカゴを片手に躊躇していた。

「結果的に私は守られた訳でこれはそのお礼に行くのであって決して私的な見舞いではないわけで私はけしてあの男にゴニョゴニョ……」

……などとレグナのいる軍の詰所の前でモゴモゴと言っていたら、

「ギニャー!?!」

悲鳴とも嬌声ともつかない、彼女のよく知る上司の声が聴こえてきた。

「ゼクウ様……?」

「……抹殺っ!」

次いで聴こえてくるのはベルの（主に胸部的な理由で）憧れる『大震』の紅一点、ナタク・エルステイン様の声だった。しかもなんか物騒なことを言っている……

「あ ベル」

こちらを見ていつも通りの無邪気な笑みを見せるゼクウの背後で詰所の一角が、崩れた。

ナタクがなんらかの『力』を振るっただのだ。

「ぜ……ゼクウ様っ!?!」

「ごめん、足止めお願い!」

ゼクウはベルの頭をぴょん、と飛び越すと彼女をナタクの方へ突き飛ばした。

「えっ…… ええっ!？」

顔を真っ赤にしてブチキれているナタクを前に、ベルは咄嗟に視線を走らせる。

(武器は……、グローブ? どんなに攻撃力が高くても直接攻撃ならなんとかっ)

ズバッ

「へっ……?」

突然、触れられてもいないのにベルの服の肩口が裂けた。一見ふつつの服に見えるが実は軍用で鋼線が編み込まれていて軽量ながらもそれなりの防御力は持っているはずなのだ……

「……邪魔っ!」

「ひっ……」

ベルはひき吊った悲鳴を挙げるとその場にしゃがみこんだ。その頭上を軽々とナタクが跳び越えてゼクウを追う。遠くでゼクウが悪態をついたのが聴こえた。

「……な…なんだっただの……?」

2人の後ろ姿をポカンとして眺めていたベルは詰所から出てきた男に気づかなかった。

「おい、あんた…… 怪我不いか？」

後ろから声をかけてきたのは、昼間の例の男だった。ベルの視界が真っ白になって男だけが浮き彫りになり、

「え えつと……そのつつ」

「ん…… 怪我してんのか？ 見せてみる」

……パンクした。

「つつ…… 貴様に心配される筋合いなどないっ！」

男が啞然とするが、自分の口から出た言葉に一番驚いたのはベル自身なのだ。

「……そうか 悪かったな」

そんな心中を察してくれずに男は曖昧な笑みで済まして背を向け、詰所の方に戻って行ってしまふ。一瞬そのあとを追おうとしたのだが縫い付けられたように足が出ない。

(こんなハズじゃなかったのに……)

ベル・バークライトは果物の入ったカゴを片手に途方に暮れる。

第5話・ひとやすみ？（後書き）

シークの再登場はいつになるんだろ

エヴァンスもでてこないなあ

……このまま二人とも出ないまま終わったらどうしようかなあ

第6話：ヴァルクリフ攻防戦・上（前書き）

あら あれって内側からなら意外に簡単に壊れるのよ？
【S e c o n d】を名乗る白い女

日中の世界は私の領域だ 王国最強の震術師 スティア・クロ
イツ・マグナビユート

手合わせ願おうか 【第4魔王】 エメト

守備隊の、ほうに、助けに、いかない、と…… 【限り無き炎】
ゼクウ・フィアレス

この化け物をなんとかしない限り……？！ B L A D E

第6話：ヴァルクリフ攻防戦・上

「Forth」

全身を白で包んだ女の声が洞窟に反響する。白い女は自分の声に眉を寄せる。

「相変わらず耳の痛くなる場所に住んでるわね……」

「……日向の世界は我らに似合わぬだろうが」

暗い洞窟の奥から錫杖を携えた【第4魔王】が姿を現す。それは身なりの整った中年の男性の姿をしており、もし彼が街中を歩いていれば悪魔には見えないだろう。

「……それ、人間の服ね」

「なかなか良いものだ」

「端々に血が滲んでなかったらね」

白い女は興味が無さそうに言う。

「して、我に何用だ？」

「Firstの命令よ 『ドレイクを殺したやつをいぶりだして殺せ』」

ドレイクの使い魔に臭いを追わせたけどヴァルクリフって街に
みたいよ あんたがその一番近くにいたからとりあえずあんたに
報せたんだけど、どうする？」

「……、グラナも面倒なことを

ヴァルクリフと言えば人間の都市の中でも特に結界が強力なことで
知られる街だろう？」

「私なら破れるけど？」

「お前の場合は『破れる』ではなく『受けない』、が正しいだろう？」

「あら あれって内側からなら意外に簡単に壊れるのよ？」

「……わかった 策のほうはお前に任せるとしよう

我は、そいつを叩けばいいのだな？ お前は迅速にそいつの特徴を
教えるといいだろう？」

レグナがヴァルクリフに来てから1週間が経過した。
からかいすぎてナタクに出会う度に逃亡を繰り返すハメになった
ゼクウ・フィアレスは、寝転がって空を見ていた。

「……なに、あれ？」

空を高速で飛翔する点を見つける。

いまいち掴めないが、周囲の鳥や雲の大きさから察するに人間ぐらいの大きさに羽根がついたような……そんなモノだった気がしたのだ。

(悪魔……かな？ まあ悪魔なら結界があるから簡単に街には入れないから別に警報が来てからで構わないか)

と、点が街に向かって急降下した。

「……………？」

結界があるにも関わらずそれは超速度で街に落下する。

結界に、ぶつかる？

ガキイイツ！！！！

「なっ……………」

その飛翔体は結界をすり抜けて、宙に浮かぶ結界の核となっていた機械を翼でぶった切った。

「アストラルっ！」

無線に向けて半ば叫ぶような声を出す。が、続く言葉を別の音が遮った。

『警戒警報LV5！ 結界の破損を確認 警戒警報LV5！ 結界の破損を確認』

市街地が戦場となる可能性があります、住民は速やかに避難してください

繰り返します 市街地が戦場となる可能性があります、住民は速やかに避難してください』

「っ…………」

単なる見間違いではないことが確定する………… ゼクウはもう一度アストラルに無線を繋ごうとしたがそれより早く別の信号が割り込む。

『ゼクウ様っ』

「ベル？ 悪いけどあとに『これまでにない数の魔物の大群が城壁の外にっ 見張りからは数はおおよそ2000と報告が…………』』

「っ………… クソオツ」

『【限り無き炎】バウンドレス・ファイア 聞こえるか？』

「！ 【星の隷属者】アストラル」

『貴様は外の魔物の掃討にあたれっ ナタクを回す。上手く連携を取れ』

市街地に入り込んだ飛翔体には私があたる いいなっ？』

「っ……了解！」

『生き残れよっ』

「ゼクウとナタクは西門に、南門には別動隊を出す 東は1、2、4、5、9 北門には3、6、7、8部隊

全力で死守しろっ！！！」

返答を待たずに別の回線にまわす。

「レグナ ウルスラグナの使用許可を出す！ 行けっ」

『わかった……！』

王国最強と言われる震術師、スティア・クロイツ・マグナビュートは無線と自身の身体を支えていた杖を投げ捨てた。

「……また会えたな 【Second】」

銀色に光る巨大な六枚羽根を持つ白い女が、スティアの前に降り立つ。

「懲りないわね あなたたちが『大震』^{セイバー}が“二人がかり”で勝てな

「かった私にあなただけで勝てるとても？」

「条件が違う」

スティアは冷静に、昂る。

「あのときは闇夜だった 日中の世界は私の領域だ」

周辺の光がスティアの術式に呼应し、歪む。

「大陸に3人しか使い手のいない我が光の術、とくと見よ」

ゼクウは西門の前にいた。

「……遅刻っ！」

引き裂かれた魔物の死体が隙間なく転がっている。

どうやらナタクの方が先に来ていたらしい。

予定調和のようにナタクが飛び退き、入れ替わるようにゼクウが飛び出す。

「エルーはそのまま街にいるスティアを捜してっ あいつ、また無茶しようとしてるから！」

「……承認」

抑えていたナタクが退いたことで迫り来る膨大な数の魔物の群れ、
対してゼクウは僅かに唇を動かした。

【垣間見る地獄の業火】と。

呪文の詠唱は市街地を走るうちに済ましていた。

空を染め上げるほどの大火が、刹那と待たずに前方のすべてを薙ぎ払った。

別動隊として、レグナは1人南門に居た。

『ウルスラグナ』を持ったレグナに並みの魔物など1000だろうが1000だろうがまったく影響はない。

だが42体を斬り伏せたところで南門からは魔物が消え失せた。

「6本の剣を持つ男　なるほど、secondが言っていたのはお前だろうな」

代わりに現れたのは、整った身なりの端々に血を染み込ませた中年ほどに見える男だった。

「我は【第4魔王】　エメト　手合わせ願おうか」

「ラストオっ！」

焔が弾けて、800近い数が居た魔物の最後の一体が灰と化す。戦闘開始から20分も立たずに、ゼクウは西門の魔物を殲滅していた。

「ゼエツ……ゼエツ」

ゼクウは荒い息を吐く。

炎を産み出す力は決して無限ではない。【限り無き炎】の異名を持つゼクウだがその攻撃力に文字通り“限りが無い”と言われるだけであって、別に無限に炎を生み出せる訳ではないのだ。

敵は殲滅したがもう1つだけゼクウはこの場で術を使う必要があった。

炎陣術。

地面に刻んだ魔方陣が、外部からの侵入しようとした対象を焼き払う術式だ。

「守備隊の、ほうに、助けに、いか、ない、と……」

ゼクウは乱れた呼吸を整えようともせず出来る限りの速さで走る。

ズンツ　と鈍い音がした。

「っ……!？」

エメトと名乗った悪魔の前の土が盛り上がり、レグナの5倍近い質量を持つ巨大な土の人形が構築されて行く。

ゴレム　？

正面から突き出されたバカげた大きさの拳をレグナは大きく動いてかわした。

後方の地面に拳が突き刺さり土が舞う。

(動きは大して速くないクセに、サイズがデカすぎてかわし辛い…)

伸びきった腕にレグナは一閃する。だが腕の太さはウルスラグナのリーチを軽く上回っており切断まで届かない。

それどころか、即座に周囲の土を飲み込んで切り口が再生した。

「!？」

懐にいるレグナに鉋物で出来た硬い膝が突き出される。

(局部に意味がないなら……)

やや斜めにバックステップしそれを回避し、飛び退き際に鉋物の膝をウルスラグナで叩き割る。が、それも直ぐに再生する。

(っ……間接部まで……！？ ゴーレムの相手をしてても埒があかないな…… なら、操ってる魔術師を直接っ)

居ない……？

「まさかっ……」

ゴーレムの、この土の鎧の内側に……？

「おいおい…… この化け物をなんとかしない限り術者にも届かないってか……？」

【星の隷属者^{アストラル}】という名にはいくつかの由来がある。

1つは彼が光の震術を使う際に太陽の光を受けた星が僅かに輝くような淡い光を発すること。

2つ目は彼の属する王国の掲げる国旗の紋章が『星』を象り、スティアは単体で十分に国家に抗えるだけの力を持ちながらも王国に属し続けていること。

そして最後に、彼の術はまるで星の重力を借りるかのようにあらゆる術的攻撃を“屈折”させることだ。

「なるほど たしかに弾き切れずにあたった前回とは桁違いのパワーだね」

楽しむような口調で白い女はいくつかの震術と魔術を一気に放つ。それらは例外なくスティアに命中する前に屈折し、地面や住民が既に避難を終えた建物を撃ち破る。

光の術に物理的な破壊力は一切ない。

スティアは自身がりーすに言った言葉を思い出す。

光の術に『対象を攻撃する術』はほとんど存在しない。もし光が質量を持って対象を攻撃する術があるとすれば、それは理論上無限大のエネルギーを持つことになり一撃で全てを破壊出来る悪夢の術になるだろう。

屈折。透過。波長。

これらを操る光の術の本質とは防御だ。とスティアは考える。

だから、

スティアはセカンドの放つ術を屈折し回避しながら別の術式を起動する。

光で攻撃出来ないならば別の術式を使えばいい。

産み出したのは雷撃。だがスティアはそれを直ぐには発動しない。これは保険だ。

…)
(このまま『屈折』を使い続ければ私の力のほうが先に尽きるな…

それがわかっているから白い女は効かないと理解しながら術を放ち続ける。

(だが甘い　！)

いくつかの攻撃を屈折させずに温存しながら、スティアは術の嵐のあいだに身体を滑り込ませる。

ズキン　と痛みが走る。

ナタクの治癒震術ですら強力な魔術でつけられた手足を完治させることは出来なかったのだ。

「　！？」

ステイアの身体がまだ無事な建物の陰に隠れた。

(……迂濶に追うのは危険ね)

Secondは牽制するように放っていた威力の小さい術から術式を莫大な力を持つものに切り換える。

「消し飛びなさい」

それは呪文であり同時に宣告だった。

震術によって発生した強大な炎が、魔術によって操作された風の助力を得て、

作られた巨大な莫炎と疾風に彩られた震魔の混合の槍が、

「神殺しの槍」ロンギヌス

ステイアの居るであろう建物に向かって超速度で突っ込んだ。

「……阿呆め」

【星の隷属者】の異名を持つ震術師は、おそらくゼクウの『垣間見る地獄の業火』をも上回るであろう威力の槍を、嘲笑う。

「屈折が出来るなら『反射』も可能だとなぜ気付かない？」

「っ!？」

究極に近い『神殺しの槍』はその威力を反転する。

第6話・ヴァルクリフ攻防戦・上（後書き）

【大震^{セイバー}】の名前の由来：真昼がShiverを素で読み間違えたこと

BLADEの名前の由来：青山 剛晶の『YAIBA』
……や、これは流石に嘘です

第7話：ヴァルクリフ攻防戦・中（前書き）

ゼクウ・フィアレス 聴こえます？ こちら電波ジャック犯ですけど
?????

屈辱ね 【Second】を名乗る白い女

潰しますか 金の髪の少女

違う……！ あの男はこの程度で油断しなかった 第6守備隊
隊長 ベル・バークライト

あー、疲れた 【限り無き炎】 ゼクウ・フィアレス

残念 こちらも完成だ 王国最強の震術師 スティア・クロイ
ツ・マグナビュート

第7話：ヴァルクリフ攻防戦・中

『東門の守備部隊……突破………されました』

ゼクウ・フィアレスの無線に絶望的な報告が届いた。街の中には市民が居る。街を囲う強大な城壁は、逆に逃げ道を塞ぐ壁となる。

手遅れ 理解していたが、それでも北門に向かっていったゼクウは進路を変えようとした。

『ゼクウ・フィアレス 聞こえます？ こちら電波ジャック犯ですけど』

…聞こえるはずのない、懐かしい声が聴こえて来たのはその時だった。

6年という年月があいだにあるにも関わらずゼクウは一切の劣化なくその声を記憶していた。

「なんで、お前が……？」

『話はあとです あなたはそのまま北門に向かってください 東は僕が引き受けますから』

…この会話から約10分後、東門に群がっていた513の魔

物と7体の悪魔は全滅する。

『神殺しの槍』の破壊の痕で、スティアはいくつかの術式を練ってはあたりに散らしていた。

スティアはSecondがこの程度で死ぬとは思っていなかった。

彼は自身の術を過信していない。

事実、『神殺しの槍』は完全に反射仕切らなかった。

力の何割かを屈折させて削ぎ落とすことでようやく反射を成功させたのだ。

比重を少しでも間違えばその威力はスティアの身体を容易に粉碎していただろう。

「屈辱ね」

巻き込まれて破壊された家屋の、土煙の中から、その言葉と裏腹な愉悦に満ちた声上がる。

煙が晴れて行く。

「《機械仕掛けの^{セラフ・エクス・マキナ}大天使》はしばらく使えないか」

白い女はボロボロになった銀色の翼を消し去る。実際は女の指輪

に納まっているのだがスティアには消えたようにしか見えなかった。

(っ……、あの程度のダメージか)

スティアは内心で舌を巻いた。

人間がまともを受ければ蒸発して塵となってもおかしくはない威力の『神殺しの槍』を、命掛けて跳ね返して壊せたのは替えの利くであろう機械翼だけ。

白い女は服にすら術の痕跡は、ない。

(もう少しは期待したんだがな……)

スティアは雷撃の術式を起動する。

「結局頼れる物は己の力だけということか」

(ちいっ……)

斬っても斬っても再生するゴーレムを前に、レグナは勝機を見い出せずにいた。

懐に入っの『刃神』を叩き込めば術者まで届くかもしれないが、

リスクが高すぎるのだ。

第一、あの巨大な腕を掻い潜り懐まで潜り込むのは至難の技だ。

レグナは一方的に撃たれる攻撃をただかわすことしか出来ない。

しかも人間かそれよりも小さいサイズを相手にすることの多かつたレグナは、人間の5倍はある巨大な攻撃に慣れていない。かつてこれよりも大きなドラゴンを相手にしたことはあるが、蛇のような長い体躯をしたそれと目の前のゴーレムは全く別物だった。

必要以上に大きな動きを強制されてレグナのスタミナは大きく削られて行く。

そして足が止まれば強大な鉋物の塊がレグナの身体に叩き込まれることになる。

(そのうち当たるな……こりゃあ)

それでもこうしている意義はある。とレグナは思う。

この化け物の狙いはどうやらレグナのようだ。レグナを無視して市街地に突撃することも出来るのだからそれは間違いないだろう(もしそうすれば『刃神』を叩き込む隙が出来るのだが)

つまり自分がここに居る限り市街地に被害はない。

(とはいえ門から離れすぎたら別口の魔物が来たときに対応出来なくなる…… なんとかしないと)

打開策を見い出せないままレグナはただ回避を続ける。

ベル・バークライトは8体目の魔物を斬り伏せた。

「はあっ……はあっ……」

とつくの昔に限界など超えていた。同じような状態で戦っている者達が何人も居る。

（この程度で、根をあげて堪るか……！）

ベルは33体の魔物をたった一人で打ち倒して見せた男を思い出す。

（あいつは私を庇いながら戦った……）

彼は別に震術のような特別な力を使わなかった。ただ恐るべき速さで剣を振るっただけだった。

（どれだけ力を望もうが震術の才能のない私は『大震』にはなれないけど、あれならば）

あいつの強さはただの剣技だ。それを消えると錯覚するほどの速度で振るっただけ。

（あれならば私にも届くかもしれない……！）

9体目の魔物を斬る。

不意に異形の魔物の中に、人型の視界に映る。

「邪魔」

ベルの視界に映ったのは、悪魔

「つつ!?!」

そしてそいつの放った、莫大な水流。

死、

自分との間の壁となっていた魔物共が、粉々に碎け散るほどの、
魔術によって統制された水の奔流

それが、ベルの目の前で2つに裂けた。

「!?!?!」

何の力が働いたのかわからない、ただ理不尽な防御に悪魔が困惑する。

（これは……スティア・クロイツ・マグナビュート様の、“屈折”
！）

ベルは振り返る。

そこには、

「え……？」

スティアとは似ても似つかない金髪の少女が立っていた。

「……さて」

少女はキョロキョロとあたりを見回し、呟く。

「潰しますか」

少女は悪魔に向かって真っ直ぐに突っ込んだ。

悪魔が魔術を発動し、空中に無数の水の槍が浮かぶ。

発射。

しかし、それらは少女に届かずに地面や空に向かって折れ曲がる。
正体不明の術式を前に悪魔が下がる。

少女は短剣を引き抜いてそれを投げつけた。

「?!」

突き刺さる。その瞬間、走りながら少女はベルのほうを振り向いた。

錯覚かとも思っただけ一瞬だった。少女は既に悪魔のほうを向いている。だがベルはたしかに見た。

「！」

『迫雷』

最も初歩的な雷撃の震術を少女は発動する。

だが低威力のはずのそれは金属製の短剣を伝い悪魔の神経に直接突き刺さる。

「があっ?!」

悪魔の動きが硬直する。その瞬間、ベルは飛び出した。

「ハアッ！」

飛び退く少女を追い越し、ベルは悪魔の胸に剣を突き立てる。

ザクッ!!!

悪魔の身体を貫通する。

(倒した……?)

守備隊の長でありながら、最終的に悪魔を倒すのは『大震』に委ねていた自分が？

(違う……！ あの男はこの程度で油断しなかった)

目の前の悪魔はまだ生きていた。

魔術を使おうと唇を動かしていた。

迷うことなくベルは突き刺さったままの剣を真上に振り抜いた。

「

断末魔を挙げる喉を引き裂かれて悪魔は声を挙げずに倒れた。

「 ……やるじゃん」

金髪の少女はベルと背中合わせのように立つ。

「きっちり倒せるほど攻撃術は強くないの 手伝って」

少女は懐から数本の短剣を引き抜く。

「協力感謝する」

ベルは限界のはずの身体を奮い立たせる。

「 「 潰す」 「

ゼクウ・フィアレスは北門に辿り着いた。

「……、ははっ」

そして小さく笑った。

無数の雷撃の筋が走り、動きの硬直した魔物を守備隊の剣が貫く。突破される寸前だった北門の形勢は完全に逆転していた。

ゼクウの震術は応用が効かない。攻撃範囲も、威力も大きすぎるのだ。

あの中に放てば炎は守備隊の人間まで焼き払うだろう。

(こりゃ僕が下手に手を出さないほうがいいね)

力が抜けた瞬間に全身に疲労がのし掛かる。

ゼクウはそれに抗わずに側の壁に身体を預けた。

「あー、疲れた……」

少し眠ろう……

瞼を閉じようとした彼を妨害するように無線の音が響いた。

「あーもう、なんだよ……」

「『神殺しの槍』をもう一発、撃つわ」

白い女は宣言する。

「……………」

「あなたはもうあれを“反射”　いえ　“屈折”　できるだけの力すら残していない……………違う？」

なぜスティアは女の放った小さな術に反射ではなく屈折を使ったのか。

小さい術を反射するよりも不意をついて威力の大きい魔術を反射させたほうが効果が大きいから　たしかにそれも理由の1つだ。
だがそれよりも反射に使う震力が圧倒的に大きいことのほうが主な理由なのだ。

ましては『神殺しの槍』など何度も跳ね返せるはずがない。

「　消し飛び……………っ?!」

ベキイツ!!!

と、鈍い音を立てて詠唱が途切れた。

「残念　こちらも完成だ」

女が呪文を唱えきるよりも先に、スティアの拳が女の腹に深く突き刺さったのだ。

「っ」

女は詠唱を省略して下級の魔術を放つがスティアはもうそこには居ない。

数m離れた位置に楽々と回避している。

「電速術式　、『雷極』」

刹那の間に再び女の懷に飛び込んだスティアが咄嗟にガードした女の右腕ごとプレートブーツで思い切り蹴り飛ばす。
間接が不自然に折れ曲がり女の身体はそのまま吹き飛んで家屋に激突した。

「……ばら蒔いた無数の雷撃の術式で金属の靴との間に磁力の反発力を生んで超加速　ね」

「一目で見抜くとは、流石だな」

スティアは仰向けに倒れる女の前に立ち、左腕を踏みつけた。
反発力が吸着力に変換され、人間の脚力ではあり得ない負荷が女の腕に乗しかかる。

「っ……」

「さて、貴様にはいくつか訊きたいことがある」

王国最強の震術師はゆっくりと唇を動かす。

「お前は、なんだ？」

第7話・ヴァルクリフ攻防戦・中（後書き）

ほんつとじめんなせい……

中と間違えて下の一部を先に書いてしまいましたorz

改めて、ヴァルクリフ攻防戦・中ですm（|）（|）m

第8話・ヴァルクリフ攻防戦・下（前書き）

そろそろ片をつけるのが良いだろう

【第4魔王】

エメト

ちいッ……動けよオンボロがあっ！

BLADE

呆れた この世界の神話さえ人間は捨ててしまったのね……

【第2魔王】 ルシフ

まるでこの状況を逆転出来るような物言いだな？

王国最強の

震術師 スティア・クロイツ・マグナビユート

……無事？

【裁断者】

ナタク・エルステイン

外した……？！

???

第8話：ヴァルクリフ攻防戦・下

(56分…… まだ捉えられんのは流石に異常だろう)

エメトは若干の焦りを覚え始めた。

彼の能力、『操作』^{オペレート}によって産み出されたゴーレムは疲労を覚えないし、一度大量に魔力を注ぎ込めばそれ以上にはほとんど魔力を消費しない。

再生の度に少しずつ消費してはいるが、それも微々たる物だ。

「……そろそろ片をつけるのが良いだろう」

目の前の剣士に『絶対防御』が破れるとは思わないが、増援が来れば流石に面倒だ。

ゴーレムの身体を崩していくつかの石が剣士の顔に当たる。『操作』から剥がれた礫にほとんど威力はない。

が、不意を衝かれ、スタミナを削られ続けた剣士の膝が崩れる。

そこへ迫るゴーレムの拳。

「捉えた……！」

その言葉はエメトの口から出た物、ではなかった。

『二之太刀 鎧神』

レグナは拳が命中する寸前に払うように剣を振り下ろす。

ガゴオンツ！！！！

半歩遅れて轟音が拳がる。男を捉えたはずの鉋物の拳が弾き返される。

(ここしかねえ……！)

レグナはゴーレムの懐へと潜り込む。

がくっ

「っ……」

回避のために酷使し続けた膝が、『鎧神』の発動に相余ってついに崩れた。

(ちいッ……動けよオンボロがあっ)

ゴーレムが無造作に腕を振り回す。

もしレグナが動けたとしても、もう間に合わない。

(ガード……！)

ウルスラグナを重ねて、その鞘を踵で蹴り上げて三重の壁を作る。だが質量が違い過ぎる。

防ぎ切るにはゴーレムは余りにも巨大だ。

レグナは片目を閉じて歯を食いしばった。

…が、衝撃は来なかった。

「カイン&アベル」

代わりに囁くような声とゴーレムの腕が弾かれる轟音が聴こえた。

「私はこれまで王国の震術師として数多くの悪魔を見てきた

闇の支配者、ダイクロード電速の魔剣、グロリアス完全破壊、メルトダウン絶対零度、セルシウス偉大なる剣、グランドセイバー

力の性質から姿形まで何もかもが違ったが1つだけ共通するものがあつた」

【星の隷属者】は白い女を踏みつけている足を首にかける。

術式で作用した磁力とプレートブーツによって踏み潰された彼女の左腕は、関節を踏み砕かれ完全に死んでいた。

「共通点、それは『瞳』の色だ 私の知る限り黒以外の色を持つ者は悪魔には居なかった が、貴様の瞳は白に近い灰色 この前まで感じていたことはそれだけだった

だがいま確信を得た」

潰れた腕を流れる液体を一瞥する。

「貴様の血は、赤い」

悪魔の血は、青のはずだ。

「……」

「答える 貴様はなんだ？」

なぜ魔力を持ちながら結界を通過出来る？」

もし彼女が【半神】であったとしても結界が反応しない理由にはならない。阻む物を選択出来る魔法結界ではなく、例外なく悪魔を阻む機械結界は【半神】の侵入すら阻む。

白い女は大きく息を吐く。

「呆れた この世界の神話さえ人間は捨ててしまったのね……」

「……何？」

「ヒントだけはあげるわ 『ルシフ』、私の名前よ
覚えておきなさい」

「……まるでこの状況を逆転出来るような物言いだな？」

笑みを持ってルシフは答えた。

「……ええ その通りよ」

ステイアは磁力を吸着に変え、ルシフの喉を踏み潰そうとした。

「?!」

が、逆方向にステイアの身体が突然跳ねた。

「っ、磁力操作を乗っ取ったのか」

舌打ちしステイアは磁力のコントロールを建て直す。その僅かな間に、

『神殺しの槍』^{ロンギヌス}が飛来した。

「!!!!」

ステイアがかわせば、『神殺しの槍』はその威力を存分に市街地に向けて振りかざすだろう。

いや、衝撃波をかわし切れずにステイアの五体が吹き飛ぶ可能性のほうが高い。

「……屈折率を拡大、エネルギーを拡散」

残った震力を振り絞り最大限にエネルギーを散らしても、おそらくこれはステイアの身体を粉々に粉碎するだろう。

(打つ手なし か)

だが、どちらにしても死ぬなら

「足掻いてやるさっ!」

術式を起動し、残る全力をもって真上に『神殺しの槍』をねじ曲げる。

「オオオオツ！！！」

そして、

曲げきれなかった威力がスティアに直撃する…

「……ヘキサ・リフレクション六柱障壁」

…寸前で、巨大な壁にぶつかって消滅した。

「へエ……」

ルシフは感嘆の息を吐いた。

スティアがねじ曲げた“残りの威力”とはいえ、たかが障壁魔法で『神殺しの槍』を止められたのは魔界に居た頃を含めても初めてだった。

「……無事？」

【ザッパー裁断者】 ナタク・エルステインがよろめくスティアを支える。ちなみに実は彼女はもう少し前から居たのだが、割って入るタイミングが無かったのだ。

「っ……お前に助けられるとはな」

弱々しく吐き出されたその一言でナタクはスティアに一片の力も残っていないことを察した。

「……………」

ナタクをグローブを構える。

「……………止めましょう?」

ルシフは《機械仕掛けの大天使》を展開する。

(低速飛行ぐらいはなんとかかなりそうね……………)

「……………」

「お互いに相手を倒せるほどの力は残ってないでしょう? 私はもう退くわ」

両腕を潰されたルシフはそれでも余裕を誇る。

ナタクはスティアを《六柱障壁》で包み、ルシフに向かって疾走する。

「っ!!」

ナタクを、魔術による突風が阻んだ。

逆に風を受けて揚力を得たルシフの身体がフワリと浮かぶ。

「じゃあね 次はちゃんと殺してあげるわ」

ルシフはそのまま大きく羽根を広げ飛び去っていった……

「……逃げ、した」

ナタクは一先ずスティアを背負って歩き出す。

(とりあえず東も北も大丈夫っぽいし南はレグナさんが負けるなんかあり得ないし西はゼクウが灰にしているだろうし一先ず私はスティアをどうにかしないとでもこんな場所で『治癒』なんかしてるの誰かに見られたらどっからどーみても私、痴女にしか見えないじゃない気絶寸前の【星の隷属者】にそんなことしてたらお嫁に行けないし……！)

……よくも悪くもナタク・エルステインはマイペースなのだった。

(ヴァルクリフの結界が破られたと……?!)

王国第一騎士団長、レイム・リーガル・アーカナイトは報告を信じられなかった。

城壁都市と呼ばれるヴァルクリフの結界はドレイクが破った物とは格が違う。

なにせ最強の魔王、『暴君』の全力の魔術攻撃でさえ凌ぎ切った実績を持つ途方もない代物なのだ。

(では結界の破壊は、【星の隷属者^{アストラル}】の陰謀か？ だとすればどう
という意味がある……)

29歳という若さで王国最強と呼ばれ、騎士団長の自分と等しい権力を与えられてる『大震』の長である【星の隷属者】をレイムは恐れていた。

従順なことが何かを企んでいるようで逆に恐ろしいのだ……

レイムはいくつか思考を巡らせたが、納得の行く答えは出そうになかった。

「増援を出さざるを得ないか」

レイムは忌々しげに舌打ちすると第3騎士団に出撃を命じた。

それから一時間後、

『まったく、手が空いてるのが僕しかいないからってグラナもめんどくさいことを押し付けてくれますね……』

第3部隊の無線から乾いた声が聴こえてきて、レイムは身体を強く張らせた。

『名乗れ？ ああ 死ぬ前に名前ぐらいは知りたいんですか？ エヴァンスです、【第5魔王】エヴァンス さあ、さつさと終わらせましょう』

殺人を片手間にするような躊躇いの一切ない、軽い口調だった。

それきり無線は途絶えた。

(魔王……、第3部隊はそれなりの精鋭揃い それにアグアまでいる……魔王を倒せば騎士団の名は上がる)

そうなれば魔王に負けたという【星の隷属者】を蹴落とす理由にもなる。

(なのに……)

全てが自分にとって都合のいい状況のはずなのに、

なぜかレイムは震えが止まらなかった……

彼が第3部隊の全滅を知るのはいそれから6時間後のことだ。

レグナは崩れた膝を立て直して、ゴーレムのリーチから飛び退いた。

「っ……お前、なんでっ……」

「……戦うのは嫌だよ 服が汚れるし痛いし汗かくし血はベトベトするし」

他愛もない理由を語るその人影の手から……

「でも……僕は君が死ぬのはもつと嫌だから」

6年前と変わらない2つの銃口がゴーレムを捉えていた。

「【銃の王】 シャルツ・デイバイト・アーケエッジ……参る」

最強の双銃《カイン&アベル》を握る1人の少女の参戦により、停滞していた戦局は大きく揺れ動く。

……レグナが真つ直ぐにゴーレムに斬り込んだ。

（もう掴んでんだよ…… そのデカさも速度も！）

迎撃に突き出された右拳をほとんど動かずに紙一重でかわす。ほぼ同時にカウンター気味の一撃が分厚い胴の岩に剣が食い込む。

(っ……これでも届かないか……！)

刃の3分の2が食い込んだにも関わらず内部のエメトまでは届いていないらしい。

左腕が横薙ぎに振るわれる。

渾身の一撃を叩きまこんだ直後のレグナにそれを回避する余裕はなかった。

…否、そもそもレグナは最初から回避を捨てていた。

「おおんツ！！」

ハンマーか何かがぶちあたったような轟音が響き渡り、ゴーレムの腕が完全に弾かれ速度を失う。

何をした……？

エメトは思考する。彼の操るゴーレムのパワーは素手で結界を破壊可能な『SIX ドレイク』すら上回る物だ。例えば大砲の砲弾が飛んで来たとしてもビクともしない。

その一撃を停止させるなど人間には不可能なはずだ。

彼は考えたかった。

だが思考は中断を余儀なくされた。

「オオツ！！！」

ゴーレムも身体に幾重にも、幾度も刃が食い込む。

平常時のゴーレムの再生速度を上回る勢いだ。

しかも剣士を迎撃のためのゴーレムの動作は後ろの少女の放つ“何か”によって阻害されている。

(あれだけの斬撃を上半身の筋肉だけで……、こいつ本当に人間だろうか……！？)

エメトはゴーレムに魔力を込めた。

そう、あくまで目の前の人間が上回っているのは『平常時』の再生速度だ。魔力を高め再生速度を早めれば、防壁を突破されることはない。

「ぐっ……」

再生の際にその破片を受けた剣士が僅かに怯む。

(やはり先ずはこちらだろうか)

ゴーレムが両手を振り上げ合わせて、剣士に向かって降ろした。

めきいー！！

しかし再びゴーレムの腕は止まる。が、今度は見えた。

(ただの狙撃だと？)

しかも片腕ではなく両腕、単純に考えて重量は二倍のはずだ。

それでも狙撃によって弾き飛ばされたゴーレムが轟音を鳴らして

尻餅をつく。その隙に剣士が全体重を持ってゴーレムに剣を突き立てる。

「……！」

だが、剣はゴーレムの身体に深く食い込んだだけでやはりエメトに届くことはなかった。

何事もなかったかのようにゴーレムが上体を起こし再びレグナに拳を叩きつけようとする。

「シャルツッ！」

刹那。剣士が、刺さったままの剣を手離して突然真横に跳んだ。

「わかってる……！」

狙撃。

少女のそれは、『突き立てられた剣の柄』を正確に撃ち抜いた。

「ぐあっ！！？」

深くめり込んだ剣の切っ先がついに魔術師に届く。

簡単なことだ。杭を金槌で打ち抜くのと同じことをしただけだ。

エメトは舌打ちする。

剣士の剣は残り5本。おそらく同じ戦術で来るだろうが、刺さり

どころによつては容易に出血によつて死ぬだろう。

かといってゴーレムという重たい鎧を纏つたまま剣士の刺突を回避するのは不可能だ。

『絶対防御』は崩されたのだ。

(くっ……最早動きの鈍いゴーレムに意味はないか)

エメトは操作を解いた。

「降参……な、わけねえなっ」

空かさずレグナが飛び込む。

それを追い越してシャルツの狙撃。

エメトの魔術師は先ず狙撃を錫杖で弾き、そのまま杖の軌道を変えてレグナの剣を受け止めた。

(切れない!?)

レグナの剣は世界最強の剣、ウルスラグナだ。

それが、たかだか杖の一本を切れない？

「我の操るは『欲望』がテストメント」

空気の持つ“質”が魔力に吞まれて変わる。咄嗟に真横にかわそ
うとする、が一度崩れた膝の反応は鈍い。

「その名は『グレイプニル』 かつて世界を飲み込むほどの巨大な魔狼を縛りし力、その司るは 、圧力」

レグナは突然地面に叩きつけられた。

(なんだ……これ……!?)

真上から全身にとてつもなく重い物がのし掛かってくるような感覚。

常人を遥かに凌ぐレグナの脅力を持ってしても指一本動かせない。

「……なんだお前は 『拒絶』 を所持しながら他のテストメントのことは何も知らぬのか?」

「レグナっ!」

ドンッ!

左右に握った銃口から合計4発の弾丸が発射される。

銃声が重なるほどのクイックドロウ(早打ち)。

「無駄だろう ?!」

それらはエメトの数m手前で、弾丸の軌道が真下に折れる

はず、だった。

「……………なんだと？」

弾丸が、圧力の結界を貫いた。

影響を全く受けていないわけではないらしく速度は相当に鈍っていてエメトはそれを咄嗟に避けた、が避けきれなかった弾丸の一発が頬を掠め血が滲む。

「……………まさかお前のそれは『慟哭』だろうか？」

「なんだか知らないけどそれでレグナを押さえつけてるみたいだね」

闘争心に呼応するように銃の片方が強い魔力を纏う。

「へし折ってやる！」

何の躊躇いもなく少女は死地へと飛び込む。

『エメトの魔術師』 彼自身の能力は別に土を操る物ではない。もしそんなことが出来るなら彼はレグナやシャルツの足元に巨大な穴を構築し底無しの奈落を造り出しているだろう。

彼は能力はあくまで『EMTH（真理）』の文字を刻んだ物体を自在に操ることであり、その対象は土とは限らない。

だが、彼は複数のゴーレムを同時に操ることは出来ないし、あらかじめ『EMTH』の文字を書き込んだスピアを使うことも出来ない。

当然ながら『EMTH』を刻むこと自体が出来ない気体、液体を操ることは出来ない。

意志ある生物を対象にすることも出来ない。

(まったく、不便な力だ……)

バオウの『流水』^{フロー}は作用するのが『直接手を触れている水』という狭い範囲に限るが、津波さえ引き起こす破壊力を持っている。

ドレイクの『塵』^{ダスト}は彼が直接的な戦闘を好んだからこそ『粉塵爆発』に収まったが、水滴を付着させれば霧を発生させることが出来るし毒を使えば吸い込んだ広範囲の人間を毒殺出来る。

エヴァンスの『遅延』^{スロウ}は肉弾戦において無敵の能力。

しかし、彼は自身の『操作』^{オペレート}がそれらに劣っているとは考えていなかった。

錫杖を振るい圧力を操作し『EMTH』の文字を刻む。操作の対象は、ウルスラグナ。

(『慟哭』に『欲望』は相性が悪い…… 『拒絶』ならば！)

エメトの魔術師は少女に向けて『ウルスラグナ』を操作した。

と、思っていた。

「！」

『ウルスラグナ』は1mmも動かずにレグナの手にある。ピクリとも動いていなかった。

(操作、不可能っ!?)

圧力で刻んだはずの『EMTH』の文字が跡形も残らず消えて行く。

エメトは舌打ちする。優先順位を即座に変更し少女を撃退するために杖を構える。

パンツ！

銃口から空気が弾けた音がした。

エメトは結界で速度の削れた弾丸を錫杖で弾く。

0.数秒遅れて飛び込んできた少女は 圧力の結界の、一歩手前で止まった。

おそらく弾丸の速度が鈍り始めた位置を正確に把握したのだろう。

エメトは結界のうちに少女を入れようと前へ踏み込む。それと同距離を正確に少女が後ろに下がる。

銃声。打ち出される45mmの大口径の魔力弾。

エメトは至近距離であるにも関わらず反応しそれを打ち払う。もう片方の銃から放たれるであろう弾丸を防ぐだけの余裕を残して、

その余裕が既に誤りであることに気付かずに

バチイッツ

麻痺が全身を貫く。

「『電速の刺突（スタン・レイピア）』」

と、少女の口元が僅かに動いた。

ほとんど無詠唱で発動されたはずの針のような雷撃が地面から突き出され、魔王である彼の全身の神経を麻痺させる。

雷撃により緩んだ意識は『グレイプニル』の拘束力を弛緩させ、『カイン&アベル』の弾速をも削ぎ落とした結界の存在を揺らがせる。

（瞬撃震　！！　接近の理由は2手目の存在、圧力結界の中でなら4発のクイツクドロウを防ぎ切った我の意識の外からの攻撃）

視界が霞んだままエメトは考える。圧力結界の再構築は間に合わない。いまこの場で出来ることはない。

「っ……！！！」

魔術を発動させる。突風を吹き上げて銃口を僅かに逸らせる。

『許されざる者』

左胸に撃ち出されたはずだった【銃の王】の一撃が僅かに逸れエメトの肩に突き刺さる。

「がああっ!!?!?」

弾丸を受けた肩が消滅して腕が跳ね飛ぶ。だが激痛に身を切られながらも圧力の結界を再構築しながらエメトは前進する。

(外したっ……?!)

シャルツはバックステップで結界の領域外に離脱しようと試みるが、『刃神』と同様に『許されざる者』もその絶大な威力と引き換えの疲労感が全身を襲う。

ましてや超人的なスタミナを誇るレグナと違いシャルツは一応は普通の少女なのだ。

咄嗟に雷撃の術式を組み上げるが、一瞬エメトのほうが速い。

(間に合わないっ……)

焦りから足が纏れシャルツは仰向けに倒れた。もう逃げることは不可能だった……

『一之太刀 刃神』

チャキ、と柄が鞘を打つ音が響く。

…それから一瞬遅れて、エメトの身体が縦に割れた。

「……………」

レグナは圧力を受け続けて軋む身体を無理矢理に動かし、仰向けに倒れたシャルツに手を伸ばす。

「あーあ、結局美味しいとこ持つてくんだね レグナは」

シャルツは笑みを見せてその手を掴んだ。

互いに互いの体重を支えるようにして、2人の『王』は立つ。

第8話・ヴァルクリフ攻防戦・下（後書き）

・小ネタ

リースは初期段階では山賊だった

リースの口癖は「愛に歳の差は関係ないのさ！」だった

第9話・戦いのあとに（前書き）

……綺麗

【裁断者】 ナタク・エルステイン

若い娘つてのは意外と歳上のお兄さんに憧れるものなのですよ

【銃の王】 シャルツ・ディバイト・アークエツジ

ボツ……、いま没個性って言った？ ヒロインの私が……?!

半熟震術師 リース

はいはい そういう意地っ張りはあとで聴きますから 柔和な

笑みの女性 アルム

「 「 【限り無き炎】 ゼクウ・フィアレス

お前は俺を引きずり出したいだけだろ？ だから死なねえ程度に傷を負ってわざと負けてきた 違うか？ 【最強の魔王】 グラナ

まったく、最悪の発想ね 【第2魔王】 ルシフ

第9話：戦いのあとに

「……ゼ……、……クウ様！」

身体を揺すられてゼクウは薄く目を開けた。心配そうな顔をしたベルがゼクウの顔を覗き込んでいる。

「はにゃ……、あれ？ ベルがここに居るってことは……」

ゼクウは瞼を擦る。

「僕が一休みしてるあいだに……終わっちゃってたり？」

「はい、魔物は全滅させました

こちら側には負傷者こそかなりの数いますが戦死者は居ません

東門の重傷者もナタク様の治療が間に合って死に至るような傷を負ってる者はいないようです」

「そう あー、そういえば東門のあいつは？」

「……えーっと民間協力者の方のことでしょうか？ いまは詰所の特別治療室のほうに例の剣士の方と居ると聴いていますが」

「やっぱり、生きてたんだ」

堪え切れなかったのかゼクウは大きな欠伸をした。その様子に安堵したらしいベルが本題を告げる。

「ステイア様からの命令で動ける兵士は全員広場に集めるそうです
ゼクウ様も来てください」

「ん、わかった」

「みな、よくやってくれた あれだけ倒せばしばらくは悪魔の脅威も退くだろう」

とはいえ結界は修理中だ 警戒を緩める訳には行かんが、諸君らの健闘を讃えぬのも礼儀に反する

そこで2部隊ずつ交代で宴を開こうと思う」

との、じつで。

「……人が治療受けてる隣の部屋で宴会なんかよくやってくれるよ
な ステイア」

と、レグナ。彼には目立った外傷はないのだが【鎧神】と【刃神】の行使による疲労、それに全身を圧迫され続けたので内臓や骨の検査をしている。

「まったくだよ 美味しい料理……、お酒……、どんちゃん騒ぎ……
… 僕も行きかけた」

ふてたような表情をしているのはシャルツ（未成年）。圧縮震力を撃ち出すカイン&アベルの使いすぎで医者から絶対安静を命じられている。

二人は同時に大きく溜め息を吐いた。
そんな二人のことなどいざ知らず、

「レグナあーどこおー」

外から呑気な声が聴こえてきた。

「リースだな……」

「こないだ連れてた子？ そつえばあの子なんなの？」

「ん、ああ光の術者でな 【星の隷属者】に鍛えさせたら戦力になるかと思って……」

微妙に言葉を濁す。せがまれたから連れてきた、とはレグナとしては言い辛い。

「なーんだ じゃあレグナは僕のモノでOKなんだね」

「は……?」

シャルツは人差し指を立てて意地の悪い笑みを見せる。

「若い娘つてのは意外と歳上のお兄さんに憧れるものなのですよ」

レグナは嘆息し、一言。

「……もうちょい身長伸ばしてから言え」

「なっ……い、言っちゃいけないことを軽々と……!」

「悔しかったら反論してみろ、『怠け者のリトル』」

「あっ レグナいた!」

リースが部屋に入ってきた。そしてなぜか全速力で走ってくる。つてか、おい!?

「てやつ!」

ベッドで仰向けに寝ているレグナに『ふらいんぐぼていあたつく』した。

「いぶう?!」

普段のレグナなら軽量のリース程度なら何の問題もなく受け止めるのだが、疲労困憊かつ満身創痍のため鳩尾みそおしに体重が食い込み変な声を漏らした。

「あたしねー 1週間もねー レグナに会えなくてねー 6年も会わなくても平気だったそっちの女と違ってねー すごく寂しかったのお」

……リース？、キャラが崩壊してるんだが

「……そっちの女つてのは僕のことかなあ？」

シャルツ、お前はお前でなんで青筋たててるんだ……？

「あれえ、他に誰かいたっけ？ そんなチビチビのクセに髪長くてソバカスだらけで学園モノだったら間違いなく“控えめな委員長”か“図書委員”に納まってそうなやつが だいたいいまどきボクっ娘なんて流行らないのよ」

「い、言ったね……？！ このっ、没個性っ！！！」

リースは凍りついた。

「ボツ……、いま没個性って言った？ 仮にもヒロインたる私が……？、嘘…… そんな……」

シャルツがまだ何か言っているが既にリースの耳には入っていない。

ボツ……、わたし……没個性……？ と譚言のように繰り返している。

ふと、入り口に果物の詰め合わせらしきカゴを提げたベルを見つ

けて、レグナは思う。

頼むからこれ以上話をややこしくしないでくれ……

「……ゼクウ？」

ナタクは宴会場から離れたところでへたれこんでいるゼクウを見つけた。

「なんだ エルーか」

ゼクウはナタクの死角で煙草を路面に押し付けて消していた。
大方口煩く煙草を辞めるように言ってくるスティアかと思ったの
だろう。

「……何事？」

「星を見てるんだよ 結界がないとよく見えるから」

ほら、とゼクウの指した指先を追うと満天の星空が広がっていた。

「……綺麗」

「でしょ」

ゼクウは屈託なく笑む。800体の魔物をかすり傷すらなしに倒

した震術師ではなく、ただの16歳の少年の笑顔だ。

「……………宴会？」

「行かない 僕、そういうの苦手だし」

「……………勝利、……………立役者」

「行かないって、って苦し……………?!」

ナタクはゼクウの首根っこを引っ付かんで引きずる。

「わかった、行くから……………ヤメツ…死つ……………」

王国最強の震術師、スティア・クロイツ・マグナビュートは宴会の席から少し離れていた。

「第3騎士団の全滅か……………、わかった こちらには伝えないようにしておく 無用な混乱を招くだけだろう」

ああ 結界の修復まではだいたい一週間と言ったところだ 増援？
貴様は私を誰だと思っている？ 切るぞ、じゃあな」

ふう、とスティアは大きいため息を吐く。

「お仕事の話ですか？」

その傍らに柔らかな笑みを浮かべる女性が歩み寄る。

「アルムか　こちらには来るなと言っ……………」

不意に酷い頭痛が頭を掠めてステイアがよろめく。

アルムは抱き締めるようにしてそれを支える。

「はいはい　そういう意地っ張りはあとで聴きますから」

「……………スマナイ」

と、だけ言うとステイアはそのまま腕の中で寝息を立て始めた。

本来、誰よりも限界に近かったのはステイアなのだ。だが王国最強の震術師である彼は兵士の前で弱さを見せる訳にはいかなかった。

……………ちなみにステイア・クロイツ・マグナビュートは既婚者でアルムは彼の妻だったりする。

「なあ、あの金髪の娘の使ってた術ってステイア様の“屈折”と一緒だよな？」

「バルナ様に代わりの新しい『大震』かな？」

「たしかリース、って言ってたっけ？」

ナタクに引きずられて宴席に入ってきたゼクウは、兵士達の会話を聴いて顔色を変えた。

「……ナタク、僕ちよつと用事があるから」

「……？」

ゼクウは部屋から出ていった。

ナタクはゼクウの口調が平常時の惚けたモノではなく、『大震』の震術師【限り無き炎】としてのモノで面食らってしまった、彼を止められなかったのだ。

(リース…… リースだと?)

ゼクウはその名に微かな引つ掛かりを覚えた。王国の守りの要であるヴァルクリフの役割は何も悪魔に対してに限った物ではない。更に南西に存在する『ライムラント』、通称《本の国》などにも間者を飛ばし常にその動向を探っている。

その間者が毎年送ってくる上位震術師のリストの、昨年分の中にそんな名前があった気がしたのだ。

そしてステイアは彼女を記憶喪失らしいと言っていた。

単なる同姓同名……？ それともたった一週間で光の術を使えるようになったのは単に『忘れていたモノ』を『思い出した』だけ？

ゼクウは資料室に向かう。平静を装っていたが内心は焦ってい

た。

(レグナさんの連れてきたあの少女は……敵……?)

例えば無属性震術の『壁』の術の類いにそういった記憶へのアク
セスを阻む物があったとすれば？

記憶喪失を装い一定期間後にその術の効果が切れて打ち解けたは
ずの彼女がゼクウ達に牙を剥いたとすれば？

ゼクウは焦っていた。

だから城内の人間の顔を全て記憶している彼はたったいますれ違
った女の顔が見知らぬモノだったことに気づけなかった。

ぶちゅ

「
」

彼は悲鳴をあげようと試みたが何もかもがもう遅かった。

「ルシフ お前また派手にやられたな？ 特に左腕、おもしれえこ
となってんぞ」

グラナが腹を抱えてゲラゲラと笑う。

「文句があるなら自分で戦いなさいよ だいたい今回《機械仕掛けの^{セラフ・エクス・マキナ}大天使》を戦闘に使えなかったのはあなたがぶっ壊したせいでしょう?」

「はっ ライトニング【機神】の異名を持つ魔王様が泣き言か?」

ルシフは嘆息する。

「だいたいあなたが出れば【BLADE】も【星の隷属者】も形無しでしょ? なんてあんた引き込もってるのよ」

「違うだろ?」

「はい?」

「お前は俺を引きずり出したいただけだろ? だから死なねえ程度に傷を負ってわざと負けてきた 違うか?」

「……深読みするのも結構だけど、実際にFourthのテストメントを人間に奪われてるのよ? どうする気?」

「知るかよ たったいまお前が言ったじゃねーか 俺が1人いれば【BLADE】だろうが【星の隷属者】だろうが【機神】だろうが物の数じゃねえよ」

グラナは勝ち誇るように言い放つ。

その言葉が傲りではないことがルシフを苛立たせる。

「とはいえたしかに元から7人しかいねえ上に、バオウにドレイクまで欠けちゃあ駒が足りねえな あの調子じゃ【Fourth】は直ぐには動けそうにねーし、【Fifth】のやつはやる気あんのかすらはつきりしねえ」

【Third】のバカは俺でも扱いかねる」

「……今度は何企んでるわけ？」

「逃げた『ベリアルホープ』共をこっち側に引き込む ってのはどうだ？」

グラナは醜悪な笑みを浮かべた。

(まったく、最悪の発想ね……)

第9話・戦いのあとに（後書き）

・真昼が30秒でイメージしたキャラ

レグナ …… 金色のガッシュ クリア・ノート

リース …… とある魔術の禁書目録 インデックス

シャルツ …… GS美神 小竜姫

ゼクウ …… ブラック・キャット トレイン・ハートネット

スティア …… るろうに剣心 斉藤 一

ナタク …… シャーマンキング たまお

ベル …… .hack//G.U. 揺光

第10話：消える炎（前書き）

ゼクウはここに何をしにきた……？
イア・クロイツ・マグナビユート

王国最強の震術師 ステ

だってお前の家、ぶっ壊されてるぞ？
の主人

ヴァルクリフの道具屋

慣れたくないね…… 人が死ぬことに
デイバイト・アーケエツジ

【銃の王】 シャルツ・

どういうことだ 現行の戦力じゃ足りないのか？

BLADE

やあーだあー！！！！

半熟震術師 リース

第10話：消える炎

ゼクウ・ファイアレスは、死んだ。

刃物で喉を貫かれたあとに資料室ごとかなり高位の火炎系の震術で焼き払われていた……

最初にそれを見つけたナタク・エルステインは、のちに駆け付けたレグナが止めるまでボロボロと冗談のような量の涙を流しながら何度も治癒震術を使い続けていた。

死体には効果がないというのに……

スティア・クロイツ・マグナビュートは極めて事務的にそれを処置した。

少し暇が出来たとき、彼が1人で長い黙祷を捧げていたことをアラムだけが知っている。

資料室の火炎はゼクウ自身の抵抗のあとではないか？、という者もいたがスティアはそれを否定した。

ゼクウが本気で炎を放てば建物全体が灰となってもおかしくない。それには部屋1つという焼け跡は小さすぎるのだ。最低でも廊下までは炭と化していなければ、おかしい。

炎はなんらかの資料を焼却するために放った物、とステイアは考えていた。

翌朝、

「ゼクウはここに何をしにきた……？」

ステイアは焦げた匂いの蔓延る、ほぼ全焼した資料室に居た。ナタクが言うには兵士の話を聴いて急に顔色を変えて飛び出していったというが、あの場には百近い人数が居たためにどの兵士か特定することが出来なかったのだ……

どのみち大抵の資料は全て燃え尽きてしまっている。

だがステイアはこの場を離れなかった。

「……クソ」

ステイアはその場に座り込む。

「ステイア……」

「……リースか」

廊下に背を向けていたステイアは振り返らずに言い当てた。

金髪の少女がスティアの後ろに歩み寄る。

「スティア、これ……」

リースはスティアの肩越しに短剣を差し出した。

ベツトリと赤い血の付着した短剣を

「貴様……、これを」

どこで、と言おうとして気づく。それはスティアがリースに渡した同じデザインをした12本の短剣の1つだと……

スティアがリースの震術の攻撃力を補うために持たせた物だ。昔、雷撃を増幅させるように特注で作らせた物なので同じデザインの物は他に存在しない。

「どういう、ことだ……」

「わからない 知らないうちに一本だけ無くなって、それで今日起きたら……」

涙を浮かべて震えているリースが嘘をついているようには、スティアには思えなかった。

第一もし本当にリースが殺ったならそんなもの隠してしまえばいい。

「……わかった、これのことは一先ず私の胸にだけ留めておく 誰にも話すな」

コクッ、と頷くとリースはふらつく足取りで資料室から出ていった……

シャルツは軍の詰所から帰宅しようとして大通りを歩いていた。

「リトル」

すると、向かいから歩いてきた道具屋の主人が声をかけてきた。

リトルというのは【銃の王】としてシャルツという名前は有名なので名乗っているシャルツの偽名だ。

「ん、何？」

シャルツは呼び止められたのが少し面倒だった。早く風呂に入って寝たい……とか考えていた。

「お前、昨日避難所にいなかったけど何処にいたんだ？」

「警報を聞き逃したんだよ……いつも通り自宅に引き込まってた」

「そんなわけないだろ」

男は随分と断定的に言い放った。シャルツは眉を寄せる。

(東門で戦ってたのを見られたのかな……？ だとしたらちょっと面倒なことになった)

シャルツはいくつか男の口を封じる言い訳を考えたが、男の口から出た言葉はシャルツの打算を完全に吹き飛ばした。

「だってお前の家、ぶっ壊されてるぞ？」

「……………へ？」

彼女の家のあった場所は、いまやただの瓦礫の山だった。

【星の隷属者】とルシフの交戦に巻き込まれたことは容易に想像がつく。

なんとかレグナの簡易結界だけは掘り出して破損してなかったことにとりあえず安堵する。

それはともかくとして、

(どろしよ……)

シャルツ・ディバイト・アークエッジは途方に暮れる。

「簡易結界を取りに来たんだが、なんだこの様は……？」

そこへレグナが歩いてきた。

「見ての通り…… 途方に暮れてたところ」

「……どうするんだ？」

「……どうしよう？」

「俺らと一緒に来るか？」

シャルツは眉を寄せる。

「えーっと、今回は街がピンチだったから仕方なく戦っただけ僕的にはやっぱり戦闘とかそっち系はNGなわけで」

「じゃあ、これは？」

瓦礫の山を指す。

「うっ……」

「軍を頼れば【星の隷属者】ことだから多分なんとかするだろうが、間違いなく偽名使っても逃れたかった【銃の王】としての扱いをされるぞ？ お前の顔覚えてるやつも居るだろうし」

「あうっ……」

「次の街まででもいいからとりあえずは一緒に行かないか？ 引っ越すにしてもヴァルクリフの土地って高いんだろ」

「……丸め込まれた」

シャルツはがっくりと肩を落とした。

「……それと、ゼクウの葬儀があるらしいがどうする？」

「慣れたくないね…… 人が死ぬことに」

ゼクウ・フィアレスの葬儀の際にシャルツがポツリと言った。

「そうだな」

だけでもう慣れてしまった…… とレグナも、シャルツも思う。

6年前、魔物に襲われたゼクウを救いだしたのはレグナだった。

6年前、ゼクウに最初に震術を教えたのはシャルツだった。

当時10歳だったゼクウはよくなつてきた。

だけど2人に涙はない。

大戦を経て、2人はそれだけ多くの死を経験してしまった……

レグナはふと辺りを見回す。

ベルが沈痛な面持ちで奥歯を噛んでいて、
ナタクはずっと目頭をハンカチで押さえ、身体を震わせている。

スティアとリースの姿がない。レグナは今朝からリースを探しているのだが、なかなか見つからないのだ。

リースが資料室に行っているあいだにすれ違いになったのだが、
レグナはそれを知るよしもない。

棺が火の中にくべられる寸前で、葬儀場の扉が開いた。

「少し待ってくれ」

息を切らして入ってきたのはスティア・クロイツ・マグナビュートだった。両手に何かを抱えている。

「……貴様が20歳にでもなったら要らぬと言おうが突き返してやるうと思っていたが、こうなってはやむを得まい」

彼は乱れた息を整えて棺に歩み寄ると抱えていたそれを乱雑に棺の中に放り込んだ。

それは、スティアがいままで取り上げたゼクウの煙草のケースだった。

「向こうで存分に楽しむがいい」

「邪魔をしたな、と神父に告げてステイアは踵を返す。

遺体を焼くと同時に煙草くさい煙が葬儀場包んだ。

それがステイアに出来る精一杯の手向けだった。

レグナはステイアを追って葬儀場を出た。

「おい、【星の隷属者】^{アストラル}」

「……なんだ？」

「こんなときに悪いが、『テストメント』って何かわかるか？」

「……魔術語で『遺言』という意味だがそれがどうかしたのか？」

「大したことじゃないんだが、俺が戦った悪魔が『ウルスラグナ』のことを“拒絶のテストメント”って呼んだんだ」

「テストメント、か……」

「お前ならなんか知ってるんじゃないかと思っただが……」

「いや、私も『四人の王（貴様ら）』の武器について詳しいことは知らん 20数年前に特注で造られた物らしいが……」

「そうか……呼び止めて悪かったな」

「私からも頼みがあるのだが、構わんか？」

踵を返そうとしたレグナを今度はスティアが呼び止める。

「構わないけど、なんだ？」

「結界の修復が済むまでのあいだこの街に滞在して貰えんか？ 1
週間ほどで済むはずなのだが」

「どういうことだ？ 現行の戦力じゃ足りないのか？」

「いや 私が一度王国へと戻る必要があるのだが、そのあいだナタクだけでは心許なくてな」

「首都に？ 何の理由で」

「《図書館》に用がある ついでだ、貴様の言うテストメントとやら
らのことも調べておいてやる」

「図書館……ね まあいいか 頼むわ」

「あと、リースと言ったか？ あれを借りていくぞ」

レグナは宿に戻ろうと歩いていた。

「……ところでシャルツ、お前どこまでついてくる気だ」

「えっとね、僕、いま家がないんだよね」

「そっだな」

「ってことは宿に泊まるのは当たり前じゃん？」

ぎっ、ぎっ、と木の床が2人分の体重で軋む。

「ああ だけどそれは下でチェックインした人間の物言いだよね？
お前してないだろ？」

「え 一緒にいいじゃん？ ここライセンス示せば部屋代だけでし
よ、2倍お金払うの面倒だし」

「お前なあ ガキの頃と違ってもう18歳だろうが……」

と、大きく嘆息しながらも一応閉め出したりはしない。

「ところでさっきステイアとなに話してたの？」

「ん？ 結界が直るまでこの街に居てくれてよ ステイアもゼク
ウもないからいま軍の最高指導者はナタクってことになって、
不安なんだとさ」

「……？ ナタクって、あのナタクだよな？ 【裁断者】の」

「そうだが、それがどうかしたか？」

「……あの人がスティアみたいに無線に向かって守備隊に指示だすの？」

「……あ」

「……」

……

「アハハハハハ」

2人は力なく笑った。

そして思いつ。

やっべえ……

と。

リースは駄々を捏ねていた。

「ヤダヤダヤダヤダぜえつつつたいレグナと一緒にじゃないとこの街出ていかない!!!!」

……朝方の資料室での落ち込みっぷりが嘘のようだった。

「阿呆め……」

王国最強の震術師、【星の隷属者】の苦手の物を3つ挙げよう。

1つ目は、

ザックフォード・WS・エクセリオン。
ダブルエス

4つの結界都市を束ねるこの国の王だ。

2つ目は、

激怒したときのアルムだ。

結局のところ男は本気で怒った妻には勝てない物なのだ。と、昨日TVで離活の実例を見て筆者は痛感した。ガクガクブルブルだった。

3つ目は、

……子供だ。

「お前はゼクウを殺ったかもしれん凶器を所持してるんだぞ？ ほとぼりが褪めるまではどこか別の場所で「やあーだあー!!!!」」

……とまあ、こんな調子だからだ。

(ガキは理屈に合わないから嫌いだ……)

ステイアは嘆息する。

「選べ」

「……何を？」

「気絶させられて強制連行か、いまの内に大人しく従うかを」

第10話：消える炎（後書き）

・初期の設定資料

《ウルスラグナ》 『勝利』を意味するエンシエントアーツ。刃渡り80cm近い異様な双剣。非常に硬度が高くほとんど刃こぼれしない。錆びない。相応の使い手が持てば鋼だろうが城壁だろうが豆腐の如くぶつたぎる。

『勝利』

『拒絶』

『エンシエントアーツ』

『テストメント』に

この変更にはいろいろ意味をつける……つもりです

第11話：悪魔を望む者（前書き）

……！！ 【裁断者】 ナタク・エルステイン

このへんの魔物はこれで全部か……？ B L A D E

魔物凶鑑の最新版？！ はっつ、ローアーキヤットの生態……激しく知りたいっ……！ 半熟震術師 リース

ルシフ……エル？ 王国最強の震術師 スティア・クロイツ・マグナビユート

俺っちがいる内にあの人達に手は出させないサ 【破壊者】
シーク

ラーシャルは【Third】ラーシャルなの 【第3魔王】
ラーシャル

第11話：悪魔を望む者

「……………??？」

ナタク・エルステインは首を傾げた。

彼女も軍人だ。

ゼクウのことは彼女なりに折り合いをつけた。

の、だが

彼女はスティアの使っていた軍の指揮官用のごちゃごちゃした機械がある場所に居る。それをどう弄ってみても認証コードがどうとが出るばかりで何がなんだかさっぱりわからないのだ。

ちなみにスティアは予めコードについては教えておいたのだが、自分の記憶能力を基準に一度だけしかその内容を言わなかった。

普通に考えて一般的な人物が膨大な数の単語だとか数字の羅列をそんな直ぐに覚えられるはずがないのだ。

「……………」

ナタクはそのうち機械のほうを諦めた。

無線で連絡を取りさえすればいいや、と安直に思い無線では一つにつき1部隊の隊長としかとしか会話出来ずに不便だと気付く。

「……………!!」

彼女の答えは単純かつ明快だった。

無線を5つ持ち歩けば同時にたくさん指示を飛ばせる。5つの無線機に対して彼女の耳は2つしかないことにナタクは気付かない。

そして彼女のしゃべり方では情報を発信する側としては非常に不
適格であるということも。

結論から言うと、その1週間のうち魔物はヴァルクリフに現れな
かった。

なぜかと言うと、

「このへんの魔物はこれで全部か？ 【銃の王】」

「た、多分 そうだと、思う、よ、【刃の、王（ブレイ、ド）】」

この2人が街に辿り着く前にほとんどの魔物を倒していたからな
のだった……

王城を中心に円を描くように広がる街にスティアとリースは居た。

王の権威を誇るために作られた街。

そして聳^{そび}え立つ王城のせいで常にどこかに影の出来る。もしステイアが王ならば最初の仕事はあの無駄な城を解体することだろう。

ステイアはこの街が嫌いだった。

「さっさと済ませるか……」

国立図書館。ステイアは、いろいろと放置して調べ物に没頭していた。

そう、目をキラキラさせた金髪の少女が「魔物図鑑の最新版?! はうっ、ローアーキャットの生態……激しく知りたいっ……!!」だとか、

「ラフテル・パーソンの新巻?! 行商がケチって途中までしか持って来なかったやつだ 続き読みたかったのよねえ!」だとか、

「お客様困ります 館内はお静かに、それに走らないでください! 埃が、オメエ転けて本、破きでもしたら承知しねえぞゴオラアツッ!……!」

などと言う声が聴こえてきても、彼は放置しておくことにした。些事にかまけて時間を浪費している暇はないのだ。

(ルシフの術の威力はなぜあれほどまでに高かった……？ 何か仕掛けがあるはず……)

スティアは10冊ぐらいの古い本にそれぞれ手のひらを翳したただけでページを捲っていく。表面から反射する光から文字を読み取っているので捲られて行くペースは圧倒的に速い。

(やつは神話と言った。そしてルシフという名がヒント…… たしかに我が国では王国設立以前の歴史はハッキリしていないし、あまり調べられてもいない)

それ以前になんらかの悪魔の干渉があつ……、?!)

スティアはページを捲る手を止めた。

「ルシフ……エル？」

『ルシフェル』

神と同等に等しい力を持ち神に反逆し地獄に落ちた天使の王

(ルシフェル、偶然か？ ……待てよ たしかさっきのページには)

ガブリエル、ウリエルなど天使の名前にエルがつくのはエルという名が神に愛された証だとされるからで

「ルシフェル……地獄に落ちた……神に愛されなかった天使……？、それでルシフ……か？」

そうなるアイツは元・天使、つまり墮天使ということになる。
天使、という存在はベリアルが現れる以前からも度々この世界に
出没した悪魔と違ってほとんど知られてはいない。というか一般的
に存在を認められていない物だ。

だがスティアは人間と悪魔に次ぐ第3の存在以外に灰の瞳と赤い
血を持ち、更に魔力を持つルシフを説明する術を持たなかった。

(だとすれば、天使という存在は結界を受けないのか……?)

可能性はある、とスティアは思う。

この本によると大地は神という存在が作ったとされていて大地に
は『神の愛』^{マナ}と呼ばれるエネルギーが駆け巡っているとされている。

これは大地に存在する力の流れを変えることで異世界の悪魔を阻
む『結界』の理屈とだいたい一致する。

だが神の力と天使の力が類似した物であれば、同調こそすれ阻ま
れることはないのではないか？

スティアは再びページを捲り出す。

これでそれであいつの正体は想像がついたが、結局あの術の威力
は……

「ん……【神術】？」

……そこに書かれているのはあきらかに『震術』のことだったが、その本のどこを探しても『神術』とある。よく見ると他の本にも神術という記述がある。

(誤植……ではないな　メカニズムが解明されるまでは震術は神術と呼ばれていた、と考えるべきか)

震力と呼ばれる力で空気を摩擦したり衝突したりさせて、炎や雷を作り出すのが震術だ。

何も知らない者達からすればそれはたしかに“神の術”と呼べるかも知れない。

「……大それた名だな」

ステイアは溜め息を吐いた。

……待てよ？

「なるほど、大それた名……か」

震術を使う上で重要なのはイメージだ。

『雷極』などはまた異なるが、自分はこういう現象を起こしたいとイメージすることが震術では重要になる。

(人間に作り出せる力の限界を我々は勝手に決めていなかったか?)

イメージする。

自分の力量だけでなく神の力を借りるイメージ。

『震術』ではなく、『神術』を扱うイメージをステイアは組み立てる。

……試して見る価値はあるな

(さて、あとはテストメントだったか)

ヴァルクリフから南東に位置する密林。

「みんな、なるべく早くここから離れるサ」

シークはそれだけ言つと《機械仕掛けの神》を起動し、結界の外へ走る。

「俺っちがいる内にあの人達に手は出させないサ さっさと出てくるサ！」

「……気配は消したつもりだったの」

木の影から推定身長135cmのクセにバカ長い日本刀という組み合わせの訳のわからんやつが出てきた。

だけど、

(こいつ、めちゃくちゃ強いサ 少なくともドレイク以上は確定…！)

シークは奥歯を噛む。

なんでまたこんな辺境にこんなやつがいるのか。

「ラーシャルは【第3魔王】ラーシャルなの 一応確認するけどあなた、『人工半神』 通称『悪魔を望む者』ベリアルホープなの？」

「……っ！」

シークは《機械仕掛けの神》を強く握り締める。

「別に構えなくともいいの グラナが言うにはラーシャル達はあなたの同胞なの

それに、あなた容姿こそ10代後半だけどほんとはまだ7歳かそこらなの いくら魔力が強くて100年以上の年月をかけて研磨したラーシャルの技には勝てるわけないの」

「あんた……どこまで、知ってるサ……?!」

「ほぼ全て聴いてると思うの ルシフが言うにはベリアルホープっていうのは、人間が殺した悪魔の死体から精子を抜き取って人間の女を無理矢理孕ませて作り出した悪魔の個体なの

女は拒絶反応を起こしてほとんど死んで現存するベリアルホープは4人しかいないらしいの

本来は対悪魔用の兵器として運用されるはずだった彼らがベリア

ルが死んで用済みになり解放された、ってラーシャルは聴いてるの

「……………」

「その顔を見るとほぼ正解らしいの？」

「何が目的サ？」

「ラーシャル達の仲間になって欲しいの」

「なるわけないサ、俺っちは人間として生きるって決めてるサ」

「そう、だけどいまの話を聞いた後ろの人達がそれで納得するとは限らないの」

「っ！？」

シークは驚いて振り返る。

「し…シーク……？」

「バカっ　なんで来たサっ！」

その瞬間、

「隙あり、なの」

恐ろしく抑揚のない声が聴こえた。

「?!」

慌てて迎撃しようとラーシャルの方を向くシークの脇を、凄まじい速度ですり抜ける。

斬、

居合いによって男が腹を深々と斬られて、血に沈む。

「お前エエツ!!!」

シークは【半神】としての力を解放した。
悪魔に等しい筋力を持ってラーシャルに斬りかかる。

ガキイツ!

と、《機械仕掛けの神》と刀が甲高い金属音を鳴らして、二人はすれ違った。

「……あなたが来ないって言うならラーシャルは先にあなたが守ろうとしてる物をぶっ壊すの」

シークは村人を背にして立つ。

「でもグラナの言い付けがあるから今日はここでお仕舞いな」

不服そうにそう言ってラーシャルは、そのままシークを放って逆方向に歩いて行く。

(こいつは、野放しにするわけには行かないサ……!)

「シークは《機械仕掛けの神》を『魔力砲』に変形させる。かつてレグナを樹上から狙った型だ。」

「イツケエっ！！！」

シークは引き金を引いた。

ドゴオオンっ！！！！

爆音が静かな森に轟く。

「……1日、考える猶予をあげるようにラーシャルは言われてるのだからいまあなたを殺すとラーシャルはグラナに怒られちゃうの」

【第3魔王】ラーシャルには、傷1つなかった。

神速の速度で振り抜かれた居合いと、それによって裂かれた風を魔術によって統制した一閃が砲弾を打ち消したのだ。

でも、とラーシャルは言葉を続ける。

「これ以上ラーシャルを怒らせないの。どうしてもよくなって全部壊したくなっちゃうの」

再び背を向けたラーシャルを、シークは撃てなかった……

ただ圧倒的な力の差だけが理解出来た。

(そうさっ……あんなやつに構ってる場合じゃないサ！)

《機械仕掛けの神》を通常形に戻しシークは治癒震術の魔方陣を作り出し《機械仕掛けの神》の切っ先をレーザーシャルに切られた男に向けた。

「あなた、直ぐに治」

「ひいつ?!」

男は、怯えた。

「……」

シークは呆然とした。

いままでずっと守ってきたのに、
命懸けで戦ってきたのに、

【半神】ということが知られるだけでその信頼は容易く揺らいでしまったことに……

「……、真言者よ 主の理ことわりを解せし者よ 主の愛を解し、主の心を解し、その理を持って神の子を癒せ」

魔方陣が光を放ち、シークの震術で男の傷は跡形もなく消えた。

男は一瞬なにが起こったのか理解していないような表情になり、後ずさって結界の内に逃げて行った。

「俺っち、どうしたらいいサ……」

ラーシャルの言った『同胞』という言葉が耳に残って離れなかつた……

第11話：悪魔を望む者（後書き）

テスト1週間前……

でも続き書きたいorz

第12話：暗躍（前書き）

貴様ではないのか？ スティア・クロイツ・マグナビユート

王国騎士団長 レィム・リーガル・アーカナイト

んがあ？！、わっ、とっ、たっ、とうえい？！ 王 ザック

フォード・WS・エクセリオン

だいたい貴様、私が来るのを見計らって仮眠を取るとはどういう了見だ！？ 王国最強の震術師 スティア・クロイツ・マグナビユート

嫌ですよ だつて恐いですもん 近衛兵長 レィ・バークライト

『EMTHの魔術師』とはよく言ったモンだわ 【機神】 ルシフ

ライムラントの、行商か 第6守備隊長 ベル・バークライト

第12話：暗躍

（テストメントとやらに関する記述はないな……　あるいはテストメントというのは悪魔だけの呼び方なのか？）

いくつか仮説は浮かんだが結論は出ずにスティアは書物を閉じた。横目にリースを確認するといまは大人しく本を読んでいる。

（……テストメントに関しては当事者に直接訊いたほうが早いかも知れんな）

それが武器である以上は設計した者が、あるいは鍛えた者がいるはずだ。

20数年前なら王宮にはまだ当時のことを関係者もいるだろう。

隣に数冊の本を置いて、いまは分厚い図鑑を捲っているリースを放置してスティアは王城に向かった。

城に飾られたごてごてとした装飾品の数々を前にスティアは呆れかえった。

（間抜けが大臣共め　民の税をくだらんことに……）

「スティア・クロイツ・マグナビュート」

そこへ更に嫌な声が聴こえてスティアは額を押さえる。

「……レイムか」

身の丈ほどもある大剣を背に差している目付きの鋭い男。

レイム・リーガル・アーカナイト

王国第一騎士団長だ。

「ヴァルクリフで何があった？」

「襲撃を受けた……、こと自体は報告がいつているはずだな？」

「ゼクウ・フィアレスが殺されたと聞いたが」

一瞬、ほんの僅かに口端に笑みが溢れたのが見えてスティアはレイムの死角で拳を固める。

(……そういえばゼクウはこいつのことを散々コケにしていたな)

僅かに息を吸い込んでスティアは心の温度を下げる。

「……事実だ 誰がやったのかも定かではない」

「貴様ではないのか？ スティア・クロイツ・マグナビュート」

「……」

「ヴァルクリフの結界が破られた、という報告も怪しい物だ あれは外側から破れるような代物ではない」

「目撃証言がいくつかある 外側から飛翔体が降下してきて核を切断された」

「そのとき結界が正常に機能していたとなぜ言える？」

懐疑主義者。

それがレイムを表す最適な言葉だろう。

誰も信用しないことで彼は王国騎士団長という肩書きを手に入れた。

「数値は全て正常だった」

「わかっていないな 俺は貴様を疑っているのだ、ステイア」

乱雑な口調でレイムは吐き捨てる。

たしかにヴァルクリフの結界を切ることが出来るのは総司令であるステイアだけだ。

そのステイアが結界の数値を語ったところで彼にとっては意味は薄いのだろう。

(こいつに『天使』の話をしたところで理解を示すとは思えんな…)

ステイアは息を吐いた。

「……私に何のメリットがある？」

「内部からの国家転覆」

予想していた通りの答えが帰ってきてステイアは思わず噴き出しそうになった。

(たかが知れている……)

結局、人間と悪魔が戦争を行っているなかでレイムはその程度のことには頭を悩ますような人間なのだ。

これが騎士団長とは呆れさせてくれる……

「……王には俺から報告を入れさせて貰う」

ステイアは返す刀とばかりに挑発的に口端を吊り上げた。

「好きにするがいい あの方の目は節穴ではないからな」

そして低く笑う。ステイア自身が嫌いな類いの笑みだが、こつこつカードも必要だと彼は知っていた。

「騎士団長殿は剣よりも舌を振るうほうが得意と見えるが、第3騎士団の全滅についてはなんと言い訳するつもりだ？」

「っ……」

「いい加減に気づけ いまは互いに腹を探り合っている場合ではない

貴様は第3騎士団を、私はバルナとゼクウを失い互いに揺らぎつつある　なんとかしてこの状況を打破せねばならんのだ」

「仕事が残っている、失礼する」

「まったく……道化を演じるのも楽ではない」

眩き、スティアは謁見の間へと登った。

「王、ザックフォード・WS・エクセリオン」

スティアは片膝をついて礼を示した。

「ぐがー」

……玉座にだらしなく両手と両足を広げて座る王に向かって。

「……」

スティアは無言で玉座に近づく。心なしかいつもより足音が大きい。

本来それを止める立場にある王の左の近衛兵は微笑を浮かべたまま突っ立っている。

玉座の前にたったスティアは、とりあえず王の横つ面をぶん殴った。

「んがあ?!、わっ、とっ、たっ、とうえい?!」

こめかみを殴打されたザックフォードがバランスを崩して転げ落ちる。

「つてえな?! やりすぎだろスー坊!!」

「誰がスー坊だ、このド阿呆!」

王国最強の震術師、スティア・クロイツ・マグナビユートを“スー坊”扱ひするこの男こそが、王国の主、ザックフォードなのだが、「だいたい貴様、私が見計らって仮眠を取るとはどういう見だ?」

胸ぐらを掴みあげられる王を見て、その左に控える近衛兵長 レイ・バークラントは思う。

……この人、威厳の欠片もねーよなあ

「おい?! 助けるレイ、賊だぞ 賊!!」

王の隣でレイはあっさりと言う。

「嫌ですよ だって恐いですもん」

「テムっつ、クビだクビ！　いますぐ代わりのやつ連れてこいっ！
！」

「構いませんが、俺の前の近衛兵はあなたのがままに付き合い切れずに30人連続で自主退職したのをお忘れにならないように」

「ちくしょう！！！！」

……と、4つの結界都市を統括する王国の王、ザックフォードは叫んだ。

そんな威厳がないザックフォードが国を治めているのにはそれなりの理由がある。

最も単純で、誰もが納得せざるを得ない理由。

彼は優秀なのだ。

おそらくこの国で最高の頭脳を持っているだろう。国内外の事象を全て頭に叩き込みその中から最適な解決策を叩き出す。

ザックフォードの辞書にはミスはない。と言われてるほど彼は優秀な王だ。

「テストメント？　いや　そういう呼び名は知らねーな」

そのザックフォードが眉を寄せた。

「レガリアだとか言ってるのは聞いたことがあるが……」

ザックフォードはボリボリと頭を掻く。

彼はここ数十年間に行われた国内の研究とその内容のほぼ全てを熟知している。そのザックフォードが知らないというのだから、テスタメントという呼び名は人間のあいだでは使われていないのだからとステイアは思った。

【第4魔王】 エメトは伏魔殿という大陸にある唯一の建物を歩いていた。

（人間の築いた城だと言うが、見事な物だ　これほどの物は魔界でも中々お目にかかれんだろうな）

白を基調とした建物は彼の好みではないがそれでも素直に賞賛出来るだけの荘厳さがある。

「帝国……、ベリアルが滅した人間の国か」

術的な防壁の施された壁に触れる。

「……脆弱だな」

エメトはそれに拳を突き立てた。それだけで壁に人間大の穴が空く。

帝国が滅びたのは結界の技術が浸透していなかったからだと言わ

れている。それは概ね正解らしい、とエメトは思う。

「ちょっと、そんなに軽く壊さないでくれる？ グラナに当たられるの私なのよ」

しかめっ面をしたルシフが言う。

「済まない」

エメトは素直に頭を下げた。

「ったく……」

ルシフはしかめっ面のまま魔方陣を作り出し、その中に右手を突っ込む。

「左はまだ治らんのだろうか？」

「ええ、サービスすぎたわね」

曖昧に笑みを見せてルシフは魔方陣から何かを引きずり出す。

「グラナからの命令」

「またか」

どつやら手紙らしい。

「便利な四次元ポケットだな」

ルシフはそれを無視して紙を押し付けた。
紙に目を落とす。

「この前は口伝で今度は手紙か グラナも一貫せんな」

「動ける？ 城のなかほつつき歩いてたの、リハビリのためでしょ」

「少し辛いな スペアにまだ馴染んでいない」

エメトは砕いた壁の破片を一つ握り締めた。

ゴキゴキ、と鈍い音を立てて手のひらの中でそれが潰れる。

「……本調子なら粉々に出来るのだが」

「あれだけやられて生きてるほうが変よ 『EMTHの魔術師（真理を嘲る者）』とはよく言ったモンだわ」

「それは暗に敗北を非難しているだろうか？」

「別に、私だって敗走したわけだしあなたの相手はあのベリアルを倒した【刃の王】に【銃の王】でしょう」

「人間には違いあるまい」

エメトは壁の破片に『操作』を発動する。

「互いに名誉挽回が必要だろうな」

『操作』を受けて破片の石材が充分に磨かれた杖の形に固まった。

「直ぐに出よう 標的は『ベリアルホープ』か」

(ゼクウ様はなぜ殺された……?)

ベル・バークラントは考える。

震術師としてのゼクウ・フィアレスは冷酷な面はあったが、人の恨みを買うような人間ではなかった。

16歳という年齢で王国最強の部隊と言われる『大震』に抜擢されたことに嫉妬する声もあったが、彼の力を見た瞬間にそれらは一斉に押し黙った。

根本的に力の格が違うのだ。

実質的にヴァルクリフに駐屯する軍の戦力は【星の隷属者】と【限り無き炎】だけと言っても過言ではない。

例え1〜9の守備隊総員374人が総掛かりでも彼らに敵うことはないだろう。

「外部の犯行……」

そうとしかベルには考えられなかった。

12話になっていままさだがこの世界には4つの国がある。

ベルやゼクウの居る『王国 チェインジュリス』
王国から南東に位置する術の研究の盛んな『本の国 ライムラン
ト』
遙か北に位置する極寒の地、『氷の国 アイスログ』
そしてかつて伏魔殿に存在しベリアルに滅ぼされた『帝国 アグ
リード』の残骸、『旧帝国』

この中で王国が交流があるのはライムラントだけであり、それも
政治的な物ではなく行商が微かに行き来をするのみだ。

(ライムラントの、行商か……)

ベルが外部の者として思い当たったのはそれだけだった。

戦争、という言葉が一瞬脳裏に浮かぶ。

(なるべく慎重に動いたほうがいいかもしれない……)

ベルは大きく息を吐いて、詰所を出た。

なぜかこのところ悪魔の襲撃がないため少し時間が余っているの
だった。

第12話：暗躍（後書き）

テストが始まるまでに完結させれば……

とか考えてしまつ or z

第13話：鬼が出るか蛇が出るか（前書き）

お…、お前が、ゼクウ、様を？
クライト

第6守備隊長 ベル・バー

それでエ、あんたも死ぬのオ？

青い炎を操る震術師

……化け物

【裁断者】

ナタク・エルステイン

え あれ？ スティア？ 居ない？

半熟震術師 リース

さて、鬼が出るか蛇が出るか
クロイツ・マグナビユート

王国最強の震術師 スティア・

第13話：鬼が出るか蛇が出るか

ベル・バークラントは本の国からの行商の元を訪れた。
遠くから馬車を引いて来てきたそれにベルは客の振りをして商品
を覗き込む。

「……………」

なんとというか、変わった品が多い。

まじないの道具か何かだろうか？ 木彫りの人形や水晶などが中
心だった。

震術師ならばなんらかの意味を見い出せるのかも知れないがベル
には何に使う物なのかさっぱりわからなかった。

「あんだ、買うのかい？」

目の下に隈のある不健康そうな男が出てきて言う。

「いや 少し見ているだけだ」

ベルが品から顔を上げた。

「……………」

ベルの顔を、正確にはその肩にある軍の紋章を見て、男は震え出

した。

「ああんた？ 軍人か？」

吃りのある口調ですがるような目付きになる。

「た、頼む 助けてくれ あの女が帰ってくる前にどっかに匿っ…」

唐突に男の言葉が切れた。

爆発した。

「?!」

男の身体が内側から、何の予兆もなく唐突に。

「あらア ダメじゃない裏切っちゃあ、ねエ？」

背後から声が聴こえた。15歳前後の少女の声だった。

語尾の跳ね上がる女の声は、どこまでも愉悦に満ちていた。目の前の血と肉塊をオモチャか何かとして見ているかのような声だった。

(人……、間………?)

ベルは震える身体を御することが出来なかった。圧倒的な殺意に吞まれてしまっていた。

「お…、お前が、ゼクウ、様を？」

「ゼクウ？ ああ、あの煙草吸ってた子オ？ ちょっと困ったことに気付かれそうだったから殺っちゃったわア」

死ぬ。とベルは確信した。

空気に喉を押し潰されているような錯覚があった。

そもそもゼクウ・フィアレスですらベルにとっては『怪物』の域だ。おそらくベルが1000人いても勝てないだろう。

いくらあのとときゼクウが疲労していたとはいえ、それを殺したやつを相手にどう戦えというのだ。

それでも震える手をなんとか腰の剣まで持って行く。

「それでエ、あんたも死ぬのオ？」

びくん、とベルの肩が大きく上下した。

直後。

青い炎がベルを包み込んだ。

「あ……れ……？」

奇妙な感覚だった。

炎の中に居るのに熱くない。

皮膚の上に一枚薄い壁があるような、って違う。

本当に壁がある。

「ナタク……様っ?!」

ナタク・エルステインの《六柱障壁》が炎を打ち消す。

「……何事？」

「ふうん、【裁断者】ねエ？」

語尾が跳ねる。圧倒的な戦力を持つはずの『大震』を前にして尚、女の声には殺意と狂気と愉悦しかない。

「……」

ナタクは無言のまま横薙ぎに片手を振るった。

女が後ろに跳び、一瞬遅れて地面が削れる。

(鋼線……?!)

チカツと一瞬、光ったそれはナタクのグローブの五指からそれぞれ一本ずつ伸びていた。

「“分解震”ねエ おもしろい術使っじゃないのオ？」

『分解震』 無属性震術の一種で物体を左右に引き裂くように震力
を作用させる高等震術だ。

治癒震術に限らず無属性震術は極端にリーチが短い。
ナタクはそれを鋼線を使うことでカバーしている。

「……………」

ナタクが腕を振るう度に周囲の物体が切り裂かれるが、不規則な
軌道を描く十本の鋼線を女は易々とかわす。

見切り辛いはずの鋼線のリーチと位置を完全に把握している。

「死、死、死、数多の屍の上に我が火は立つ」

女が詠唱する。

ナタクは咄嗟に鋼線を引き戻した。

《神へ還す火》
クリメインヨン

青い炎が舞う。

(まさか、ゼクウ様の術より……………?!)

“炎”に於いてゼクウの右に出る者などいない、とベルはそれま
で思っていた。

だがゼクウの炎はあくまで赤だった。炎というのはその温度によ
って赤、青、白と色を変える。

対して女の炎は青い。

「……六、……」

《六柱障壁》を発動しようとしてナタクは手を止めた。目の前の炎が、それで止まるとは思え無かったのだ。

「……、十柱障壁」

ナタクの障壁震術は鋼線を柱として見立てて多角形を作り《リフレクション》に力を流す『点』を増やして強化する物だ。

手の内にある鋼線は10本。《十柱障壁》はいまのナタクの中で最大の防壁だった。

ズドオオン！！！！

「……っ！！」

それが、破られた。

が、直撃すれば灰と化していたであろう炎が障壁を突き破ったことにより緩和され、ナタクとベルは生きていた。

「……撤退」

短くナタクが言い、真下に腕を一閃した。

鋼線から伝わる分解震によって大きく大地が裂ける。

「あらア？ 逃げるわけエ？ もっと遊びましょうよオ？」

「……化け物」

ボロボロのナタクが小さく呟いたのを、ベルは聞いた。

「え あれ？ ステイア？ 居ない？」

リースは置いて行かれたことに気付いた。

とはいえ王都の国立図書館だ。国内外のほとんどの本が集まって来るここはそれ相応の広さがある。むしろ広大と言っていい。

「もしかしたらその辺に居るかな？」

その後、2時間ほどたつぷり館内をさまよい最終的に迷子になって保護されるのだがそのことを彼女は知るよしもない。

「さて、王国の設備ならば『これ』の解析も可能か」

第一震術研究所。ステイアは王城を出て研究所に居た。

ステイアは何もない背に手をやって長い棒のような物を取り出す。そんな物を持って歩けば異様に目立つため光の術式で視覚的に消失させていたのだ。

ちなみにこの『視覚的に消す』術式は便利なのだが組むのに時間がかかる上に急激に動いたり、他の術を使ったりして震力が乱れると直ぐに解けてしまうので戦闘に応用し辛い。

「あ、アストラルさまっ?! お越しくださるなら連絡して戴ければ迎えにあがりましたのに……」

「構わん、今日は視察ではなく私用だ。震力解析機と魔力解析機を借りるぞ」

「どうぞお使いください!」

白衣の女は嬉しそうに言った。

『解析機』とはレントゲンのような物だ。

ステイアは以前、リースの震力を暴走によって見極めたが、それはステイアとリースのあいだに圧倒的な力量の差があったから出来たことで並の術者が同じことをやれば死ぬことも珍しくない。

レグナが「喰われるな」と言ったのはそういう意味だ。

が、解析機を使えば暴走させずともその性質を直接見ること
で
性や、同じ属性の中でもどんな術に向いているを調べる
ことが出来るのだ。

スティアは先ず震力用の解析機にそれを通した。

(反応なし……か)

震術的にはこれはただの棒切れということになる。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか」

次に魔術用の解析機に通した。

即座に反応があがり様々な数値が機械から吐き出される。

(これは……!?)

バカな、と唇だけが動いた。

喉がひき吊って声が出なかった。スティアは絶句していた。

それは、『悪魔』そのモノだった。

『欲望のテストメント、グレイプニル』はその材料の一部に、かつ
て魔王クラスの悪魔の死体が使われていたのだ。

だがスティアが驚愕したのは『そこ』ではない。

『テストメント』と呼ばれる武器がもし魔王と呼ばれるほどの力を持つ悪魔の死体を利用したものなら、

人間が作ったはずの『ウルスラグナ』や『カイン&アベル』はど
うなる？

(ベリアルが現れるまで、魔王と呼ばれるほどの悪魔の侵略はな
ったはずだ……)

『ウルスラグナ』や『カイン&アベル』は20数年前に作られた
物だとステイアは聴いている。

即ち20数年前にも魔王級の力を持つものがこの世界に現れた証
明に他ならない。

なら、たった『20年程度』前のことをなぜ誰も知らないのだ…
…？

第13話：鬼が出るか蛇が出るか（後書き）

ステイアの没セリフ

「まったく……『四人の王』というのは行方不明になるのが特技らしいな」

ってか、やっべ

四人の王って書いていて

『刃』、『銃』、『本（名前だけ出た）』ときて最後の1人が出る予定ない……

第14話：焦燥（前書き）

ルシ、フ、我は、下手を、打った、よう、だろう
【真理を嘲る者】 エメト

『ベリアルホープ』って私達が思ったよりずっと優秀みたいよ

【機神】 ルシフ

ムササビだ！ 半熟震術師 リース

未恐ろしい…… いや既に恐ろしいか 王国最強の震術師 ス
ティア・クロイツ・マグナビユート

レグナ 先ずその手を離そうよ？ 怠け者のリトル

ともかくその女を捜そう BLADE

第14話：焦燥

女はとりあえずは追って来なかった。

酷い火傷を負ったナタクに肩を貸しベルは守備隊の詰所に辿り着いた。同時にナタクは倒れた。

治癒震術は自分に向けるのが難しい。だけどこれほどの火傷を治せるレベルの震術師はナタク自身しかない。

「……契約、者」

と、ナタクが倒れる寸前に呟いたのをベルは聴いた。

「契約者……」

ベルにはその意味がわからなかった。
わかる、であろうスティアはいまヴァルクリフに居ない。

あの男ならば、

あの男はゼクウ様と親しげに話していた。
ナタク様とも親しいらしかった。

そもそも王国最強の部隊である『大震』にタメ口をきく人間など
そうはいないモノだ。

「……」

レグナ、と呼ばれていた破壊者バスターを探すためにベルは走り出した。

（あの女がもう一度攻めて来ないとは限らない……！ なんとかしない……）

「ルシ、フ、我は、下手を、打った、よう、だろう……」

【第4魔王】 エメトは血みどろの身体を引きずっていた。

…いまどこ？ 何があったの？

魔力による直通の念話魔法で会話している。

「例の、ベリアル、ホープの、場所だ なんとか、行動、不能に、した、が、我も、深い、傷を、負った」

エメトの傍らには同様に血みどろの細身の剣を持った少年が手足をゴレムに拘束され血走った目を剥いている。

拘束が解けた瞬間に少年はエメトを殺すだろう。

…わかった、《機械仕掛けの大天使》の最高速でそっちに行くわ

「お前の、腕は、まだ、二人分は、支えて、翔べん、だろう？」

…大丈夫よ、あなたが戻ったら紹介するわ 『ベリアルホープ』

って私達が思ってたよりずっと優秀みたいよ

「……………？」

ステイア・クロイツ・マグナビユートはリースを連れて王都を出て林の中を歩いてた。

ちなみに行きもそうだったが、震術の理論を教えながら歩いている。

(飲み込みが早い…………いや 早すぎる…………)

ゼクウ・フィアレスは火術に特化した天才だった。逆に言えば炎以外にもは静電気一つ起こせなかった。

ナタク・エルステインも同じだ。彼女は無属性の特化という稀少な属性を持つがそれ以外の術はほとんど使えない。

ステイア自身は7歳から震術を学びおおよそ20年の年月をかけて練磨し続け、王国最強と呼ばれるまでの使い手となった。

それでも適正のなかった無属性は使えないし、火術よりも雷術のほうが得意だ。

だが、リースは違う。

彼女は属性こそ光だが本来『その他』となるほどの他の属性の才

に恵まれ過ぎている。

(そんな者があり得るのか……)

図書館から【星の隷属者】の名で借りてきた大量の本を抱えて満
足気な笑みを浮かべているリースを横目に見る。

(……あり得る、か あの女はそうだった)

スティアは『四人の王』の中で最も異質だった女を思い浮かべる。
名前すら名乗らずに自身を『マスター』と称し、スティアを超える
震術を軽々と操って見せた女。

それまで最強の震術師を名乗っていたスティアは初めて人間に一
対一で敗北した。

その日からスティアは王国最強と名乗っている。王国の外には自
分より強い震術師が居ると知ったからだ。

……死んだ人間のことを考えるのはよそう。

「……さて、先ずはこいつをなんとかするとしようか」

スティアは潜む悪魔の気配に身構えた。

……が、ふと構えを解く。

「リース やれるか？」

「え……?」

「私は手を出さん 一人でやってみろ」

「……ん わかった」

リースは手の内に短剣を忍ばせた。

「シャツ!」

木上から猫のような猿のようなんだかよくわからない悪魔が飛びかかってきた。スティアの強さを察したのか、リースに向けての跳躍だった。

それをリースは身体を捻りかわし短剣を投げる。命中するよりも速く悪魔が真横に跳んだ。腕の下から翼のような物を広げて減速し再び木を蹴る。

「ムササビだ!」

リースが目を輝かせた。

(リース曰く)ムササビ悪魔は木を足場に再び跳び上がる。枝や幹を足場に高速で跳ねる。

リースが短剣を放つ。が、それを潜り抜けるようにして突っ込む。

「!」

ザクッ!

リースの腕に爪痕が走る。地面に足を着くのは一瞬で再び跳躍す

る。

リースは2本の短剣を投げた。

それらは跳び去ったあとの樹に突き刺さる。

最後に悪魔と逆方向の樹に短剣を投げつけた。

「アトモスファイアは網を吐く」

詠唱　、　一手で戦局は逆転した。

それぞれ木や地面に突き刺さっていた五本の短剣を無数の雷の糸が繋ぎ、

「ぎゃっ!?!」

高速で木から木へと跳躍を続けていた悪魔は止まれずにそれにつ込んだ。

(楔を打ち込んだの陣形雷撃による捕獲術式、《紫雷の瀑牢》か…
…)

「えーっと、周りが林だから攻撃範囲を絞った術式は…:…: 《地獄の熱風》じゃなくて、《紅炎》でもなくて、あ　そうそう

“その怒りは神をも滅ぼす”」

《火龍の咆哮》

完全に威力をコントロールされた炎の砲撃が悪魔を撃ち抜いた。

「……こんなところ？」

「合格、といたいところだがあの程度の悪魔に手傷を許すのは感心せんな」

「げ……」

リースはげんなりした。リース達は同種の悪魔の群れに囲まれて
いるらしかった。

「手本を見せてやる」

スティアは不敵に笑うと、『震術』ではなく、『神術』を使うイメ
ージを組み立てる。

(大地に流れるマナを取り込むイメージ……)

降誕

《激怒する雷神》

狭い林を無数の雷撃の槍が走り悪魔だけを正確に串刺しにし、電
熱がそれを焼いた。

「……あの程度の相手ならば広範囲術式の一撃で捻れるようになれ
レグナと並び立ちたいならな」

「うつ……、先は長い」

リースは嘆くが、スティアはまったく別のことを考えていた。

(つい2週間ほど前までは《火炎の弾丸》と《障壁》しか使えなかった少女が、《紫雷の瀑牢》に《火龍の咆哮》、か……)

未恐ろしい……

いや 既に恐ろしいか……

「契約者だと？ ナタクがそう言ったのか……?!」

レグナは思わず息を切らしているベルの両肩を握り締めた。

「ナタクに会わせる そいつは、」

「レグナ 先ずその手を離そうよ?」

咎められてレグナは慌てて手を離す。

「ナタク様は倒れられた…… 命に別状はないそうだが、かなりの重症だ」

「……っ」

【裁断者】 ナタク・エルステインはあらゆる戦場から無傷で帰還したことで有名だ。攻め手の派手さはないが、彼女の防壁震術はそれほどまでに強固なのだ。

王国にとって謂わば『大震』の存在とはジョーカーだ。相手の手札がなんであるかが叩き潰す切り札。

そのうちの2人を、あの女は軽々と踏み砕いた……

「契約者とは一体なんなのだ……？」

「……言えない」

レグナが答えた。

「なぜだ……？」

「この国の国家機密だからだ。俺が言えるのはある魔法を使った人間を『契約者』と呼ぶこと、それだけだ」

『かの魔法を知ることを禁ず』

『かの魔法を学ぶことを禁ず』

『かの魔法を使うことを禁ず』

俺だって偶然知ったんだよ」

偶然、か…… とシャルツは思う。

「ただどあれは偶然ではなく必然だった。レグナが【BLADE】である以上知らなければならぬ物だった。」

「ベルは納得いかないようだったが、やがて諦めたように小さく息を吐いた。」

「契約者とは、私達の敵なのか？」

「……ああ」

「シャルツがレグナの腹をついた。喋りすぎだよ、とその目が語っていた。」

「ともかくその女を捜そう」

第14話：焦燥（後書き）

没キャラ

サロメ・グロスト（178）

外見17〜8歳。ベリアルルの娘で純血の悪魔。やる気なかったのに呼び出され魔界に帰る術がなくて仕方なく人間に見つからないように洞穴でひっそりと生活していた。弟がいてブラコンで愛情表現が屈折しまくってる

氷系魔術の達人

・没になった理由

弟のほうの設定変更に伴い無理がでた

第15話：【First】（前書き）

あーあーつまり何か？ お前は性善説でも主張してんのか？
王 ザックフォード・WS・エクセリオン

あらア 引きこもりちゃんが遂におでましィ？ 青い炎の震術師 シファ・バルバローネ

っ……魔王、か?! B L A D E

俺の能力は《反魔法》 震力、魔力を用いた攻撃は俺の前に全て平伏す 【最強の魔王】 グラナ

最、強…… 【銃の王】 シャルツ・ディバイト・アークエッジ

っ……!! 王国最強の震術師 スティア・クロイツ・マグナ
ビュート

私が治す！ 半熟震術師 リース

第15話：【First】

ザックフォード・WS・エクセリオンはガリガリと頭を掻いた。

「あーあーつまりあれか お前は性善説でも主張してんのか？」

ザックフォードの前にはいま『本国』から来た、と主張する男がいる。

ヴァルクリフでナタクを襲った女の話は既にザックフォードに届いていて王国にあるライムラントの高位震術師のリストから『シファ・バルバローネ』という人物だと割れていたのだが、男はそれを『シファ・バルバローネ』ではないと言い張るのだ。

「顔も、使う震術系統も完全一致、指紋やらなんやら含めて疑う余地はまったくなし お前の話をどうやって信じるってんだ？」

「死んでるんです」

「……はあ？」

「シファ・バルバローネは数年前から“生きた死体”なんです

身体こそ生きてますがある術式に失敗して魂が存在しない

そのシファ・バルバローネが動き出すなんてことは絶対にあり得ません」

(魂が消える術式だと……?!)

ザックフォードはいままで読んで1万冊近い魔法書から知識を引きずり出す。

「っ……、人間の天使化か!？」

「……、はい」

「マナの干渉による人体変化の類いの術式は国家協定違反だろ？それを俺に話してただで済むと思っているのか」

「関係ありませんよ」

「何？」

「ライムラントは、もう滅びましたから」

「お前もその女を見たのか？ 容姿はどんなだった？」

「15歳ぐらいの少女だ 背は……こいつよりも少し低かった」

と、シャルツを指す。

「なっ……?!」

激怒するシャルツを放つてベルは説明を続ける。

「髪は黒、瞳は少し赤みがかった茶色でパツと見は普通の服に見える白い法衣を着ていた　そうそう、丁度あれくら……」

通りの人混みの中で子供を見つけてベルは急に言葉を止めた。

「あれだっ!」

叫んだ。

「バカッ」

レグナが言うのと同時にこちらに気づいた女が街の外に向けて駆け出す。

(この先は……、南門か　閉鎖、は意味がない　門の強度なんかナタクの障壁に比べたら全然脆い)

クソッ　人混みが邪魔で全力で走れない……!

焦燥するレグナの隣でベルがシャルツの腰から銃を抜き取った。

「伏せろ!　撃つぞ!」

!!!!

一瞬、パツと場が静まり返り人の波が左右に割れる。

「ナイスっ……」

レグナが加速した。

「速い……！」

弾丸のような速度で駆けるレグナと女の距離は少しずつしか縮まらない。

「ちいっ……」

門の手前まで来た。

凄まじい速度で疾走する女とレグナを見て門番が門を閉め始める。基本的に出国証がないと出られないシステムになっているヴァルクリフでは2人の姿は脱国者にしか見えないのだろう。

「……の……に……」

風に乗って微かに届く詠唱の声、

「閉めるな！」

レグナは咄嗟に叫んだ。その程度で閉門が止まるとは思っていなかったが予想外に門番はその声に、一瞬動きを止めた。

《神へ還す火》

青い炎が門に突き刺さり、対魔法障壁を施された門が溶けた。

(あらア？ まだ追って来てるわねエ)

女はレグナの姿を見ていない。追撃者の気配だけで逃げていた。

(《神へ還す火》を見ても引かないってことは少なくとも『大震』クラスの強さは持つてる訳ねエ せっかく【星の隷属者】撒いたのに、めんどくさいわア)

啞然とする門番の横をすり抜けて門の外に飛び出す。

想定外の人物がそこにいた。

「あ？ なにやってんだ？ お前」

「あらア 引きこもりちゃんが遂におでましィ？」

すれ違つ寸前にそんな会話を二人はした。

鎌の一閃と青い炎が交差する刹那に、

「ちいっ……」

鎌の男が舌打ちする。女は既に射程圏から遠く離れていた。

「まあいい 遊び相手はまだいるからな……、『BLADE』」

「っ……魔王、か?!」

ウルスラグナを抜く。

「【First】 グラナだ、よろしくな」

言葉を発するのとはほぼ同時に、グラナの鎌がピクリと動いた。レグナがウルスラグナを構える。

、とグラナが鎌を下ろした。

「……、何のつもりだ？」

「はあ？ お前、まだ戦えるつもりでいるのか」

途端にレグナは足元に激痛を感じた。

「つうああああっ!?!」

右足の膝関節の付近がバツサリと切断されていた。

「くだらねえ バオウもドレイクもエメトもこんなやつ相手に何を
手こずってたんだ？」

つまらなさそうに呟くとグラナはレグナに興味を無くした。

直後に、閃光の弾丸が飛来した。

許されざる者 、だがそれは命中の寸前で突然砕けた。

「?!」

『許されざる者』を放つたのは言うまでもなくシャルツだ。そして『許されざる者』は『刃神』に匹敵する威力を持つ彼女の、【銃の王】の最大の一撃。

(何を、した……?)

焦るシャルツと裏腹にグラナはニヤリと笑みを浮かべる。

「俺は自分の力を誇示したがるタイプだからな、木偶の棒のお前らにわざわざ解説してやるよ」

侮蔑に満ちた口調でグラナは言う。

「俺の能力は《アンチマジック反魔法》 震力、魔力を用いた攻撃は俺の前に全て平伏する」

「?!」

ステイア・クロイツ・マグナビユートも、【銃の王】である自身も、おそらくナタク・エルステインの《分解震》でさえも、こいつには通用しない……?

そして【刃の王】であるレグナをこいつは一撃で沈めて見せた。

勝てない、とシャルツは思う。

例えベリアルを打ち倒した『四人の王』でも、『大震』を含めた王国の全戦力を引つ張ってきても、この男1人に勝てない。

(最、強……)

しかし同時に疑問が浮かぶ。

なぜこの男はいままで動かなかった……?

単体で王国を凌駕する戦力ゆ持ちながら……

そういえばベリアルも伏魔殿から動かなかった。あの時は当時の『大震』が道を抉じ開け、『四人の王』と『黒鉄の翼』がそこへ乗り込んだ。

(伏魔殿には……何がある……?)

帝国の残骸、死都アグリード、

「マナの穴か?!」

「ほう……、人間にマナの知識があるか」

伏魔殿がそう呼ばれ始めたのはベリアルが現れる以前だ。

それ以前から圧倒的に悪魔の出現率が高かったことからそう呼ばれていた。その理由は大地のマナの量が少ないからだ。

帝国には結界の技術が無かったのではなく、結界を構築出来るほどのマナがなかったのだ。

「魔王なんて呼ばれる連中はマナの中では著しく活動を制限される力を蓄えてようやく『反魔法』を維持したままこっちに出てきたんだが、肝心の獲物がこれじゃ興奮めもいとこだ」

「ならどうして他の魔王は……?」

「俺に比べりゃ力が小さいのと、負担を俺が引き受けてるからだ」

グラナは鎌を振り上げる。

「もういいだろ、殺すぜ」

ざくっ

「あ………？」

「レグナっ………」

千切れた足の代わりにくくりつけた魔封剣を支えにしてレグナは立ち上がった。

「レグナ………だと？」

「オ………」

フラフラとよるめきながら、しかし

「オオオオオツ！！！！」

レグナは吼えた。同時に地面を蹴る。ほぼ片足であるにも関わらずその速度は変わらず弾速を思い描くほどだ。

「………」

グラナは鎌を動かした。不可視の刃はレグナの腕に向かって振るわれる。

しかしそれは弾かれた。

「鎧神………?!」

いつ発動したのか傍目のシャルツにすらわからなかった。

レグナは構え、一閃する。

『刃神』

それはいままでにない異様だった。

(青い、刃神……?!)

いままでではあまりの破壊力に空気が裂けて歪んで見えることはあったが、クツキリとその刃が色を持ったのは【銃の王】として共に戦ってきたシャルツでさえ見たことがなかった。

「……、ちっ」

グラナは片手で振るっていた鎌を両手でしっかりと握り締めた。

『魂を刈る者』

鎌がドス黒い力を纏い、黒と青の刃が激突した。

双方の“力”がぶつかって、砕けた。

「……、そうか 『青の断罪』か」

崩れるレグナにぼつりと呟くと呟くとグラナはそのまま背を向けた。

「何を……？」

「見てわかんねえか？ 帰んだよ」

振り返ったグラナの目にはなぜか涙があった。

ステイアはヴァルクリフに帰還した。

「……、何だ？」

着いた途端に守備隊に取り囲まれて口々にいろいろと説明されたが、混乱しているのか要領を得ずに話の整理に苦労した。なんとなく伝わった事柄を纏めるとどうやら南門が内側から破られたらしい。ナタクの負傷、そして『旅の破壊者』の負傷

ステイアとリースは病室へ急いでいた。

(不味いな…… いまあの二人を失う訳にはいかない)

ほとんど蹴破る同然に病室の扉を開けた。

「っ……！！」

全身に膿の滲む包帯を巻いたナタクと、右足をザックリと切断さ

れたレグナが居た。

その隣に力無く項垂れてレグナの右足の“残り”を抱えるシャルツ。

スティアは咄嗟にリースの目を覆い隠そうとしたが、それよりも先にリースは二人の姿をしっかりと見据えていた。

不意にスティアの横をすり抜けたリースはナタクの手を取った。

「話せる？」

「……可」

ナタクが辛そうに唇を動かす。

「治癒震術の術式を教えて 私が治す！」

力強くリースは言った。そこには微塵の動揺もなかった。

第15話：【First】（後書き）

ヴァルクリフ攻防戦の東門での没シーン

『（怠け者のリトル……か）

いままさに街に踏み込もうとしている魔物の大群を前に、【銃の王】は思う。

『四人の王』 六年前の大戦を終わらせた英雄。彼女にとってその名は重荷でしかなかった。

彼女は血みどろの自分を捨てたかった。

だから彼女は手始めに自分の名前を捨てた。
銃を握ることを止めた。
誰かを守ることを止めた。

代わりに直すことを仕事に選んだ。

『怠け者のリトル』

彼女はそう呼ばれているいまの自分が好きだった』

ほんとはもうちょい続くけど、没になった能力が絡むからカット
します

ここ自分では結構気に入ってるから別の形で書き直したいなあ

第16話：大戦（前書き）

……、あいつは？

B L A D E

なっ……どうして

第6守備隊隊長 ベル・バークラント

後戻りは出来んが
マグナビユート

王国最強の震術師 スティア・クロイツ・

それでレグナと同じ場所に立てるなら

半熟震術師 リース

……で、これからどうするの？
イト・アーケエツジ

【銃の王】 シャルツ・ディバ

あらあらあら お酒は止めたんじゃないの？
の店主 アグリア・オックス

とある酒場

第16話：大戦

…薄く目を開くと白い天井があつた。右足に痺れるような感覚がある。片足と肘を支えにして上体を起こす。
ふと視線を動かすと隣で金髪が揺れている。

「リー……「レグナっ！」」

飛び付かれた。額が喉に当たって声が遮られる。
シャルツが一気に不機嫌な顔つきになり隣のベッドにいるナタクと彼女に付いていたベルが凄い勢いでこちらを振り返る。が視界を金髪とリースの手で（意図的に）覆われているのでその様子はレグナにはわからない。

（僅か一時間足らずで高等震術の1つである治癒震術を……、化け物だな……）

スティアは内心と裏腹に表情を薄い笑みに変えた。

「リース、その辺にしておけ」

ガチの目でシャルツが銃を抜きかけているのを見てスティアがたしなめる。

「はい」

リースが引っ込んでレグナは広がった視界に視線を巡らせる。

「……、あいつは？」

シャルツに向く。

「帰った」

「そう……、なのか？　なんで……」

その問いに答えられる者はスティア達の中にはいない。

「……、互いに話すことが多そうだな　済まないがベルは出てくれ」

「なっ……、どうして」

「命令だ、出ていけ」

スティアが強く言うつとベルは強く唇を噛んだ。が、結局何も言わずに出ていった。

「……さて、何から話そうか」

手近な椅子を引き寄せて腰を下ろす。

「貴様らは誰の襲撃を受けた？」

「ナタクは契約者、らしい　俺は【First】と交戦した」

「契約者にファースト……　遂に動き出したか」

「契約者が生きてるのを、知ってたのか？」

「……、お前は以前『大震は魔王を倒すために動いていない』と私に食ってかかっただろう？ その答えだ、『大震』は“契約者”のほづを追っていた」

「……」

「最低限の戦力としてゼクウとナタクをここに残して、バルナと私でな

あと一步のところまで【Second】から奇襲を受けて逃がして以来捕捉出来ずにいたが……」

「じゃあバルナの姿が見えないのは……」

「その時、死んだ」

ステイアの口調はいつもと変わらない物だった。

だがそれが逆に秘められた重みを伝えてきた。ステイアは自身が考えているほど冷酷な人間に徹しきれないことに気づいていない。

静寂が場を包みかけたが、ステイアがそれを破る。

「今回の契約者の名はシファ・バルバローネ どうやら『本ノ国』の出身の高位震術師らしい」

例の資料室が燃える以前からそこまでは搦んでいる。

「……、今回の？」

リースが首を傾げる。

「ああ」

「ステイア……?!」

「黙れ この際、規律などクソ喰らえだ」

咎めるように言ったレグナに向かって吐き捨てた。

「それにこいつは戦力になる 事情を知らせたほうがいいだろう」

レグナは眉を寄せる。

元々リースを連れてきたのはそんなつもりではなかった。レグナとしては震術師として自衛が出来る程度の力をつけて欲しかっただけだった。シャルツには適当なことを言ったがそもそも時期が来れば最初の結界都市に帰すつもりだったのだ。

「国家機密だ、これを聴けば後戻りは出来んが 構わんか？」

「それでレグナと同じ場所に立てるなら」

間髪入れずにリースは答えた。

「いい覚悟だ」

ステイアはレグナを見た。レグナは渋々と一度だけ頷く。

ステイアが小さく息を吸い込んだ。

「契約者とは、『魔王召喚術』を使った者の呼び名だ」

前回の契約者　つまりベリアルを呼び出したのはクロム・アリ
スエル・フォルド

ステイアの前任の『大震』の長だ。

この世界の大地に流れる力には異界からの侵略を阻む力がある。
だがそれは網目が粗いのだ。

大きな魔力を持つ者を阻むことは出来るが、小さい魔力は通過し
てしまう傾向がある。

だからベリアルが現れる以前から力の小さい悪魔はこちら側に多
数現れていた。

その網目を人間の側から強引に押し広げるのが『魔王召喚術』と
呼ばれる術だ。

『かの魔法を知ることを禁ず』

『かの魔法を学ぶことを禁ず』

『かの魔法を使うことを禁ず』

そう言われる魔法をどこからか知ったクロムは『魔王召喚術』を

使った。その力を使役し王を殺し、王国を乗っ取るうとしたのだ。

だが、そうして呼び出されたベリアルはクロムの力はクロムの想像を遥かに超える物だった。

クロムはベリアルに殺された。

そしてベリアルは伏魔殿に存在した『帝国 アグリード』を滅ぼし、結界を通過出来る程度の下級悪魔を多数召喚し王国に戦争を仕掛けた。

レグナ達が『大戦』と呼ぶのはこのときのことだ。

「ベリアルがクロムを殺したのは契約者だけが呼び出された魔王を“送還”する術を持つからだ。だがなぜか今回の契約者は殺されていない」

「つまりステイアは……」

「ああ、契約者を捕まえて“送還”の術を使わせるつもりだった。何体いるかもわからん今回の魔王を相手にするよりもそちらのほうが手っ取り早いからな」

「……で、これからどうするの？」

シャルツが平坦な声を出す。

「契約者を捕らえるのは不可能だ。と私は思っている」

「?!」

「調査を進めた結果、魔王クラスの悪魔は7体と判明した

『魔王召喚術』は一度使えば“力”が使った者の震力による干渉を阻むようになるから、そいつは一度の術の行使で7体もの魔王を呼び出したことになる

あのクロムでさえベリアル一体だったのだ そいつは尋常ではない力量を持っている」

そしてそいつはおそらく『神術使い』だろう。

「魔王は殺す、契約者も殺す そのため」

愚直で、安易で、だけど選択肢のない答えを
王国最強の震術師は短く言い放った。

「伏魔殿を落とす」

(なぜ民間人のシャルツとかいう女が同席を許可されて守備隊の私が席を外さねばならない……!)

ベル・バークラントは憤っていた。

転がっていた石ころを蹴っ飛ばすとそれがバケツに当たって中か

らペンキが溢れてそれを避けようと飛び退いた男が側の脚立を引つ掻けて上で作業をしていた別の男が脚立と一緒に派手に転んで足を挫いたりしていたのだが、彼女に直ぐ前で行われている『その程度の些事』を気にかけている余裕はないらしい。

「……、酒でも飲もう」

ベルは近場にあつた適当な酒場に入った。既に日が傾きかけているが、本来酒場が開く時間帯にはまだ少し早い。

無視して扉を開くと掛けてあつた鈴がチリンチリンとキレイな音を鳴らす。

「あらあらあら やけ酒は止めたんじゃなかったの？」

やたらと露出度の高い服を来た茶髪で濃い目の化粧の女性は咎めるような視線を柔らかかに込めて微笑む。おそらく30を越えているはず彼女の笑みには不思議な魅力がある。

「別にいいだろ 飲みたくなる日もある……」

ベルは開いてすらない店の椅子に深く腰掛けた。

いつもの、とベルが言うよりも前にアグリア・ラックスは慣れた手付きでカクテルを作り始めていた。

第16話：大戦（後書き）

テストが終わり夏休みに入り小休止を終えようとしたところでゲームにハマり更新が疎かになり……

ちよつとペース落ちると思いますですが許してください いや、まじすんません……；

第17話：宣戦布告（前書き）

いいえ、後悔してるのよ とある酒場の店主 アグリア・オツクス

私が出る、案内しろ 王国最強の震術師 スティア・クロイツ・マグナビュート

僕的にはこーいうやり方はあんまり好きじゃないんだけどなあ……

FIFTH エヴァンス

気をつけて、スティア あいつ……レグナより速いよ 半熟震術師 リース

あのとき、俺は血が沸くのを感じた BLADE

第17話：宣戦布告

ベル・バークラントは酔っ払っていた。誰がなんと言おうと酔っ払っていた。むしろ酔い潰れてテーブルに突っ伏していた。そうでなければ隣から、アグリア・オックスからこんな不穏な会話が聴こえてくるはずがなかった。

「この子？ もう潰れてるわよ、大丈夫 話を進めましょう」

「ええ 報酬は2000万よ、助け出して欲しいのは『カイゼル・グランローグ』と『シーク・ツェイベル』 2人とも【半神】よ」

もう1人の声は低く小さくて酷く聞き取り辛いが、どうやら男性のようだ。横目に覗き見ると黄色の髪と淡い琥珀色のサングラスをしている。耳にはピアスが光っていた。

「気前がいい？、切羽詰まってるの いいえ、後悔してるのよ」

「だってあの子達にも普通の幸せを選ぶ権利ぐらいあるはずでしょ……」

「『ベリアルホープ』なんてモノを、人間兵器なんて産み出してしまったことを、ね」

（ベリアルホープ……？ 人間兵器だと……）

「大丈夫よ あいつにつけた盗聴機によるとプロトタイプももう時

期動くみたい、隙を伺って頂戴」

「あら、そう機嫌悪くしないでよ どうせなら久々にチームでも組んでみたらどうかしら？ ねえ【拳の王】ストライカー」

ドゴオオンッ！！！

町中に轟音が響いた。

「！！！」

『警戒警報LV4 結界の外壁部に魔王級の悪魔の存在を確認、攻撃を受けています 繰り返しします、警戒警報LV4 結界の外壁部に魔王級の悪魔の存在を確認、攻撃を受けています』

「バカな……なぜ連絡より先に警報が鳴る……」

LV1の警報。これは比較的力の大きい悪魔が近くを通過した時に鳴る物で守備隊にだけ伝わる程度の物だ。

LV2の警報。これは悪魔が魔物の軍団を率いて攻めてきた時に鳴る。

LV3の警報。これは複数の悪魔が攻めてきた時に鳴る。

そして、LV4。これは実際に結界が破損する恐れのあるレベルの攻撃を受けた時になる物。

「スティア様っ！」

守備隊の1人がレグナ達の病室に飛び込んでくる。

「何があつた？」

「魔王級の悪魔が「警報は聴いた、なぜ無線を使わない？」

「それが……無線の電波がなぜか『遅れて』て使い物にならないんですっ！」

「ッ……、エヴァンスかつ！」

立ち上がるうとしたレグナを、リースが制した。

「レグナは寝てて、どうせエヴァンスの『遅延』と戦えるのは震術師だけ……足手まといよ」

1つの確信。『火炎の弾丸』、かつてリースがエヴァンスに放つたそれをエヴァンスは咄嗟にはいえかわせなかった。

おそらくエヴァンスの『遅延』は震術には、他人の隷属下にある魔法に対しては無力なのだ。

「行こう、スティア」

「、ああ」

頷くとスティアは守備隊の若い男に視線を向けた。

「私が出る、案内しろ」

「はいっ！」

「僕的にはこーいうやり方はあんまり好きじゃないんだけどなあ…」

「騎士団」と『守備隊』には明確な差がある。

騎士団とは『悪魔を殺す』ために作られた部隊だ。かつての大戦では何人もの上位悪魔を葬った。

『偉大なる剣』グランドセイバーと呼ばれた大戦時の大悪魔と王国第一騎士団長
レイム・リーガル・アーカナイトの一騎討ちは1つの伝説となっている。

だが『守備隊』はそうではない。彼らの目的はあくまで時間稼ぎだ。『大震』という大量破壊兵器を持つ彼らは対象を殺害せずとも生存するだけで勝利することが出来る。

当然、両者のあいだには戦闘能力に大きな隔たりがある。

王国第二騎士団を全滅させたエヴァンスに守備隊の相手など赤子の手を捻るような物だった。

「早く大震かBLADEかどっちか出てこないかなあ……」

エヴァンスは大きく欠伸する。
無数の屍が転がる、その丁度真ん中で……

スティア・クロイツ・マグナビユートは強く奥歯を噛んだ。

地面に転がる人間は明らかに事切れている。戦闘能力こそ『騎士団』や『破壊者』には劣るが彼らは1人1人が並の戦人程度ならば凌駕できる戦力は備えているはずなのだ。

(第8守備隊は……全滅か……)

足元に転がる部隊長のレックス・サークレットが無念そうにスティアに手を伸ばして、死んだ。

「ああ、やっと来ました?」

屍の中心に立つ嘲笑するような薄い笑みの魔王

「あれ そっちの子は見覚えありますね? たしか【刃の王】と一緒に居た……」

「リースよ」

「ってことは【刃の王】も中に? よかったあ、居なかったらどうしようかと思いました」

「気をつけて、スティア あいつ……レグナより速いよ」

「わかった……」

スティアは両手の手のひらを向かい合わせに構え、電力を練る。

「来い……！」

「……、意気込まれても、僕は別に戦争しにきた訳じゃないんですよねえ」

「何？」

「【刃の王】に伝えてください 宣戦布告です」

「早、かったな？」

スティアとリースは無傷で戻ってきた。

しかしその表情は重く、暗い。

「エヴァンスとやらの言葉だけをそのまま伝えてやる」

3日後、Secondの超広域破壊魔術が王国の貿易ルートにある国を全て破壊します

なんでも『神罰』とかいう特殊な術式らしくて、街として原型が残るのは“最強の結界”のあるヴァルクリフぐらいでしょう。術式の規模は完成すればこの星の1/5ぐらい、ってSeccondは言っていましたね たしか

この術式を止める方法は、Seccondを殺すことだけです

Seccondは伏魔殿にある帝国アグリートの地下神殿に居ます
もちろん他の魔王も

どうするかはあなた方に任せますよ

では、あなた方の足掻きに期待しています

「それだけ言うたとささと消えやがった……ふざけたやつだ」

ステイアは苛立ちを隠さなかった。

ステイアはエヴァンスを殺そうとした。逃げられたのだ。どうやったのかはわからないがエヴァンスは文字通り消えた。

「……時間がない直ぐに伏魔殿に攻め入る 王国には私が通「無理だよ……」」

張り付けたような無表情のシャルツが言う。

「少なくともいまのままじゃ僕達はいいつには勝てない 乗り込んでも無駄死にだよ……」

【First】 グラナの能力は《反魔法》

元より『震術』に頼りきった人間の勝てる相手ではないのだ。
そもそも悪魔とまともに肉弾戦を出来る人間などレグナ“しか”
存在しない。

根本的な身体能力が違い過ぎるのだ。

「勝てない、ではなく勝たねばならない」

スティアが断定的に言い放つ。

それは普段合理的で論理的なスティアらしかぬ言葉だ。とシャル
ツは思う。

「これ以上後手に回るわけにはいかん、少なくとも敵の一人は結界
の破壊が可能なことが割れている

神罰術式の使い手もこいつだ、最低でもこいつだけは消さねばなる
まい」

罪無き民を守るために

それがスティアが焦る、そして多くの騎士団や守備隊の面々が戦
う理由。

かつてはシャルツもそうだった。

「僕は……賭けられないよ 出来るなら【銃の王】^{フレイバー}なんて辞めたい
んだ」

シャルツの出身は『帝国』だ。圧倒的な悪魔の力で滅びる帝国からたった1人逃げ延びた。

屍の群れ、瓦礫の山、血まみれで笑みを浮かべる悪魔　虐殺。
地獄のような光景にシャルツは慟哭するだけだった。

そして大戦、6年前まだ少女だったシャルツの耳には彼らの、彼女らの悲鳴が克明に刻み込まれている。

その記憶が彼女に叫ぶ。

戦うのは、嫌だ……

「流されるままに戦ってきたけど、勝ち目のない戦いなんて僕はしたくない……」

「勝算は、あるだろ」

レグナが右足を地面に突いた。

治りきっていない傷口が悲鳴を挙げるがレグナはそれを無視する。

「《反魔法》では『刃神』は止められない……そうだろ？」

「たしかにそうだろうけど……」

「あるとき　、俺は血が沸くのを感じた」

それは確信だった。

「俺はまだ強くなれる　必ずあいつを超えてみせる　だからお前の力を貸してくれ……、リトル」

「……ズルいよ」

リトル　そう呼ばれたシャルツがいまにも泣き出しそうな顔になる。

「恐いんだよ　誰かを失うのが……　それでも何も感じなくなっていくのが……　自分が人間じゃなくなっていくみたいで　だって僕……　ゼクウが死んだときだって涙も流れなかった……」

レグナはシャルツの肩に手を回し、そっと彼女を抱き寄せる。

「……」

そうして耳元で何かを囁いた。

「え……?」

シャルツを放して、レグナが笑む。

「大丈夫、お前が居れば俺は死なないさ」

「え、それって、あの……えと……」

ほんっ、とシャルツが湯だったように頬を赤く染め上げた。

(何?!　レグナは何を言ったの?!?!?)

リースとナタクが内心で叫んだ。

第17話：宣戦布告（後書き）

キャラやら武器の名前の由来

・ウルスラグナ

どっかの神話の戦いの神かなんか “勝利” の武器だった名残

・カイン&アベル

まんま旧約聖書のカインとアベル

けどデヒルメイクライの『エボリー&アイボリー』って名前に惚れて & で違和感のないやつで考えたから厳密にはこれかな？

・レグナ

ドラッグオンドラグーンの青い龍、この名前かっけえと思った
そのうちアンヘルも出てくるかも、あれ？ アンヘルであってたっけ？

・リース

なんかあった気がするけど忘れた

・シャルツ

TODのシャルティエ、リオンがシャルって呼んでたのから“ツ”
つけたらなんとなく貴族っぽい名前になるなあと

・アグリア

FFTのあの人ってたしかアグリアス・オークスだったっけ？ ま
んまだねえ……

・ステイア

特に由来なしかな？

そのうちガフガリオンとかアルガスも出てくるかねえ
ええ、タクティクス大好きですww

第18話・出撃（前書き）

はたしてどちらが貴様の言う《許されざる者》なんだろうな
王国最強の震術師 スティア・クロイツ・マグナビユート

もう少しだけ……さよなら 『リトル』 【銃の王】 シャルツ・
デイバイト・アークエツジ

イカれてたのよ…… 『BH計画』 なんて…… とある酒場の店
主 アグリア・オックス

……なにごと？ 【裁断者】 ナタク・エルステイン

第18話：出撃

シャルツ・デイバイト・アークエツジは帝国の貴族の生まれだ。王国にはほとんど浸透していない『銃』の技術を持っていることもそういう理由がある。

（カイン&アベルは僕以外の誰にも扱えない……）

それにシャルツは本来『大震』クラスの雷撃系震術師だ。詠唱を放棄して魔王クラスの魔力を突き破ることの出来る威力の雷撃を使えるのは、“王国最強”であるスティアとシャルツぐらいだろう。

「……………」

「やはりまだ迷っているのか、シャルツ・デイバイト・アークエツジ」

「【星の隷属者^{アストラル}】……………」

「『カイン&アベル』 聖書に登場する“最初の人”であり、カインは弟であるアベルを些細な嫉妬から殺した
アベルは地獄で未来永劫その恨みを叫び続けている……………」

殺人という罪を犯したカインと、その恨みを引きずり続けるアベルはたしてどちらが貴様の言う『許されざる者』なんだろうな」

「……………」

「貴様はどうだ？ 殺すことを罪と知りつつも戦うか？、それとも地獄で恨みを叫ぶか？」

「僕は……………」

決まってる。

再びカイン&アベルを手にとった時から選択肢はそれしかなかったのだ。

「もう少しだけ……………さよなら 『リトル』」

戦うのは嫌いだ。服が汚れるし痛いし汗をかくし血はべとべとするし……………、誰かが死ぬ。

だけど、

これ以上、誰も死なないために。
これで、最後の死にするために。

【銃の王】は再び武器を手にする。

(シャルツはこれで大丈夫か)

否、彼女はきつと自分の知る誰かが死ぬような事態になれば打算もメリットも何もなくとも動き出すだろう。

シャルツ・デイバイト・アークエツジは、そういう女だと、王国最強の震術師は記憶している。

「さて、残るは……」

シャルツと別れたスティアは一人である酒場を尋ねた。ガラガラの店内に酔い潰れた女が1人、カウンターに突っ伏している。……どこかで見た覚えがある気がしたが寝ているようなのでとりあえずは放置する。

スティアは自嘲に似た表情を浮かべた。それが自分に最も相応しい物だと、彼は思う。

「久しぶりだな……共犯者」

「あらあら 今日懐かしい顔がたくさん見れる日ね」

しゃがみこんでいたアグリア・オックスはカウンターの下から顔を上げた。

同時に手首だけで何かを放り投げた。

(何かの術具、いや……)

直後にアグリアの手からスティアに向けて炎属性の震術が放たれる。

が、炎が『折れ』た。スティアの“屈折”だ。

炎は壁に命中し黒い炭化の跡を残す。

びちゃっ

「?!」

1 テンポ遅れて投げられた何かの中身から琥珀色の液体がステイアに頭から振りかけかった。

(この匂い、酒か……!)

一瞬の隙をついてアグリアは静かにライターを突き付ける。

「失せて 私はもう軍で仕事をする気はないわ」

「……」

「アルコール度数、相当高いわよ そのお酒」

「……、阿呆め」

ステイアが囁くように唇を動かした瞬間、アグリアはライターを放った。

どすんっ

「なっ……」

アグリア・オックスは、突然その場に漬れた。真上から超重量がのし掛かるような感覚がある。同様の威力を受けたらしく放ったライターもカウンターに叩きつけられる。

「っ……何かの『レガリア王の証』ねっ……」

「勘違いするな 別にいまさら貴様を働かせようというわけではない
ただ私の質問に答える」

スティアは横で酔い潰れている女を一瞥した。

（聴こえていたとしても魔術語を織り混ぜれば一般人にはわからん
か……）

スティアはアグリアに向き直る。

「貴様は25年前のテストメント、いやレガリアの制作に関
与していたな？」

「……知らないわ」

「惚けるな 『ベリアルホープ・プロジェクトBH計画』のリーダーだったお前が、何も知らんは
ずがあるまい？」

アグリアは唇を噛む。

「貴方が殺して私が解体、イカれてたのよ……『BH計画』なんて
……」

「……答える、元大震、『灰神』のアグリア・オックス 貴様
らは25年前にあれをどこから調達した？」

「スティア様っ！ ナタク様あ！」

白衣の女がレグナ達の病室に飛び込んできた。

……そこにはレグナの右足にじっと額を押し付けて（治癒震術を使っている）ナタク・エルステインと、それをサポートするために太股に両手をつけているリース。

白衣の女は頬を真っ赤に染めて、

「しっ、失礼しましたあっ！」

なんか叫んでドアを閉めた。

「待て待て待てっ！ 凄まじく勘違いしてるだろあんたっ！」

ただでさえシャルツに何を言ったか、2人に無言の圧力をかけられ傷口をなぶられ続けていたレグナは半ば泣きそうな声を出した。おそろおそろ、といった感じで白衣の女がもう一度扉を開く。

右足に巻かれた包帯の鈍い発光を認めて彼女はようやく治癒震術を施しているのだと気づく。

「えっあっ……ナタク様いらっしやっただんですね？！」

「……なにごと？」

「王都でクーデターが起こったんです！ あちこちぐちゃぐちゃに

なっちゃってもう機能がほとんど麻痺してます」

「……………!!」

「【裁断者】 入るぞ！」

言うが速いか開けるが速いか、スティアが病室に飛び込んできた。

「クーデターだ 王都に戻れ！ 時間がない、最低あと1人は王都に戦力がある 伏魔殿は残りで行くぞ」

「「いや どうからどー考えてもお前が王都に行くべきだろ」」

レグナとリースの声が、ハモった。

「貴様ら二度も私を置いて伏魔殿を渡るなどと、「あーはいはい」

ゴッ

「貴……………様……………?!」

レグナがウルスラグナの鞘でスティアの鳩尾を突いた。
腹を抑えてその場に踞る。

「ナタク、折りを見て治してやってくれ リース、行くぞ」

「うん」

1人あわあわする白衣の女を置いてリースは立ち上がる。

「待……て」

「しつこいぞ？ スティア」

「テストメントの、話だ……！ 耳を貸せ」

「……、」

レグナは屈み込んだ。

スティアが小声で何かを語る。

「……そうか」

立ち上がったレグナの表情が余りにも冷たくてリースは思わず息を飲んだ。

「行くぞ シャルツを探そう」

「必要ないよ」

シャルツの、だが明らかに普段と違う低い声が入り口から聴こえた。

「覚悟は出来たから」

懐ではなく大腿部のホルスターに2本の銃を差し戦闘衣に身を包んだ【銃の王】が曖昧に微笑んだ。

第18話：出撃（後書き）

ただいま更新ペースを取り戻そうと尽力中

ある程度話は出来てるんだけどまだ思い付きをメモした感じで細部の直しに手間取っておりますm(_____)m

第19話：懷疑（前書き）

なにあれ おつきな鳥……？ 半熟震術師 リース

慟哭する者 【銃の王】 シャルツ・ディバイト・アークエッジ

さすれば契約の呪に従いうぬらを伏魔殿まで送り届けようぞ

【行き渡る者】の異名を持つ神獣 セラフイム

だいたいダメガネとはなんですか？！ 『大震』の下部組織、

『雷の槌』の構成員

じゃあ略さずに言ってるよ ダメメガネ 『大震』の下部組

織、『炎の森』のリーダー カイル・オックス

……疑え 王国騎士団長 レイム・リーガル・アーカナイト

第19話：懷疑

「ねえ、どうやって海を渡るの？」

リースは目の前に広がる大海を前に首を傾げた。

ちなみにここまで来るのには軍馬を使って睡眠時間を含め1日ほどかかった。

「このへんにアイツがいるはずなんだが……」

「あ、あれじゃない？」

シャルツが遠くの点にしか見えないを物を指差す。

「……、なにあれ……？ おっきな鳥……？」

こちらに近づいてくるにつれ徐々に鮮明になるそれは、明らかに羽根があるのだが……

「人間……？」

「何してるリース、構えろ」

「え？、え？」

「来るよっ！」

シャルツが銃を構えたのと同時に、亜音速の翼がレグナ達の真上を飛び、衝撃波を投げつけた。

それはレグナ達を避ける形で、地面に突き刺さった。

「慟哭する者」

引き金を引いたシャルツが呟く。

レグナが翼の主を捕捉して動き出す。

「ちよ、なにっ?!」

「神獣セラフイム やつたらプライド高いけど自分を倒した者にだけは従う種族で、ここに縛られてる大陸の橋渡し役だよ」

通り過ぎたそいつが停止し反転しようとした瞬間にレグナは跳躍しそれに斬りかかる。

「ふむっ……」

あちこちが破れた青い服をきた、金髪碧眼の人間の女に翼を生やしたような見た目のそいつは、愉しげに口端を吊り上げた。

「たかだか剣（剣）でわらわに立ち向かおうとする輩は久しいな」

「っ　　！」

片手をレグナに向けた突きだす。

それだけで突風が発生し、レグナを遙か後方に吹き飛ばす。

「ザッ、と地面が削れた音がして空中で体勢を立て直したレグナが着地する。」

リースはなんだかよくわからないがとりあえず短剣をいくつつかひつつかみレグナに駆け寄り寄ろうとするが、シャルツに腕を掴まれ遮られた。

「ダメだよ、僕らにあいつの速度は掴めない 邪魔になるだけだ」

「っ……でも」

「レグナを信じよう?」

リースは俯いた、が顔を上げると戸惑いながらも頷いた。

「おや? うぬらはいつかの……、あの時の術師はいまは居ぬのか?」

「あいつは死んだってよ」

「そうか あれほどの人間にはやはり2度と会えぬか」

自ら風を生み出し揚力を得て浮かび上がるセラフィムは、空中に魔方阵を展開する。

「ちいつ……多いな」

レグナは苦い笑みを浮かべる。

増殖を繰り返し教会のステンドグラスのような模様を描く。それに内蔵された魔方陣の数は、108

「あちらの女子2人を範囲の巻き添えにするのは酷かな？ うぬら1人これに耐えきれば勝ちでしょうか さすれば契約の呪に従い伏魔殿まで送り届けようぞ」

「ありがたいこつて」

「ゆくぞ」

《神の息吹》ゴッドブレス

魔方陣1つ1つから打ち出されたのは、風の矢だ。その一本一本に秘められた魔力がその魔法が神話級の化け物の扱う存在だとレグナに伝えてくる。

セラフィムという存在は神から『ありとあらゆる風』を吹かせることを許されていると言われる。

人間に発見されたのは僅か2頭。そのうちの1人が、『ヴァインユヌ行き渡る者』と呼ばれる彼女だ。

ベリアルが現れる遙か前、『帝国』と『王国』の冷戦の時代

王国側には1人の強大な震術師がいた。

彼はいつ暴発するかわからない戦争を止めるためにセラフィムと契約を交わした。帝国の存在する大陸であるパンデモニウムと王国の存在する大陸であるヴァルハラを渡る者を選別せよ、と。

それ以来2つの大陸はセラフィムの力によって人の行き来はほとんど途絶えさせられた。

王国に攻め入ろうとした幾多の帝国の船はすべて彼女によって沈められた。それほどまでに圧倒的な力を誇る神獣。

「たしかに、こりゃ化け物だわ」

だが、セラフィムは震術師との契約をはね除けずに従っている。何故か、別に神獣という存在は人間に友好的な訳ではないのに

それはセラフィムが『人間に破れた』からに他ならない

「^{リンク}接続」

ウルスラグナの片方を投げ出し風の魔封剣を抜く。

「そんな物ではわらわの風は止まらぬぞ」

(んなことわかってるっての……!!)

【風障 鎧神!!!】

「ほう……、たしかあの男もそんな術を使ってきおつたな」

土煙に覆われ見え隠れする抉れた地面の傷跡が、剣士の直前で止まっているのを認めた。

「よかろう わらわの負けだ」

剣士とセラフィムは笑みをかわす。

かつて1人の震術師が神獣セラフィムを破り契約を交わした。男はその名をエクセリオンと名乗った。

「先に行くぞ 【裁断者】」

ナタク・エルステインは馬上でそれを聴いていた。

発したのは徒歩でトホトボと歩いているスティア・クロイツ・マ
グナビュートだ。

首を傾げるナタクの隣で、ジジっ…… と、雷が弾ける音がした。

途端に、スティアが急加速した。ルシフの時に見せた磁力による
反発加速術式だ。

「……盗作？」

遙か遠くで点となったスティアの背中を見てナタクは呟く。

「スティアはまだかよ？」

カイル・オックスはつまらなさそうにたったいまぶっ倒した何人かの人間の中心に立っていた。

彼は【大震】の下部組織、かつてゼクウ・ファイアレスの所属していた【炎の森】のリーダーであり、クーデターに対する抵抗勢力の中心だった。

赤髪の凶悪そうな目付きをしてピアスのついた口に煙草をくわえた、見るからにヤンキーフェイスなカイルは手のひらに炎を作り出して前方に軽く放った。

「や……やめ……」

「ちっ、雑魚じゃ食い足りねえ」

カイルが背を向けて歩き出して約3秒、炎が爆発的に膨張した。

「レイムはどうした、騎士団どもオっ　クーデターなんざ起こすなら出し惜しみなんかしてんじゃねーよ！」

「何を言っている……?」

「ああ？」

「クーデターを起こしたのはお前らだろう 術派め」

騎士の一人の放った言葉が彼の耳に届いた、瞬間に

「何……？」

雷撃の槍が彼の背を貫いた。

「テ……メエ……?!」

「おや 一撃では倒れませんか 流石は“炎の森”の長」

「何、しゃがる ダメガネ」

「ダッ、ダメガネとはなんですか?! だいたいあなたは」

「じゃあ略さずに言ってるよ、ダメ、メガネ」

「っ……、あなたと言う人はこれだから 我々の崇高なる目的も理解しようと思わずに同士をどったばったと倒しまくって「待て いま同志って言ったな？」

「言いましたが、何か？」

「俺が刈ってたのは騎士団だけ、つまりは【雷の槌】もこいつらの同志でクーデターに一枚噛んでんのか？」

「……!!」

「……やっぱダメガネだわお前」

「ふざけなさいここであなたを倒せばそれで済むことっ!」

「墜ちろ」

《地に墜ちた焰（プロメテウスの焰）》

「……ハれっ？」

天空から垂直に落下した火柱がダメガネに直撃した。

「会話に詠唱を交えるなんざ常套手段だろ、バーカ」

言い終える直前にどこかの空で轟音が起こり雷と炎が交差した。

「ったく、どいつが敵でどいつが味方だぁ……？」

面倒だから騎士団以外にも雷撃系や無属系の術者に会ったら問答無用で叩きのめしてやるうとカイルは思う。

第一騎士団隊舎の一室。

“ 疑え ”

レイム・リーガル・アーカナイトは考える。

本当にクーデターの首謀者はスティア・クロイツ・マグナビュートか？ ならばその目的はなんだ？ あいつが“隷属者”などと異名を取り、その不名誉な名を容認するあいつがクーデターを起こすメリットはなんだ？ 俺が闘うべきはなんだ？ あいつがザックフオードのために戦うのはザックフオードがこの国で最も有能な執政者だからだ。ザックフオードが有能である限りあいつにそれを倒そう働きかける意味はない。いや それすらも疑惑の対象とすべきか？ 何か別の要因が、いや 違う。俺がやつを疑うのは半ば嫉妬に近い感情に過ぎない。首謀者として処断するにはまだ早急。別の可能性を疑え。

単純に政権を狙うやからはどうだ？ クロストウェイ、リンドブルム、アガーテ、ダークライ。違う……、やつらに軍を纏め上げる技量はない。騎士団、可能性は捨てる訳にはいかないが低いだろう。大規模な動きがあれば俺が助づけるはず。関与があったとしてもおそらくは個人レベル。『大震』はどうだ、スティアでなくとも【裁断者】や【白声】は？ いや、クロストウェイ同様、『大震』の本隊は軍としてよりもむしろスティアという一人の長が存在するだけの傭兵団に近い。その戦力にカリスマ性はあれど一団の指揮という能力においては低いだろう。これもノーだ。

となると残る可能性は

「近衛兵長 レイ・バークラント……」

やつならば、王の側近である近衛兵長に選ばれるはずの人材、当然一団を纏め上げる指揮能力もある。スティアや俺と同様“ザックフオードの秘密”を知る機会もあったのではないか？ そして俺

達と異なり、

レイムは思考を止めた。そして頭の中で自身の信念をもう一度唱える

“疑え”、と

(確信するな、心に止める 何もかもあくまで推論に過ぎん、自分の思考すらも疑う対象の1つ レイ・バークラント、ステイア・クロイツ・マグナビユート、アーエイツ・フォン・クロストウェイ、シルバリオ・ガーゼス 可能性がある限りは、全てを疑え……！)

レイムは剣を取った。抜き、刀身を確認する。長年愛用する自身の武器すらレイムの疑う物の1つ。

「レイム様！」

レイムは即座に騎士の男に抜き身の剣を向けた。

「お前は誰だ？」

「イツクス・レディ」第2騎士団所属 イツクス・レディオートには妙な癖があるのだよ ノックの代わりに床を二度と蹴るのだ、必ずな」

「……っ」

「貴様の剣も、鎧も、エスカッションも、たしかにイツクスの物だが……」

もう一度訊こう、貴様は誰だ？」

騎士の格好をした男は剣を抜こうとした。刹那、彼は仰向けに倒れた。

「近衛兵団 フレム・レムオル、か」

騎士は左胸に圧力を感じた。鎧が踏み砕かれている。彼をほぼ垂直に見下す形でレイムの顔がある。

(蹴り…倒されたのか……？ 動きがまるで見えなかった……)

「“それ”はどこで手に入れた？」

「イツクス・レディオートを殺して」

「違うな 血痕がない、震術にしても対象の対術鎧の中身だけを壊せる術など存在しない」

イツクス・レディオートもクーデターに参加した一員か？ 大方俺を欺く自信がないから代わりに貴様を行かせた といったところか？ 阿呆が」

フレムは嫌な汗が止まらない。

全て、レイムの言う通りだった。イツクス・レディオートはレイムを欺く自信がない、と言った。

元々イクスは伝令役ではある。が、第二騎士団と第一騎士団は情報のやり取りを余り必要としない。

そのためレイムとイクスにはほとんど面識がない。過去にたった数度の擦れ違ったことがある程度だ。

だが、これだ。

「俺とスティア・クロイツ・マグナビユートの、『騎士団』と『大震』の同士討ちが狙い　となると首謀者はやはりレイ・バークラントか」

「さあな」

フレムの精一杯の虚勢だった。

見透かしたようにレイムは薄い笑みを作る。

「心拍数が変わったぞ？」

第19話：懷疑（後書き）

・名前の由来その2

グレイプニル

作中でも出てるように戦いの神様がフェンリルを縛るときに用いた切れない紐の名前

むしろ“圧力 身動きを取れなくする グレイプニル” まで決めて『 のテストメント』って方を決めるのに手間取った

欲望に決めたのは“過ぎた欲望は身動きを取れなくする”みたいななのとフェンリルがなんとなくそれっぽいイメージがあったから

セラフイム

熾天使、天使階級の最上位

ケルビム、ヴァーチャーなんかは響きがそれっぽくないなあ……、と

レイム

サモンナイトの吟遊詩人……かなあ？

魔王の大半は感覚でつけました
まともに考えたのはエメトぐらい

第20話：風（前書き）

神獣ってやつのはとんでもないな

B L A D E

なんでこの揺れと上下動で二人共平気なの……？

半熟震術師

リース

あアら ケダモノでもやれば出来るじゃないのオ？

“ 契約者

” シファ・バルバローネ

吐いた唾は飲めぬぞ、人間っ！

【行き渡る者】セラフィム

流星は賢君 駆け引きのしがいがありませんねえ

近衛兵長

レイ・バークラント

俺様の正体…… か

ザックフォード・WS・エクセリオン

第20話：風

「用意はいいか？ 飛ばすぞ」

「ああ」

「うん」

「ちよつと恐いかも……」

ありとあらゆる風を吹かせるセラフィムの魔術は攻撃のためとは限らない。

レグナ達を包み込むように複雑にベクトルを絡み合わせた球体型の風の流れ。そして、元々大陸間を吹いていた貿易風。

「ゆけつ……！」

“風の船”に守られながらレグナ達は大陸間を吹き飛んだ。

「前の時も思ったが、神獣ってやつのはとんでもないな……」

「前は“あいつ”が《神の息吹き》を正面からねじ伏せたんだよね……、たしか」

寂々と会話を交わす二人の隣で、

「なんでこの揺れと上下動で二人共平気なの……？」

リースが全力でぐったりしていた……

「大丈夫？」

「むしろそつちがなんで大丈夫なの……？ それとあいつって誰？」

「……《本の王》だよ」

「スティアより強い震術師ってあのとき初めて見たよね」

「……？」

「後に【四人の王】なんて呼ばれるベリアルルの討伐チームを組むときにね、僕と《拳の王》はあっさり決まったんだけどレグナと《本の王》の位置はかなり揉めたんだよ」

「俺と揉めたのは王国騎士団長レイム・リーガル 結局シャルツとの連携が取れることが決め手になって俺に決まったんだが、スティアの方は直接戦って決めたんだ」

「負け…… たんだ、あのスティアが……」

二人が頷く。

「んーでバルナ・ブラックレイ、アグリア・オックス、ナタク・エルステイン、スティア・クロイツの四人が大規模な破壊震術を用いて悪魔の主力を叩いて【黒鉄の翼】、【掃除屋】なんかの破壊者が残りを各個撃破

隙を衝いて俺達がベリアルルを強襲した

奇襲に近い動きに出る以上大人数での行動は危険だったんだ」

「ん……スティア・クロイツ？」

「“マグナビユート”、つてのはその時の活躍を評されて与えられた名前なんだよ」

「へエ……」

「さて、無駄話は終わりだ もう着くぞ」

陸地を目前にして、

突然風が止んだ。

「「「！！？」」」

球形の風も消えてレグナ達は落下を始める。水面までは30m強。例え下が水だろうが即死をまのがれない距離だ。

「っ……、なにこれ?!」

「前ももっとゆっくり落ちた……よなあ？」

「つてかこの高さ……死ぬよ!」

「二人共掴まって!」

「どっつする気だ？」

「いーから早く！」

《地獄の熱風》

(熱による気流制御術式……?! でも……)

いまの僕らには高温の熱風を回避する術がない……!

……、れ？

上昇気流が落下の速度を落とす。気流を残して“熱”だけが逸れた。

(光属性の屈折術式、スティアの術式複数同時制御……この子……?!)

ドポンっ

「ぶはっ」

着水した3人はほぼ同時に水面から顔を上げた。

「けほっ…生きてる？」

「ああ 助かった」

「でもどうしたんだろ 前はもつとちゃんと着地したのに……」

対岸

「なアんだ “ありとあらゆる風”なんて言っても所詮はこんなもんなのねエ」

《神へ還す火》

「人間が“神”の冠詞を持つ術を使うか……！」

ヴィシユヌがレグナ達への風を解いた理由は至極単純な物だった。それどころでは無くなったのだ。

「……やむを得ぬか」

『ありとあらゆる風』を持ってヴィシユヌは酸素を断絶した。青い炎がヴィシユヌの目前で断たれる。

「あアら ケダモノでもやれば出来るじゃないのオ？」

「覚悟せよ」

108の魔方陣が超高速で展開される。

「吐いた唾は飲めぬぞ、人間っ！」

《神の息吹き》

レグナに放った物とは明らかに違う、ありとあらゆる風を最大限に発動した全力の魔術。

魔方陣の周囲の空気が極度に圧縮され濃度差が生じて歪む。

「…………脆弱ねエ」

《万色を排除する閃光》

「っ…………、白色炎じゃと!!!??」

「やっぱり神獣クラスを消し飛ばすにはこの身体でもちよっと足りないわねエ」

焼け残ったヴィシユヌに背を向けてシファ・バルバローネは海を切り裂いて歩き出す。

「クーデターか…………」

ザックフォード・WS・エクセリオンはいつもと変わらず玉座に

居た。

「大震側か騎士団側か…… クーデターを起こしたのはどちらなんでしょうね」

傍らには近衛兵長レイ・バークラント。

「だな……ところでよ オ レイ
俺様この前、ちつとおかしな話を小耳に挟んだんだよ」

「？ なんですか」

「騎士団側には大震がクーデターを画策してる、大震側には騎士団がクーデターを画策してる って情報が飛んでる」

「！ それは……どちらかが真実でどちらかが相手の攪乱を狙って、
でしょうか」

「……んでよ たしか仲の悪い両者の情報の伝達役つてのは、『近衛兵団』が請け負ってたよなあ？」

横目に見たザックフォードの視線はすくむほどに鋭かった。レイは大きく嘆息する。

「流石は賢君 駆け引きのしがいがありませんねえ」

「やっば、首謀者はお前か 近衛兵長レイ・バークラント」

「……ええ」

「にしても、どうやって反乱分子なんか捜しだした？ 言っちゃなんだが俺様の現政権でクーデターなんざあり得ねえと思ってたんだが」

「たしかに、レイムさんはあなたが“ミスをした”限りはあなたの側にいるでしょうし、【星の隷属者】もあなた以上の執政者が現れない限りはあなたを守るでしょうね

あの二人はあなたが優秀で民のためにありさえあれば『何者でも構わない』と思っっているようですので」

「、」

「騎士と大震の下部組織、その両方を取り込める情報 あなたならもうわかりますよね？」

ザックフォードは苦い顔で舌打ちする。

「俺様の正体 か どうしてわかった？」

「わかりますよ だって、俺も“特別”ですから」

「！」

ガゴオンっ

物理的な施錠に加えて術的にも閉ざされていた扉が大剣による一撃で砕け散った。

「レイ・バークラント……！」

「まったく、嫌な方々だ　うんざりしますよ……レイム・リーガル・アーカナイト」

第20話：風（後書き）

最近、暇だからアニメ見てる

ちゃんと通してアニメ見るのって実は初めてだったりする

とりあえず蟲師おもしろい

エヴァンゲリオンの最終回で残念な気分になった

更新停滞の理由はそんなくらい（蹴

第21話：疾走（前書き）

走れっ！！！！

B L A D E

行つて

【銃の王】シャルツ・デイバイト・アークエッジ

休ませてはくれない訳ね

半熟震術師 リース

おや お前はバルバローネがやけに執心していた……そうか、私の相手はお前か

【EMETHの魔術師】エメト

こいつは俺っちに任せるサ

“半神” シーク・ツエイベル

第21話：疾走

砂浜に上がった3人はざつと服を乾かして歩き出す。
浜を抜けるとそこは草原だった。

伏魔殿、名前から連想されるイメージとは違って人の手の入っていない自然な美しさがあるとリースは思う。

どこまでも続くような広い草原でレグナとシャルツはおもむろに周囲を見渡した。

「さて、やるか シャルツ」

「うん」

そして2人は同時にリースの手を引っ付かんだ。

「……、何？」

「そうだな……とりあえずは……」

「走れっ！！！」

レグナ達が駆け出し一瞬遅れて無数の魔術が大地に突き刺さる。

「え……ええっ?!」

「ざつと100体ぐらいか まともに相手をしてたら陽が暮れる」

「あのとときと同じだよ 退魔術式の働いてる城内まで駆け込めばこのレベルのやつらは撒ける…… 一先ず全力で逃げるよ！」

回避されたことを認識した不可視の悪魔の群れが2撃目を放つ。

「……、行けっ」

レグナが立ち止まり、振り返る。立ち止まるうとしたリースをシヤルツが引き摺るように強く手を引いた。

「……っ」

「レグナは大丈夫、直ぐに追いつくよ」

回避不可能な数の全方位からの魔術に対しレグナは魔封剣と鞘をベルトから外し、納めたままのウルスラグナを構える。

「ハアツ!!!」

空中の魔封剣を弾き魔術にぶつける。

弾く。弾く。弾く。

「……どうした もう終わりか？」

ぶちっ

誰かが自分の唇を噛み切った。

《海底の轟霸王》
リウアイアサン

「よしっ……！」

水属性の極大魔術、津波のような水壁が他の魔術を呑み込んで押し寄せる。

ダンッ！ とレグナは強く地を蹴った。

直前までレグナが居たくつきりと残る軌跡を魔術が呑み込んだ。

「見えた……！」

シャルツ・ディバイト・アークエッジは見覚えのある城と、その手前に存在する1人の背の低い悪魔を認めた。

「ラーシャルは退屈なの 誰かに遊んで欲しいの」

「魔王クラスかつ……！」

「どっつする気?!」

「そうだね……飛び越そうか」

シャルツはラーシャルに向けて跳躍した。

言葉と裏腹にほぼラーシャルの真上に落下する。

カイン&アベルの発砲音が空気を破裂させた。
ラーシャルの長い刀から超速の一閃が走る。

ズバァンっ！！！！

居合いによる一閃は震力の弾丸を消し飛ばしシャルツ自身に向かった。

ガキィッ

「！！」

それをシャルツはカイン&アベルの銃口そのもので受け止める。

「行って」

たんっ と軽い音がして刀にかかる負荷が増した。曲芸のように刀の上で逆立ちに近い形を取るシャルツが上空に跳ねあげられるまでの一瞬にリースがその上に飛び乗ったのだ。

刀の圧力により2人分の体重が浮き上がり、リースはそこから更に跳躍。シャルツはその足場となるようにリースを蹴り飛ばした。

(1匹、逃がしたの……！！)

即座に刀を納め半歩下がり再び居合いの構えを作り落下するシャルツを狙う。

シャルツも空中でカイン&アベルを構える。

引き金を引いた。
抜き手を加速させた。

パンツッ！！！！

「なっ………?!」

ラーシャルの身体が刀ごと、震力弾に弾かれた。
着地したシャルツがラーシャルを無視して視認出来る距離にある
城に向かって走る。

(1 撃目は本気じゃなかったの……あれは仲間を先に行かせるため
にわざと弱く撃つたの……)

その背中に向けて抜き身の刀を放り投げた。
それはシャルツより手前の地面に突き刺さる。

「……やられたの」

「いいのか？ 武器を手放して」

ラーシャルの首筋を目掛けてウルスラグナが飛んだ。

「はあ……はあ……」

リースは転がるようにして城に飛び込んだ。白を基調とした整った造りをした、帝国アグリードの残骸。

「おや お前はバルバローネがやけに執心していた……そうか、私の相手はお前か」

石材で出来た杖を持つ血濡れの服を着た、“銀の髪を持つ若い男”

Fourth エメト

「っ……休ませてはくれない訳ね」

「我ではなく後ろの【銃の王】にでも頼めばどうだ？」

「……バレてるか」

リースの背後から弾丸が飛んだ。

エメトはそれを真横に鋭く動いて回避する。

標的の位置を修正し次弾を放、シャルツは吹き飛んだ。

(っ……、風の魔術か！)

「こいつは俺っちに任せるサ」

「シーク?!」

「……さっさと行くサ」

「そうするとしよう」

『空間操作』

「シャルツ、その人を殺さな」

突如現れた奇怪な“箱”に吞まれてエメトとリースの姿がこの場から書き消えた。

「?! どこへ」そんなこと気にしてる余裕は」

システム、オールグリーン
トランス グレートソード

エネルギー充電率120%、最大出力 《偉大なる剣》発動

「あんたにはないサっ!!!」

翡翠の刃が真一文字に空間を薙ぎ払う。

第21話・疾走（後書き）

ネタバレ

第22話：One Moment Flare（前書き）

わからぬか？ 我の能力は“操作”オペレート
そしてその対象は生物以外 【EMETHの魔術師】

“一緒”にしないでくれるウ？ “契約者”シファ・バルバロ
ーネ

焰の王は高らかに歌う その軀を、その魂を、その骸でさえも滅ぼすために 半熟震術師？ リース

第22話：One Moment Flare

「子供、と侮ってはいかんだろう 我の力を最大限に扱える場所に
移させて貰った」

リースが薄暗い周囲を見渡すと地面から生えた無数の十字架の群
れがあった。

(墓地 ？)

誰の、
何のための、

最も大きな十字架に視線を向けてリースはそれを理解した。

『“暴君”ベリアル ここに眠る』

「!?!」

「おそらくは悪魔の墓だろう 事情を知る人間によって立てられた
のだろうな」

「ここが、あなたの力を生かせる場所って……」

「わからぬか？ 我の能力は“オペレイト操作”
そしてその対象は生物以外、」

「っ……、まさか……？」

「そう、死体は生物ではない」

墓が不自然に盛り上がった。

片手が這い出す。

何かを探し出すように這い回り、臆て地面を掴んだ。

その腕が、自身の身体を引き摺り上げる。

空間に魔力が満ちて行く。

戦慄がリースの背筋を貫く。

（ダメだ……あんなのに出て来られたら、勝ち目どころか……っ！）

リースは弾かれたようにエメトの方へと駆け出した。

「焔ほむの王は高らかに詠う」

距離10mと少し。手持ちの術式の中で最大の物を詠唱しながら、リースは疾走する。

腕はついにその身体を引き上げた。首無しの骸を、同時に顕になったもう片方の腕に己の首を掴んで。

（間に合わない　　！！）

濁った眼球がリースを捉える。それは、竦むような、だけど死者

特有の虚ろな瞳。そして、その瞳が

ぐるり、と気絶するように眼孔内を回ってベリアルを駭かして崩れ落ちた。

「ジャミング……?!」

驚愕するエメトの胸から、

ぐシユ

「?!」

誰かの腕が、突き出された。

その掌には彼の心臓があり、グチャリと嫌な音を立てて握り潰される。

リースは思わず詠唱途中だった震術を途中で止めた。

「ご苦労様ア でもオ」

崩れ落ちるFourthの背後に、

「あんたじゃ役不足よオ エメトオ」

返り血にまみれたシファ・バルバローネの狂気のある笑みがあった。

《神へ還す火》

塵になった。それは比喻でもなんでもなく青い炎に焼かれたエメトは灰すら残さずに、リースの目の前で消えた。

「あなたは……、誰？」

「そうねエ あなたたちがシファ・バルバローネって呼ぶ存在よオ」

「人間、なの？」

「あ？」

「あたしは悪魔が嫌い、憎い あたしの故郷 記憶喪失のあたしにはそう呼びたかった場所を滅ぼしたから

「い」
「だけどあなたが人間なら、あたしはあなたに“力”を向けたくない」

「……んフツ」

シファ・バルバローネは小さく吹き出した。

「アハツ アハハハハツ くっだらないわねエ!!!」

そうして嘲笑をあげたあとに不意にリースに向き直った。

「“一緒”にしないでくれるウ？」

無機質な光を讃える大きな瞳が微細な苛立ちを宿してギョロリと動く。シファ・バルバローネは始めて愉悦以外の表情を見せた。

反射的に、リースは身構えていた。もしレグナが、シャルツが、スティアが。この瞬間にこの場に入れば同じ動作をとっただろう。

シファの言葉にはそれほどまでに明確な、殺気があった。

「さアて 仕上げにかかりましょうかア」

全てはこの瞬間のためにあつたかのように、

シファ・バルバローネは狂喜に表情を染め直す。

《神へ還す火》

手のひらの先に小さな青いが生まれ、注ぎ込まれる震力と酸素を呑み込んで一気に膨張する。

解放。

膨大な熱量を持った炎塊が解き放たれ、リースに向かう。

「増幅に使ってるのは燐の術式……術名のクリメイションの意味は魔術語で『火葬』 ってことは炎が青くなるほどの高温は温度からじゃなくむしろ色の要素から悲しみの意を持たせて逆に色から温度

の方を引き出して……（ぶつぶつ）」

リースはそれを見ていなかった。ぶつぶつと呟く片手間のような動作で手を振り上げた。

《火龍の咆哮》

打ち出されたのは悪魔を一撃で消し飛ばす威力を持つ火炎の砲撃、しかしあっさりと《神へ還す火》に呑み込まれる。

火力が違い過ぎる。

「自壊を指示」

圧倒的な威力の差にも関わらず、リースがそう呟いた瞬間に青い炎はその場で爆散した。

（屈折術式の応用 《火龍の咆哮》の内部に光属性の術式を詰め込んで《神へ還す火》を内部からベクトル操作したのねエ……！）

破られてなおシファ・バルバローネは笑う。

あの方法は《神へ還す火》が高威力の一撃を生み出す物だから通用した なら、複数型の術式は？

「祖は無慈悲なる光の矢」

「1、3、5、コネク連結
2、4、6、連結」

《雷神の弓矢》

空中に無数の雷撃の矢が浮かび、超速度で放たれる。

《六柱障壁》

対してリースは無属性の障壁術を起動する。

障壁と雷撃が激突し統制を失なった電気の閃光がほとばしり視界を覆い尽くした。

(へキサ程度にあたしの攻撃術が防がれた、ねエ……表面に屈折術式を張りつけて緩衝剤にしたのかしらア？ ガードに関してはかなりのレベルねエ)

なら、次は

「考え事？ 余裕ね」

その声は真横から聞こえた。

「！」

リースが短剣を滑らせる。障壁を作ると同時に、その防御力を信じて駆け出していたのだ。

スティアの“屈折”にナタクの“防壁”の組み合わせが負けるはずがないと信じて。

ガツ と鈍い音がしてリースの腕に間一髪で反応したシファの手刀が叩き込まれる。その勢いで短剣が投げ出され何処かの地面に突き刺さった。

(しまっ……)

遅い、と『リース』は思う。微笑む余裕すらある。

「至近距離からじゃないとこんな当たらないでしょう？」

《紫雷の瀑牢！！》

いくつかの短剣が共鳴し雷撃の牢獄を形成する。

(まだまだだねエ)

雷の牢に囚われながらシファ・バルバローネは思う。

この程度の雷撃ならば唇はまだ動く。詠唱が可能ならば術師という職種はまだ戦えるのだ。

…だが、

タイムラグ。激痛に遮られてシファは不完全な詠唱を、ゆっくりと唱えることしか出来ない。対して、

「焔の王は高らかに歌う その軀を、その魂を、その骸でさえも滅ぼすために」

《垣間見る地獄の業火（One Moment Flare・イフ
リート）》

リースの詠唱は速すぎた。

第22話：One Moment Flare（後書き）

名前の由来3

シファ・バルバローネ

出でよ暗黒の娘、バルバローネ！

……わかる人にはわかる

シファの方はなんとなく着いた

EMETH^{エメト}

ゴーレムを作れる能力が先についてそれから着いた名前

EMETHにはヘブライ語だがなんだかで“真理”って意味があるらしい

ほぼGS美神とマンキンの知識（殴

ラーシャル

一番近いのはダイの大冒険のラーハルトなのかな？

なんかパツと浮かんで深く考えずに着けた

あとになってなんとなく“トライデント”って家名が浮かんで“雷の槌”のリーダーにでもすればよかったなあと思いました

ラーシャル・トライデント、なんか響きが気に入ってる

ゼクウ・ファイアレス

多分ガンダムのバクウって機体だと思う

携帯の辞典機能によるとフィアレス (fearless) は“恐
れない”らしい

第23話：機械仕掛けの大天使（前書き）

オオオツ!!!

BLADE

あなただけは別よ 『青の断罪』

【機神】ルシフ

第23話：機械仕掛けの大天使

「……………」

レグナは城の前に居た。

結果だけを言うとラーシャルからは逃げたのだ。

「はじめまして あなたが『BLADE』…………、であってるわよね
」？」

声のした方を見る。城の上、太陽を背にして六枚羽の機械翼を持つ女が居た。

女は軽く跳躍し、レグナの前に降り立つ。

女の髪は白い、瞳は白い、装飾が、肌までも、何もかもが白い。

（こいつ……………悪魔、か？）

純白の悪魔はニコリと笑う。

「【Second】ルシフよ」

「ヴァルクリフの結界を破ったやつか……………」

レグナがウルスラグナを抜く。

「へエ……それが“拒絶”のテストメント？」

「だったらなんだ？」

「ふーん……基本状態デフォルトの能力は“物質間結合の拒絶”　つまり『絶対切断』ね　私の手元にあるいままでの戦闘のデータを総合すると、対象を制定しての拒絶が『刃神』、空間結合を拒絶して刃の軌跡上のあらゆる衝撃を止めるのが『鎧神』ってどこかしら？」

「……、よくわかるな？」

「これでも力のことには詳しいの　大抵のことはわかるわよ　次は『慟哭』の原理でも訊きたい？」

「必要な物を守れるならなんでもいい」

「そう……じゃあ『あなたの身体に起こっている異変』のことはどうかしら？」

「?!」

「……鈍いわね、口車に乗せられて会話に興じるなんて“魔術師”を相手には絶対やっちゃいけないことよ？」

周囲の空間が強い魔力によって歪んだ。

「ちいっ……！」

炎、雷、風、水

口上の合間に配置された4属性の震術、魔術が複数 同時にレグナに襲いかかる。

…が、

神速の速度で抜き払われ、また納められ今度は別の魔封剣が抜かれる。

一瞬で4つの魔法が裂かれた。

「速いわね……なら、これでどオ!!」

更に無数の魔弾が精製されレグナに襲いかかる。 それでもレグナのほうが速い。

4つの魔封剣を納刀と抜刀を繰り返して、魔弾の嵐を切り抜ける。

大量の魔弾が尽きたその一瞬に、レグナは一気に距離を詰めた。

「一之」 ……ハイ、射程距離」

《機械仕掛けの大天使》が大きく羽根を広げ…

(砲門……?!)

…六枚の翼に設置されたそれぞれ六基の砲門がレグナを向いた。

(まずっ…… 鎧、 いやっ……)

思考を爆音が遮った。

ダダダダダダダダ!!!

36基の砲門が同時に牙を剥く。

「圧勝……、だからこれあんまり使いたく」

ルシフは言葉を停めた。

不自然な影が地面に刻まれているのを見つけて

「上……?!」

「オオオツ!!!」

咄嗟に跳躍して弾丸を逃れたレグナが落下の勢いに任せて一閃する。

ズダアンツ!

「っ!!!」

ルシフはそれをかわした。

直前で風の魔術を《機械仕掛けの大天使》を通して圧縮しロケット噴射のように撃ちだし後方に加速したのだ。

「ちいつ！」

レグナは舌打ちし、ルシフを追う。が、機械翼による加速を得たルシフと生身のレグナでは速度が違い過ぎる。

（《機械仕掛けの大天使》の装弾数は300もない……　ただ撃ち続けて消耗を待つのは不可能ね）

ルシフは距離を取って停止した。

300発と言えば相当な数に聴こえるが一度に36発の銃弾を打ち出す《機械仕掛けの大天使》ならばそれは各砲門につき10発にも満たない数しか撃てないことになる。

おそらく正面からまともに放つては、レグナは凌ぎ切るだろう。

「いいわ……　決着をつけましょう」

六枚の翼が大きく展開する。

同時に、ルシフが『風の噴射』で爆発的に加速した。

（正面　！）

交差時に叩き斬ろうとしたレグナを嘲笑うように、直前で一斉に翼の角度が変わりルシフが揚力を得て急上昇した。

剣も、術も、届かない遙か上空。

ばたあつー！

羽ばたきによって空気が裂かれ、空中で静止したその36基の砲門が、真下に向かって吼えた。

「っ……！！！」

ダダダダダダダダ！！！！

狙いなど大雑把にしか定められていない数任せの射撃が周囲一帯を薙ぎ払う。

(クソっ……完全な頭上からの射撃、防御し辛れえっ)

レグナはかつて『吼える失墜の翼王』という魔術を目にしたが、あれは位置的に斜めからの射撃だった。が、これは違う。

例えば、狩人の矢をかわした獣は雨粒を避けることが出来るだろうか。

140kmで迫る死球を避けることの出来た野球の打者は、工事現場で頭上から落下する鉄骨を回避することが出来るだろうか。

不可能

それが頭によぎっても、レグナは足掻く。

超人的な剣速を持って垂直に降る銃弾の雨を弾き続ける。

だが、

グキイツ！

「がつ………?!」

被弾する。死角からの攻撃など凌ぎ切れるはずがない。そして一瞬でも動きが止まればレグナはただの的と化す。

無慈悲な弾丸が降り注ぐ。

「ッ………！」

『二之太刀 鎧神』

「……………、？」

妙だ。とルシフは思った。

《機械仕掛けの大天使》は莫大な魔力を持って起動するとはいえ、基本はあくまで兵器だ。魔術と違い『対象を葬った感触』などを察知することは出来ない。

彼女は天空に居るとはいえ、『下手な鉄砲を数を撃って当てる兵

器』を使っているため外れた弾の威力で膨大な量の土煙が上がりレグナの姿を視認することは不可能だった。

だが『土煙の薄い場所』程度は彼女の位置からなら容易に認識出来る。

(土煙が、晴れて行く……?)

レグナが居たであろう場所からは既に周辺から流れたであろう薄い幕しか存在しない。

ルシフは射撃を続けているにも関わらず影のようにレグナが黒く透けて見える。

(どういこと……?!?)

不意に影から何かが飛び出した。

「!」

咄嗟に36基の砲門をそれに集中して放つ。

飛び出したそれは、身体を回転させ双剣を振るい36の内、前後左右からの28発の弾丸を『剣に触れていない物』まで弾き飛ばす。残り8発の内、4発を回転と同時に捻った身体を隙間に入れるようにかわし残り4発をあちこちに存在する鞘などの金属の部品に被弾させる。

「ぐっ」

4発の被弾で小さくうめいたがレグナは墜ちなかった。

(凌いだ！？ だけどここまでは届かないはず…)

そう、ルシフが居るのは悪魔の跳躍力を持ってしても届かない場所だ。

にも関わらずレグナは『剣に触れていない物』を弾き飛ばした“拒絶”の力を足場にし、跳んだ。

「っ……このオ!!!」

ルシフは対象の位置を再設定し、36基の砲門をレグナに向ける。
《機械仕掛けの大天使》には推進機は備わっていない。

あくまで揚力を使って浮上するそれは、『風の噴射』でなければ高速移動を行うことは出来ないのだ。

術名を発声せずとも舌の動きだけで魔術を発動出来るルシフですらいまから魔術を起動する心理的な余裕はなかった。それよりもおそらくレグナが斬り込むほうが速い。

それよりも36基の砲門でレグナを撃墜したほうが確実

ルシフはそう判断したのだ。

だが、

『一之太刀

ルシフの計算には、

刃神!!!』

36の弾丸と《機械仕掛けの大天使》ごとルシフを両断出来る攻撃は、存在しなかった。

「やっべ…… 着地考えてなかった……っ!!!」

「……バカね」

《機械仕掛けの大天使》を破壊されレグナと同時に落下しつつあるルシフは手を伸ばす。

「掴まりなさい」

「?!」

「躊躇うのはわかるけど、このままだと真っ赤なトマトよ?」

どのみちレグナに選択の余地はない。

ルシフの手を取った。

彼女が口の中で何かを呟く。

地面を直前にして突風が2人の身体を僅かに押し上げ、緩やかに着地した。

「……なんで助けた?」

「人が人を助けるのに理由なんて要らない よく言うじゃない?」

「は……?」

「冗談、つてわけでもないかしらね まだ“人間のつもり”なら」

「何が、言いたい……?」

「私の望みはもう叶わないから、あなたに協力してあげる 消滅まであと5分もないでしょうけどね」

「……Firstを倒す方法は」

「ないわ」

「っ……」

「人間には、ね　あなただけは別よ　『青の断罪』」

「その『青の断罪』　つてのはなんなんだ……？」

「薄々は気づいてるんでしょう？」

「……」

「いまから約25年前　、人間の味方として召喚された魔王の異名よ」

第23話：機械仕掛けの大天使（後書き）

3時まで寝てた……

第24話：神の左手 悪魔の右手（前書き）

どっちも俺っちが欲しかった…… だけど人間がくれなかったもの
サ “半神” シーク・ツエイベル

冗談じゃない……！ 【銃の王】 シャルツ・デイバイト・アー
クエツジ

第24話：神の左手 悪魔の右手

シャルツ・デイバイト・アークエッジは高エネルギーの刃に対して咄嗟に後方に跳んだ。

まるで線を引いたようにエネルギーの刃は超高熱の赤い軌跡を残して軌道上の石材を溶解させた。

シャルツはその剣を知っている。かつて“偉大なる剣”と呼ばれた大悪魔が振るった可変型の機械剣、《機械仕掛けの神》
エクスシリーズと呼ばれる魔界の武器の中でも最高傑作と謳われる作品だ。

「《機械仕掛けの神》デウス・エクス・マキナ 王国の武器庫にあるはずのそれを、どうして……？」

「……王都から逃げるときに拝借したサ 俺たちは結界の中で生まれた半神、結界を破るために必要だったサ」

「ベリアルホープ……?! 実在したのか、どうして悪魔の側に……」

「ラーシャルは俺たちを同族だと言ったサ……!」

トランス ソード&シルド

(盾と剣……、なら)

シャルツは露出した手足を狙う。照準の定まった4発の弾丸が別々の四肢とへ飛ぶ。

トランス フルディフェンド

「！」

《機械仕掛けの神》が透明な板のように可変した。

(45mmの圧縮震力弾を弾いてる　なんて防御力……！)

視界の塞がっていないシークは《機械仕掛けの神》を盾に突っ込む。

「ルシフは純粹に俺っちの能力を評価してくれたサ……！」

「くっ……」

シャルツは真横に跳び、射撃する。普通の人間からすれば限界に近い速度だが、悪魔の身体能力を持つシークは易々と反応し盾を動かしてそれを弾く。

トランス ツインブレード

シークの手には60cmほどの双剣が現れる。

「どれも俺っちが欲しかった……、だけど人間がくれなかった物サ

っ！！」

間合いは既に剣の領域

『電速の刺突』
スタンレイピア

だがシャルツには瞬撃震がある。地面から突き出した電撃のレイピアがシークに突き刺さる、

寸前で、砕けた。

空気は基本的に絶縁体だ。震術はその理屈を強引に押し通しているに過ぎない。

だからシークは弱い風の魔術を連続させて雷にぶつけそれをねじまげたのだ。

「！！」

剣がシャルツを薙ぐ。震術に意識を移して隙を伺っていたシャルツは咄嗟に反応出来ない。

それでも僅かに身体を後ろに逸らした。

ザクッ……！

嫌な音を立てて腕の肉に剣が突き刺さる。

直後の2撃目。

ガキイツ！！

これには反応した。カイン&アベルのグリップを刃に叩きつける。

が、単純に力負けしたシャルツの身体は衝撃に負けて大きく吹き飛んだ。

「これで、終わりさっ！」

トランス グレートソード

ジャックウルフの群れを一撃で葬った高エネルギーの刃を持つ大剣が組み上がる。

システムオールグリーン

エネルギー充電率 98、99、100

《偉大なる剣》発動

「冗談じゃない……！」

シャルツが呟く。

シークが剣を振り下ろす。

刹那、吹き飛んだままのシャルツの身体が不自然に真下に叩きつけられた。

「なっ………?!」

磁力術式、スティアが以前高速移動に使った物と同様の術式だがあれは元々『レールガン』という兵器を作り出すためにシャルツが開発した物だった。

シャルツの身に付けているいくつかの金属の部品が反応し、真下に力が働いたのだ。

対して魔界の物質で出来た《機械仕掛けの神》は磁力になど反応しない。

膨大なエネルギーを持つ《機械仕掛けの神》の刃が、彼女の真上を通過する。

「今度レグナと結婚するんだよねエ、僕っ！」

シャルツは真上にある剥き出しの腹に向かって銃を突き出した。

許されざる者

極大の白い閃光がシークを撃ち抜いた。

「ちく……しよっ……」

「君がどんな生き方をしてきたかは想像がつく　君は何も悪くなかった……　全部僕らの罪だ」

だけど、死ね

第24話：神の左手 悪魔の右手（後書き）

友達の家泊まりに来てる

目の前に1万円札がある

これ、パクったらこいつは俺にどんな顔するんだろう

まあやらんけど

第25話：思惑（前書き）

つまらない邪魔が入ってライシャルはご機嫌斜めなの
r d ラーシャル
T h i

ま、やっぱり殺したでしょうけどね
F i f t h
エヴァンス

第25話：思惑

BLADEが伏魔殿にたどり着けて約5分後、

「ラーシャル」

「はいなの」

「喜べ、BLADEといの一番に殺らせてやる」

「ラーシャルが殺っていいの？」

「ああ だが逃がしたときは追うな その時は、エヴァンスを見張れ」

追うな、なんて言われていなければ……

ラーシャルは苛立っていた。あるとき、

ガキイツ！

高い金属音、ラーシャルは首筋に向かっていたウルスラグナの
撃を鞘を引き上げて防いだ。

（押しきれない……！！ こいつ……、このナリで俺より力が……？
！）

「BLADEは殺すの グラナの命令なの」

力任せにレグナを弾き飛ばしたラーシャルは、鞘だけで居合いの構えを作った。

(何をっ……………)

『偶刀・禍夢威』

ラーシャルは何も納められていないそれを引き抜いた。

同時に追撃してきた悪魔の魔術がそれに重なった。

相殺、数十の魔術が、たった一閃に書き消される。

「っ……………!!」

レグナはラーシャルに背を向けて逃げた。そうでなければおそらく、死んでいた。

「あれさえなかったらラーシャルはBLADEと遊べてたの
つまらない邪魔が入ってラーシャルはご機嫌斜めなの」

その邪魔をした悪魔共を切り刻んだ、血まみれのラーシャルにエヴァンスは辟易する。

「それで、どうして僕のところへ？」

「だってエヴァンスは暇そうなの ラーシャルはつまらないから遊んで欲しいの」

「なるほど、では少しおもしろくして差し上げましょうか」

「是非そう願」

殺気を感じてラーシャルは刀を引き抜いた。

……つもりだった。

(遅っ… へぎいっ!!)

抜き手より速く手首に蹴りを擦じ込まれて手首の関節が碎ける。

Fifth エヴァンスの『遅延』スロウ

「あぐう……」

ラーシャルが飛び退く。その動作も『遅延』が働いていて酷く緩慢だったが、エヴァンスはあえてそれを追わなかった。

「居合いさえ潰せばあなたは並の悪魔と大差ありません あなたは僕の目的とは基本的に無関係なんで、いま退くなら見逃しますが？」

「ラーシャルはいまので本気で怒ったの……！」

鞘を縛っていた腰の紐を解き、鞘を踏みつけて固定し左手一本で長い刀を抜く。

「残念です」

エヴァンスは片手を真上に突き出す。

その手のひらの先に魔術によって風が集約する。

それが、膨大な体積にどこまでも膨らんで行く。

「なっ……ラ……ラーシャルは、そんな術しらないの」

エヴァンスが発動したのは《フイクシイ・ストーム圧砕の風塊》、本来は何の変哲もない風の魔術に過ぎないはずなのに……

「お、大き……」

人間大の風圧の大砲、それが更に膨張を続ける。

「発動限界、つてご存知ですよね？」

震術、魔術の基本となる理論の1つ。

1つの術の威力には限界がある。それ以上の力を持って術を発動しようとすればそれは全く別物の術になってしまったり、暴走して崩れてしまったりする。

「僕は魔術が発動したあとに手元を離れるまでのあいだに『遅延』を働かせてそれ以上の魔力をプラス出来るんですよ」

「も、目的は何なの?! 魔王のクセにどうしてラーシャルを……」

「つまらない復讐ですよ “彼” と似たような物です」

ゆっくりとエヴァンスの手元から風の大砲が離れる。

ラーシャルは刀を構えた。

が、利き腕の使えず魔術の得意でないラーシャルにその一撃を防ぐ術はない……

「お、お願い……助けて……」

「残念です もう少し早くその言葉が出ていたら」

エヴァンスは『遅延』を遮断した。

まるで早送りされたように風の塊が本来の速度を取り戻し、
ベキベキと嫌な音を立ててラーシャルを押し潰した。

「ま、やっぱり殺したでしょうけどね」

エヴァンスは狂気を孕ませた笑みを浮かべる。

第25話：思惑（後書き）

もつあと10話ぐらいで完結するかな？

終わり方はイメージはあるけど文章にはまだ出来てない

ただ全部の問題が綺麗に解決してみんな幸せに暮らしました的な
終わりがたは真昼はあんまり好きじゃない

とりあえずいまは戦闘シーンに力を入れたい

第26話：裏切りと代価（前書き）

騎士団長、なんていうから……ただの剣士かと思ってましたよ
クーデターの首謀者 レイ・バークラント

動きが正直過ぎるのだよ、貴様は 王国騎士団長 レイム・リ
ーガル・アーカナイト

……、226人 スティア・クロイツ・マグナビュート

滅びはもう見たくないだろう？ なあ、ザックフォード “神
に似た者”の聖痕を持つ者 クグルル・セント・エクセリオン

第26話：裏切りと代価

「どうした？ 息が荒いぞ、レイ・バークラント」

レイム・リーガル・アーカナイトは、圧倒していた。

「はあ……、はあ……」

近衛兵長、レイ・バークラントは【電速の魔剣】の力を継ぐ“ベリアルホープ”だ。

普通の震術師は体外の電流を操るが、【電速の魔剣】は体内の電流を操り通常人間が6割りも使えていない筋力のリミッターを解除することができる。

その速度は、人間を、悪魔をすら、軽々と凌駕する。

にも関わらずレイムはそれを捕捉する。

「クソッ……！」

超高速の刺突。

回避。

派生する横薙ぎの一閃。

回避。レイムは無造作に、ゆっくりと剣をレイに突きつけるように動かした。

レイは人外の速度を持って、後方に跳びこれをかわす。

レイムはそれを突いた。

ドゴオン!!!

大剣の軌道上の空気が裂けて、衝撃波を受けたレイが吹き飛んだ。

「騎士団長、なんていうから……ただの剣士かと思ってましたよ
レイム・リーガル・アーカナイトっ……！」

明らかに震術を交えた攻撃、先程の衝撃波は火炎系か何かで
巻き起こした気流を超速の突きで叩きつけたモノだ。

「たしかに、それもあるだろうがな、貴様の動きが稚拙過ぎるのだ
よ」

レイが構えを直す。

それを一瞥してレイムは失笑する。

7年、ベリアルホープが生まれてから現在に至るまでの年数だ。
そう、たかだか7年。

(動きが正直過ぎるのだよ、貴様は)

いかに速くとも、

いかに鋭くとも、

20年以上の鍛練を重ねたレイムには彼の動きが手に取るようにわかる。

(……とはいえあの速度で飛び回られては致命傷を与えるのは難しいな)

少しずつ、僅かな隙を突いて確実に削り取って行く。

均衡を破るように外から足音が響いた。

両者の視線が一瞬そちらへと向かう。

「ステイア・クロイツ・マグナビユート 丁度いい、手伝え こいつがクーデターの首謀者だ」

そうしてレイムは、唐突に雷撃に撃たれた。

「っ……、貴……様……?!」

半ば無意識に、レイム・リーガル・アーカナイトは信じてしまったことに気付く。

ステイア・クロイツ・マグナビユートが味方であると。

「早すぎるぞ レイ、おかげで機を逃した」

「これ以上待てなかったんですよ 貴方も知ってるでしょ？ 彼の勘の良さは尋常じゃないですから」

ザックフオードは嘆息する。

「はあ…… お前もか、いや お前が立案でレイが仕切ったってとこか 理由はなんだ？」

「……、226人」

「あ？」

「クーデターに参加した騎士団と大震の下部組織、それから民間人の合計人数だ

レイムや貴様に勘づかれん程度に情報を流した程度でこれだ」

「……」

「わかるか？ 人間ではない貴様に王となって貰いたいとは民は思わんのだよ」

ザックフオードは自嘲に近い笑みを浮かべて、それから目を閉じた。

思い出す。 いや 忘れもしない。

クグルル・セント・エクセリオン

かつて『神獣 セラフイム』を破った世界最強の震術師。 ザックフオードはその息子とされている。

だが、実際はクグルルの子供は女が1人いただけだった。

「俺あ多分もうすぐ死ぬよ そうなったら人間の抑止力は消える

いずれ暴走して、王国は滅びるだろう 結局マナや震術なんて得
体の知れない代物は人間の手に余るのさあ

お前、千年生きてんだろ？ “王”をやってみないか？」

クグルルはかつて彼にそう言った。

「王だあ？ なんで俺様が、んな面倒なことを」

「“契約”だよ お前、俺に負けたろ？」

「あんなの負けに入るか

“破棄”だ クソヤロウ」

「いいや お前はやるね、何故ならお前は優しいからだ」

滅びはもう見たくないだろう？ なあ、ザックフォード

第27話：殺害の王子（前書き）

殺す “半神” カイゼル・グランローグ

【四人の王】みたいな『王の証』……?! にしてもこの威力は、

【裁断者】ナタク・エルステイン

第27話：殺書の王子

「……………何…？」

ナタク・エルステインは馬上から、少し離れた位置に土煙を見つけた。

（悪魔の群れ……………?! 王都からこんなに近い場所で、どうして……………ヴァルクリフからは何の連絡も…………… どのみち内乱なんて起きてる王都をいま攻められたら……………!）

ナタクは馬上から高く跳躍した。眼下に見える土煙の渦に向かって、グローブから伸びる鋼線を一閃する。

着地。同時に身体をコマのように回転させ分解震を纏わせた長い鋼線で周囲の全てを切り刻んだ。

【裁断者】、ゼクウやスティアに比べると攻撃術は地味ではあるがそれでも大震の1人。

並の悪魔を捻ることなど造作もないことだ。

ただ、1人だけその場に立つことを許された力量を持った少年が居た。

血染めの大地の中でナタクとその少年は睨み合っ。

「……………人…間？」

感じる圧力は悪魔の物でしかないのに、ナタクはそれから『人間』を感じ取る。

「殺す……」

「!!!」

「人間……、殺す！ コロオスツ!!!」

“悪魔を望む者” カイゼル・グランローグは刀の柄が軋むほどにそれを握り締めた。

同時に、疾走。

迎え撃つようにナタクが片腕から鋼線を走らせる。

《血染めの刃》

軌道上の鋼線が全て切断された。

(!!!?)

《リフレクション》

命中の直前で展開された“壁”がドス黒い刃を受け止める。

刃はそれすらも、貫く。

「……っ」

咄嗟に片腕を盾に急所への衝撃を防ぐ。分解震に包まれた鋼線を引き裂いたことと障壁による威力の緩和で切断こそまのがれたが、それでもかなり深くまで肉が抉れる。

「人間……っ…… コロオス！」

カイゼルは2撃目を放とうと振り被る。

（左の3本を切られた、残りの鋼線は7本……あの刃を正面から止めるのは無理、なら、……！）

大振りの攻撃に対してナタクは真横へと跳ぶ。対象を失ったドス黒い刃が地面に巨大な亀裂を生んだ。

（信じられない威力……！ 魔力はそう高くないのに、どうして……もしかして……【四人の王】みたいな『王の証』……?! にしてもこの威力は、）

「うー……グー……」

（息が荒い、たった2撃で疲労してる……、いや……）

出血……？

剣を握る手元から滴る血、あれはナタクのつけた傷ではない。

「!?!?」

ナタクは見た。カイゼルの皮膚の下を伝う無数の触手を。それが、カイゼルの血を吸っているのを。

「……………『殺害の……王子』……………?!」

『殺害の王子』

王国の武器庫に封印されていた魔剣の1振り。
術者に“寄生”し術者を『武器』として振るうことからその名が
付いた。

「……………！、……………！、……………！！」

火花が散る。不可視に近い鋼線と、刃が幾度も重なる。

押しているのはナタク・エルステインだった。手数が違うのだ。
ナタクは5本の鋼線を指の動きだけで操る。

対してカイゼルは一本の刃だけでそれを凌がなければならない。

それでもナタクがカイゼルを殺せないのは、

ぶしゅっ

(っ……………、まただ)

身体のうちこちが傷だらけになりながらもカイゼルは止まらない。
命知らずとも言える特攻。しかしそれが既に腕に深手を負ってい
るナタクを退かせる。

これ以上の傷を負えばおそらく死ぬ。

だけどそれ以上に

「殺す、コロス、コロオス、コロオオス！」

《血染めの刃》

その正体をナタクは既に看破していた。

超高压で噴射される血液のウォーターカッター。

（あの圧力を叩き出すには先ず武器本体の加速が必須、それに加えてかなりの魔圧　魔力の放出が小さく見えたのは武器の内部での消費が極端に大きいから、ならっ！）

《六柱障壁》

リースがドレイクの時にやったように、加速の直前部分に障壁を作り出して速度を殺すことは出来た。

だがナタクはあえてそれをしなかった。

ナタクは加速後の武器に向かって障壁を作り出した。

べきや

嫌な音を立てて殺害の王子が砕ける。ナタクの障壁の硬度は並の金属など遙かに超える。

『殺害の王子』はテストメントではない。

グレイプニルのようにウルスラグナの斬撃に耐えきるような能力は存在しないのだ。

ブシユッ

ナタクは知っていた。それでは殺害の王子を砕くことは出来ても

《血染めの刃》を止めることは出来ない、と

死ぬ。とナタクは思う。

だけどそれ以上に、

かつて『大震』が産み出した悲しいベリアルホープをナタクは助けたかった……

「息は、まだあるの……？」

カイゼル・グランローグは自分の血で汚れた右手をナタクに添えた。硬い障壁に叩きつけられたことでその手首の骨はぐちゃぐちゃだった。だけどそんなことはカイゼルに取ってはどうでもよかった。ナタクはコクリと首を縦に動かす。

「どうして、助けたの？ 俺は自分の手で『殺害の王子』を盗んで使ってたんだよ……」

ナタクは首を横に振る。

「俺を“作った”人間なんて滅びてしまえばいい……俺はそう思ったんだよ？」

人間なんて滅びてしまえばいい。

ナタクもかつてそう思ったことがあった。

『第一BH計画実験体』

ナタク・エルステインが最初に選ばれた母体だからだ。それまで信じていた人間の、明確な裏切り、絶望。

結局、最初期の計画は失敗する。

そしてナタクは実験で得た“悪魔に近い力”を『大震』として戦線に投げられる。

誰も彼も身勝手だと思った。

全て消し去ってしまいたいと思った。

それ以来ナタクは言葉を発することを嫌った。自分の思いを口に

することを拒んだ。

そんなときに戦場で見たのが、レグナ・ゼオングスだった。例え代価の払われない戦いでも彼は無償で人々を守り抜いた。

力があるから、たったそれだけの理由で。

殺す。と目の前の少年は言った。その強さが自分にもあれば、

『BH計画』は止められたのかも知れない。

ナタク・エルステインは笑う。

死を目前に笑う。

「どうしてそんなにキレイに笑えるのさ……俺はあなたを殺したんだよ……？俺が憎くないの？」

「……だって……あなたは……泣いてる……でしょう？」

それきりナタクは何も言わなくなった。

無機質な人形のように目を閉じた。

カイゼル・グランローグは思う。

死なせない、この人を絶対死なせたくない。

第28話：つまらない復讐（前書き）

御託はいいだろ　かかって来いよクソが、それが悪魔だろうか？

Fifth　エヴァンス

退屈なお喋り、ありがとよ

First　グラナ

第28話：つまらない復讐

地下神殿　、最奥の儀式場にFirst　グラナとFifth
エヴァンスは居た。

「ラーシャルはどうした？」

「僕がここに現れたことで、答えになりませんか？」

「……死んだか」

「はい、殺しました」

「どうして俺を狙う？」

「つまらない復讐ですよ　魔界にいたころにあなたに家族を殺されました

多分あなたは覚えてすらいないでしょうけど」

「どうして「御託はいいだろ　かかって来いよクソが、それが悪魔
だろうが？」

「　よく吼えた」

グラナがエヴァンスに向かって加速した。

「?!」

違和感をグラナの全身が包む。

思い通りに身体が動いていない。思い描く自身の速度よりも遙かに、
“遅い”

チャキッ

エヴァンスは右手に握った刀を振るった。それはけして手慣れた動作ではなくむしる素人丸出しの一撃、

「くっ……っ！」

だが『遅延』に動きを制限されたグラナはそれを全速でかわさざるを得なかった。

それでもかわし切れずに首筋に薄い線が走る。

エヴァンスが左の拳を固める。それを認識出来ているのに、

ドガッ！！

グラナの顔面に拳が激突した。

吹き飛ぶ速度すら、遅い。

エヴァンスは拳を叩きつけた勢いのまま身体を捻りグラナの頭を真下に蹴り落とした。

ゴオオオンッ！

轟音。速度という要素だけを取り除かれ、エネルギーをそのままにしたグラナの頭は床にぶち当たった。

「あなたは魔術を使えない」

刀を喉元に突きつけてエヴァンスは死刑宣告を読み上げる。

「魔界にいた頃からずっとあなたのことを調べて来ました

貴方が魔術を使ったという記録は一度もなかった、おそらく《反魔法》のせいなんでしょうね」

「……」

「僕の“遅延”は肉弾戦に置いては無敵の能力、魔術を使えない貴方を殺すことは容易です、だけど貴方のまわりにはルシフが居た

僕は彼女には勝てない」

だがルシフは死んだ。エヴァンスがBLADEをここに連れてきたことによって、

全てはエヴァンスの計画の内。

「死ね」

エヴァンスは刀を振り下ろした。

ガキィッ

「何……?!」

その一撃は鎌の柄に阻まれた。
刀に重力の助けを借りた全体重を込めているのに、グラナの鎌は
ビクともしない。

「退屈なお喋り、ありがとよ」

それどころか、押し返される。

「ッ……!!」

遂には弾かれて、エヴァンスの体勢が大きく崩れる。

(なんて力だ、だけど“遅延”が働いている限り僕には……、?!)
ばしゅっ

間一髪でエヴァンスは鎌の一撃をかわした。

「速い……?!」

《反魔法》……?! いや、違う。『能力』は魔法ではない。反
魔法で打ち消すことは出来ないはずだ。

ならば、

「大したことはねえ 割合なんざ知らねえがお前の《遅延》は速度
を実際の何分の一かにするもんだろ? だったら数倍の速さで動け

ばいい」

「ッ、」

圧倒的な実力の差。

あくまでエヴァンスはFifthでしかない。
単純な地力ではルシフやラーシャルに劣る。

ましてやそれを超えるグラナになど地力で勝るはずがない。

「はあ……… そんなのありですか」

諦めたようにエヴァンスは嘆息する。

「ザコはザコなんだよ どれだけ足掻こうがな」

「そうですね……… それじゃあ」

エヴァンスは右腕を伸ばし刀を真っ直ぐに突き出した。

「足掻かせて貰います」

直後に、

「タイムトラベル《時間旅行》 刀を突き刺している2秒後の僕を實現」

刺突がグラナを貫いた。

「ん……だどっ?!」

グラナが鎌を動かす。

「《時間旅行》 遠く離れる3秒後の僕を実現」

エヴァンスの姿が消え、数m後方に現れる。

「なんだよ…… その力はっ」

「これが僕の本来の能力です 《遅延》はオートで活用出来る範囲の微弱な《時間旅行》の一端なんですよ」

エヴァンスは軽く刀の血を拭う。

「あなたのテストメントの力は知ってます “復讐”の『カラミテイ』でしたっけ？」

所有者が復讐の対象と定めた存在が視認出来る範囲にいるとき、その対象を“距離を無視”して攻撃出来る

「あなたの定めた“復讐”の対象は人間、悪魔である僕はその対象外」

グラナは盾とするように鎌を構える。

そこにあるのは明確な恐怖。だがグラナはその感情を認めない。

全速力を持って逃亡すれば逃げ出すことぐらいは可能だろう。だ

がグラナは逃げない。

「あなたに僕を殺す術は、ありません」

エヴァンスは圧倒的な実力差を持つグラナに向かい宣言する。

「《時間旅行》 あなたの心臓に刃を突き立てる3秒後の僕を実現」

グラナは重心を僅かにずらした。

(気付かれた……！)

グラナの元いた場所に現れたエヴァンスの刀が空を切る。
鎌の柄が飛ぶ。エヴァンスは鞘で防御する。

「《時間旅行》 遠ざかる7秒後の「遅エツ!!!」

蹴撃。エヴァンスが腕を盾にする。

ベキィッ

骨が折れる鈍い音。グラナの追撃が走る。

「 を実現！」

刹那の差でエヴァンスが消失し遙か後方に現れた。

「ハッ、自信満々に言って誤魔化そうとしたらしいが、お前の《時間旅行》とやらは欠陥品なんだろ？ 宣言した時の座標を直後に修正出来ないし、瞬間移動の座標にも若干の誤差がある

そうじゃなければ初太刀で俺様を殺せたはずだ」

「正解、流石ですね……」

「加えてあらゆる制限を無視した空間転移能力 使用する魔力は莫大、もうあと数回も使えねえ 違うか？ 【Fifth】」

「それも正解 やむを得ませんね……、《時間旅行》だけで仕留められたら一番よかったですよ 奥の手を使わせて貰いますよ」

「ハツタリか？」

「不正解です」

エヴァンスはいつも通りの、愉悦と狂気の入り交じった笑みを見せる。

「《時間旅行》 いまから2万年前、海底にあったこの場所を実現」

第29話：ありとあらゆる者（前書き）

“王国最強”と“半神”を相手に、貴様に何が出来る？ 王国

最強の震術師 スティア・クロイツ・マグナビユート

『BH計画』なんて物を、『人工半神（俺達）』を産み出したあんなを俺は認めはしないっ！ 半神 レイ・バークラント

認めるよ、『BH計画』は俺様の唯一の失敗だった 王 ザック
クフォード・WS・エクセリオン

第29話：ありとあらゆる者

「俺様と戦うか？」

ザックフォードは問い掛ける。戦いの意味を問う。

「勿論」

だが復讐を掲げるレイはそんなことで止まりはしない。

「そうか じゃあ仕方ないな……」

「“王国最強”と“半神”を相手に、貴様に何が出来る？」

ザックフォードは呆けたような表情になり心底呆れ果てた声を出した。

「まさかお前ら、俺様が“何なのか”も知らずに挑んで来たのか」

ザックフォードの姿がブレた。

「種族名は『サタンウォーグ』 許されし力は“ありとあらゆる者”」

「ッ……?!」

ザックフォードの姿がスティアの外見と全く同じモノになった。

「俺様はDNAレベルで細胞を変成させて他の個体と同一の存在と化すことが出来る 当然、」

《激怒する雷神》

「その力までも、完全に な」

「!?!」

スティアは光の術式を展開し雷撃を屈折させる。元は自身の震術、弱所は理解している。

「例えばこんなのはどうだ？」

ザックフォードの姿が翼を持った女のモノに変わる。

「行き渡る者だと……?!」

ブオツ!!

スティアとレイは突風に吹き飛ばされ壁に叩きつけられた。

「くっ……」

「こんなのはどうだ？」

長い髪の幼女、大戦時の【銃の王】の姿。それが光を帯びて超高速で術式が組み上がる。

(不味いつ……！)

術式組成の速度だけなら【銃の王】はスティアを遙かに上回る。

『瞬撃震』と呼ばれる詠唱はおろか“タメ”すらない震術、シャルツ・デイバイト・アークエッジはその達人。

《破滅の引き金》

(間に合うか……！)

光を放つ。だが《破滅の引き金》は不完全な屈折の術式を容易に突き破った。

『電速の魔剣』が跳び出した。

「レイ……?!」

《破滅の引き金》がレイの方へと逸れる。

『電速の魔剣』の纏う強い磁性で電流を自分の方へねじ曲げたのだ。

バチバチバチッ!!!

「レイっ!」

「こんなのはどうだ?」

柔らかな笑みを浮かべる女性の姿。

「アルム……?!」

「お願い、争わないで スティア」

「ふ……ざけるなアツ!!!」

「激昂、所詮はお前もただの人間だな」

ザックフォードが次に取ったのは、金の髪を持つ碧眼の男の姿。

「クゲルル・セント・エクセリオン……?!」

「“ありとあらゆる者”である俺様を殺せるのは地上最強の攻撃、『ドラゴンブレス』だけ」

人間（お前ら）には無理だよ」

一は十に、十は百に、百は千に、億まで重ねて全ては零へと還る

《万色を排除する閃光》

「……立てよ、生きてるだろ？ 加減はしたからな」

「貴……様……?!」

スティアはズタボロの身を起こす。レイは既に立てないようだった。

「貴様、なんだ？ これだけの力を持ちながらなぜ悪魔と戦わない？、か？ 思い上がるなよ人間 俺様はクグルルとの“契約”を遂行してやってるだけで別に人間に従ってんじゃねーんだ」

「っ……」

「……ついでだ、1つ昔話をしやろう そのままで聴いとけ

遙か昔、とある世界に1つの国があった」

「……？」

「王の名はゼウス 歴史に記されるなかで最初の5人の聖痕持ちの震術師を抱えたおそらく史上最強の国の王だ

そこでは聖痕を持つものを『天使』と呼んだんだがな

ある日、天使の1人が言った

『私は無限の時が欲しい』

そいつは研究に没頭して遂にその方法を……、不老不死の術を編み出した

悪魔化だ」

「?!」

「しかしそれを試みた震術師をゼウスは追放した

不服とした震術師は異議を申し立てたが、ゼウスはこれを一方的に退け反逆者としてその震術師を処断しようとした

そうして、戦争が起こった

たった一夜にしてその国は滅びたよ

そいつらの力は強大過ぎた」

「だから、なんだと言っただ」

「クグルルはそれを恐れていた 震術なんて得体の知れない代物は人の手に余る、だから俺様を王としてこの国に残した

同じ惨劇を繰り返さないように、とな」

「……近い話は私も知っているが、聖痕など所詮伝説に過ぎんだろう」

「なんだ、知らなかったのか？ ゼクウ・ファイアレスは『神の炎』^{ウリエル}の聖痕を持つてたぜ？」

「なんだと……？」

「シャルツ・デイバイト・アークエツジは『神の人』^{ガブリエル}、クグルル・セント・エクセリオンは『神に似た者』^{ミカエル}、いまの『神の薬』^{ラファエル}の所有者を俺は知らねーが

『サタンウオーグ（俺様）』という抑止力が無ければ同じようなことは充分あり得るのさ」

「バカな……そんなことが……」

「無い、とはいいい切れないだろう？ 実際にこの国で最強の震術師であるお前が、反乱に加わってるんだ 例えばゼクウ・フィアレスが生きていてこの街の中でお前と全力で勝負すればどうだ」

「、、」

「殺らねば殺られる、そんな状態でお前は誰かを巻き込まないように手加減出来るか？」

スティアに強く奥歯を噛んだ。返す言葉がなかった。

「《万色を排除する閃光》、見ただろ？ かつてそうしてあのレベルの震術大戦が実際に起こったんだよ…… お前達には抑止力としての俺の存在を黙認する義務がある」

「関係……ないっ」

レイ・バークラントは剣を握り締め、よろける身体を支えて立ち上がった。

「『BH計画』なんて物を、『人工半神（俺達）』を産み出したあんたを俺は認めはしないっ！」

「だから踏みにじるのか？」

横目にレイを睨んだザックフォードの視線は鋭い。

「認めるよ、『BH計画』は俺様の唯一の失敗だった あのととき王

国の戦力で劣勢だった戦況を引っくり返すには“人工半神”シンセティック・デミゴッドの他な
いと思つてた

俺様の計画では『四人の王』はお前らベリアルホープ四名のはず
だった

レグナ・ゼオングス、シャルツ・ディバイト・アークエッジ、ク
リーヴァ・ライオネル、そしてマスター

こいつらの出現は完全に俺の想定外

だからお前や他の半神が俺様に復讐するなら俺様は受けて立とう

だがこの有り様はなんだ？

騎士の拠点を震術師が強襲、震術師の研究所を騎士が強襲
近衛兵団を動かし情報を錯交させ都市機能を麻痺

それに巻き込まれただけの負傷者が出たか

罪無き王都の民を動乱に巻き込んでおきながら、お前は自分の復
讐を謳えるのか？

「っ……」

「俺様はお前らを殺すよ、レイ・バークラント それにスティア・
クロイツ」

足元の武器を、レイムの使っていた剣を拾い上げる。

「スティアの存在は今回のクーデターの表舞台に居ない

よって、首謀者レイがレイムを殺したのちスティアと相討ちになった

「こんなシナリオでどうだ？ お二人さん」

震術師と半神は、己の前に立つ生き物が人間よりも遙かに賢明で、狡猾で、残忍なことを悟った。

「死ねッ……」

第30話：慟哭する者（前書き）

私が、殺した……

半熟震術師？ リース

僕は君とは違うんだ 君は平気な顔して悪魔を殺せるけど僕は違う

【銃の王】 シャルツ・デイバイト・アークエッジ

だったら俺も殺せよ

BLADE

第30話：慟哭する者

『垣間見る地獄の業火』は散開型の術式だ。

本来『神へ還す火』すら上回る圧倒的な火力を持ちながらあまりにも強力過ぎてその力を一カ所に留めることが出来ずに爆散してしまふ。それが空を覆うまでに広がる巨大な炎。

ゼクウ・フィアレスの炎はそうだった。

リースのそれは、一端爆散した炎に屈折の力を加え燃焼のベクトルを再び一ヶ所へと集約。

術者が対象とした一点は一瞬で酸素を呑み込まれ、その場で燻り、追加された術式により外部からの酸素の供給を受けて大規模な爆発を引き起こした。

リースは不意に辺りを見回した。

爆発の煽りを受けてほとんど跡形もなく吹き飛んだ墓地。

墓場特有の据えた臭いは焼け焦げた炭化の匂いに取って代わっている。

「いない……」

シファ・バルバローネは悪魔ではない。契約者と呼ばれる悪魔を

呼び出しただけの、ただの人間に過ぎない。

そしていかに強力な震術師でも人間がこのレベルの火炎に耐えられるはずがない。

「私が、殺した……」

自分の産み出した圧倒的な炎の奔流を見つめて、リースは嘔吐した。

人間を、殺した。

戦っている最中は、相手が人間だという認識はほとんどないと言っ
てよかった。

それは多分それだけ人間離れした力の行使をシファ・バルバロー
ネが行ったからだ。

だけど、こうして打ち倒してからは、相手が人間だったという実
感が強烈にリースを苛む。

「かはっ……、けほっ……」

涙も何もかも吐き出してリースは口元を拭った。

「行かないと……レグナ達のところ……」

リースは立ち上がろうとして、地面が揺らぐのを感じた。

「何……、?!」

刹那遅れて黒い閃光が駆け抜けた。

僕はもう一度【銃の王】になる覚悟をした。

それは敵を全て殺す覚悟。

自らの両手を血に汚す覚悟。

血に染まった両手を『リトル』で見れば『シャルツ』はもう『リトル』に戻れなくなる。

だから情けはかけられない。それはリトルだから、

僕は引き金を引いた。

その手を誰かが掴んだ。

「やめる、シャルツ」

「……、どうして？」

レグナが、引き金を引かせぬようにシャルツの手を掴んでいた。

「君と僕は違うんだよ 君は平気な顔して悪魔を殺せるけど僕は違う

敵は全て殺す……！

そう決めないと……、1つでも例外を作れば僕はもう誰も殺せなくなる」

「こいつは殺しちゃダメだ……」

レグナのそれは穏やかだが、強い口調だった。

「なんでそんなこと言うんだよ…… 僕に戦えって言うておいて……

戦ってるんだ 悪魔を殺してるんだ
そのどこが悪いんだよ……！」

銃口は危うく震える。

「シャルツ…… 聴け

こいつは元々結界を張って人間を守ってたんだ

お前と何が違うんだ？」

「こいつは悪魔だ」

「半分でしかない」

「それでも…… ベリアルに、悪魔に関わったモノは全て殺すんだ
よ」

「だったら俺も殺せよ」

「え……」

シャルツの手からカイン&アベルが滑り落ちた。

「どづいつ……、意味……?」

「トト……」

「「?!」」

地鳴り……?!、いや……これは……

「シャルツ!」

「う、うん」

二人は咄嗟に手を取った。

刹那遅れて黒い閃光が城の中心部から空を貫いた。

「じれぬ」

何かが捻れて潰れる鈍い音、それから二人は地面を揺らぐのを感じた。

(そうか、たしかエヴァンスが地下神殿があるとか……それがあの黒い閃光で崩れだしたのか!?)

「ダメだ、崩れるよ……!」

ゴオオオンッ！！！

「っ……、レグナ 無事っ?!」

「ああ むしろあれだけの崩落でなんで俺達は無傷で……」

「無事……、サ?」

弱々しいその声はレグナ達の直ぐ近くの、岩盤の下から聴こえた。

「シーク、何処だっ!?!」

レグナは素手で岩盤を払い除ける。尖った岩が皮膚を突くがレグナはそれを顧みない。

「止すサ…… 俺っちはもう無理サ……」

「ふざけるなっ…… 死んで終わらせようとするなよ、
【ハルマ半神!!】」

「放つときなよ、レグナ どーせ

「なんであれだけの崩落で俺達が無傷だったと思う?! シークが
風で俺達を守ったんだよ!」

「え……?」

「クソっ…… 持ち上がらねえ……!」

いや、自力で這い出せる力がシークには残っていない。元より単に持ち上げただけでは足りないのだ。

「……下がって レグナ」

カイン&アベルが真っ直ぐに岩盤を向く。

「無傷で済む保証はないよ？」

「頼む」

引き金を引いた。45mmの圧縮震力弾が岩盤を粉々に散らせる。歩み寄ったシャルツは屈んでシークに手を添えた。

これは情けをかけるんじゃない……

自分はまだシャルツのままだ。

「……借りは返すよ 僕の治癒震術はそんなに強力じゃないけど一先ずは持つはずだ」

「さアて、とオ 最後はやっぱり勇者一行と最強魔王の大決戦……だよなア？ BLADE!!!」

「「!!!」」

咆哮のようなグラナの声で、伏魔殿は戦場へと還る。

第30話：慟哭する者（後書き）

あと1〜2話でストックが切れます

ラストバトル、カ入れたいけどモチベが低い

学校行つてるときのが書けるってどういうことだ……？

第31話：末路（前書き）

くたばれ ですかね Fifth エヴァンス

さアて、とオ 最後はやっぱ、勇者一行と最強魔王の大決戦……
だよなア？ BLADE!!! First グラナ

第31話：末路

(落ち着け……)

First グラナは水の底に立っていた。

(この水は能力その物ではなく能力によって象られ魔力によって再現された水だ…… となると《反魔法》は有効！ この水によって俺様が溺れ死ぬなんてことはありえねえ)

周囲全てが水でグラナの位置だけがぽっかりと空いている。

(だが周囲の水からかかる圧力がある、《反魔法》で水を弾き続けている以上はこの水圧から逃れる術もねえ…… だがこれもいまのところ問題は無エ)

試しに鎌を振るおうとしが莫大な重量にのし掛かられ動きが鈍い。『魂を刈る者』での突破は不可能だろう。

(ならエヴァンスはどうやって俺様を殺すつもりなんだ……?)

膨大な量の海水の壁。これはグラナの動きを縛りつけると同時にエヴァンスからの攻撃を防御している。

さつきエヴァンスの手にはたしかに刀が一振りのみだった。

あれがラーシャルの持っていたテストAMENT、『ムラマサ』でもこれだけの水の壁を貫く威力はないはずだ。 というか昨日今日あれを手にしただけの素人ではテストAMENTの力は引き出せない。

そして震術、魔術による攻撃に対しては《反魔法》は無敵。

(野郎は何を企んでやがる……?!)

グラナは胸の当たりにふと違和感を感じた。

「なんツ……、ゲホツ、が……」

突然の呼吸不全。グラナは圧迫感を感じて喉を掻きむしる。

「ちいっ…… 野郎……酸欠……かつ……!？」

それは呼吸を行う生物であれば逃れられない殺害方法。最強クラスの魔王であるグラナとて例外ではない。

『ようやく気づきました?』

水を伝って声が響く。

「エヴァ……ンス……!」

『魔術の使えない貴方にはこの状況を打開する術はない…… せい、苦しんで死んでください』

終わった。

Fifth エヴァンスの愉悦と狂気で構成された笑みが虚ろなモノに変わった。

(これからどうしようか?)

エヴァンスの目的はグラナへの復讐。ただそれだけ。
不必要に人間と争う気はないし、このままBLADEに斬られて終わるのも悪くはないかも知れない。

そんな風に考えていたエヴァンスの鼓膜が、ノイズに似た小さな声を捉えた。

『ゴエ……ティア……』

「？」

その声は水を伝ってエヴァンスに届く。

『テウギア……ゴエティカ……』

(これは……詠唱　?)

『パウロの……術……』

「ばッ……バカナッ?!」

『アマル……デル……! 七十二の、柱に、縛られし……大いなる
闇、よ……その力を、……我が前に、示……せ……っ

『!』

レメゲトン

闇属性の魔法が天地を貫き伏魔殿全体に激震が走った。

城全体を崩落させ、粉碎し、それでも止まらずに“闇”は天高く伸びて行く。

「よオ 俺が魔術を使えない なんぞ誰から聴いたんだ？」

「……………」

乗し掛かった落盤がエヴァンスに身動きを取れなくしていた。『時間旅行』を発動しようと試みるが、大量の水の召喚に魔力の大半を注ぎ込んでしまったためか上手く行かない。

見下ろすグラナと見上げるエヴァンス、勝者と敗者は視線を合わせる。

「………… 『反魔法』が、消えて、る…………？」

「………… ああ 俺自身が一度でも魔法を使うと消える 元々そういう制約の元に成り立ってた能力だからな」

「まったく、俺の無敵をぶち壊してくれやがって…… そう呟いたグラナの表情はどこか楽しげだった。

「久々に冷や汗かいたぜ エヴァンス」

「僕は冷や汗なんてもんじゃありませんでしたよ……」

諦念の過る笑み。手札を使い切って、それでも及ばなかった弱者の笑顔。

「……最後に何か言い残すことはあるか？」

グラナがカラミティを構える。

「そうですね……」

くたばれ ですかね。

ざんっ

「さアて、とオ 最後はやっぱ、勇者一行と最強魔王の大決戦……
だよなア？ B L A D E ! ! ! !」

第32話：原罪（前書き）

あーあー、おい セベル これスイッチ入ってるか？ 【炎の

森】のリーダー カイル・オックス

いえ カイル先輩はやっぱり変です…… 【炎の森】の構成員

でさる顧問震術師の息子 セベル・フォン・クロストウエイ

騒動を納めようともせずこんなところをフラフラしてるお前じゃないのか？ 王 ザツクフォード・WS・エクセリオン

ご冗談を、ちゃんと第2騎士団を鎮圧に回していますとも 王
国第二騎士団長 シルバリオ・ガーゼス

第32話：原罪

『あーあー、おい セベル これスイッチ入ってるか？』

『入ってるよ ってか王都中の人が聴いてるんだから真面目にやっ
てくださいよカイル先輩』

『俺こついうの苦手なんだよ やっぱスティアか誰かにやらせよう
ぜ めんどくせえ』

『もついいから早くしてください！』

『わかったよ ったく……、あーこちら【炎の森】のリーダー カ
イル・オックスだ

聴こえてつか？、ハゲ共』

『ちよつとカイルさん?!』

『黙れ 俺にやらせたお前らが悪い

あークーデターだとかで戦ってるやつら いますぐ喧嘩やめろ

ついさつき結界型の《地に墜ちた焰》の術式を設置した

効果範囲は王都の中全部

反応するのは一定以上の周波数の金属音と震術の発生音

チャリ乗ってるやつら、ブレーキ音で焼けるかもしれねーから今
すぐ降りて押していけ

ちなみに術式の威力の程は、』

カイルは片腕を振り上げた。
そこに、

ドゴオオン！！

直径20m程の火柱が天井を突き破って墜ちた。
カイルはそれを受け止め片手で握り潰す。

『と、まあこんなところだ
見えなかつたやつら』

君たちのことは非常に残念だが、焼け死んでくれ ちなみに【炎の森】諸君も攻撃対象に入ってるから注意しとけよ

この放送の終了直後に結界を起動させる、俺からは以上だ では
セベルくん』

『え そんなセベルくんからは何かあるみたいなフリの終わり方しないてくださいよ?! え、えつとじゃあこれにて放送終了します』

それから数分も立たずに、

ドゴオオン

何処かで爆発が起こった。

ドゴオオン

ドゴオオン

ドゴオオン

「【炎の森】……つてか俺のことなめてやがるな 騎士団のアホ共」

カイルはつまらなさそうに欠伸をする。

「え どうしていまのが騎士だつてわかつたんですか？」

「は？ 鎧の擦れる音がしただろうか？」

「……無属性の拾音震術ですか…？」

「そうだが……その顔なんだよ？」

「……いえ カイル先輩はやっぱり変です」

王国に三人しか居ない光属性の震術師、セベル・フォン・クロストウエイは思いつきり嘆息した。

拾音震術とは、その名の通り特定の音の振動を拾って術者に届ける術だ。

だがその効果範囲は本来そう広くない。火柱が落ちた場所はセベルの目算でザッと3kmぐらいだろうか。

「ほんとにはスティア・クロイツ・マグナビユートより強いんじゃないんですか？ 先輩って」

少なくとも王都を丸ごと包み込める規模の結界を、一撃必殺の威力を持たせて維持出来る術師などセベルは彼しか知らない。

「ありえねーよ ありゃ化け物だぜ」

「……そうですか？」

化け物 ゼクウ・ファイアレスを思い出して、カイルはふと空を見上げた。

あの空さえ赤く染める震術 、

「《垣間見る地獄の業火（One moment flare・イフリート）》か……」

「え なんですか？」

「なんでもねー」

「……シルバリオ・ガーゼスか？」

「ええ この有り様は如何致しました？」

シルバリオ・ガーゼスは室内を見渡して少しだけ楽しそうに言った。

雷撃に焼かれた痕のあるレイム・リーガル・アーカナイトの死体、刀傷と火傷の混在する近衛兵長 レイ・バークラントの死体、虫の息で横たわる王国最強の震術師 スティア・クロイツ・マグナビュート

そして、片腕のないザックフォード

「とりあえずスティアを医務室へ運んでくれ

「相討ちですか よくもまあ……」

「……なんだ？」

「いえ ただこの状況でも表情1つ変えない貴方に少しだけ恐怖しただけです」

スティアの腰を掴み自身の肩に引っかける。

「ふむ、それでクーデターの首謀者とやらはどちらですか？」

「騒動を納めようとせせずにこんなところをフラフラしてるお前じやないのか？ シルバ」

「ご冗談を、ちゃんと第2騎士団を鎮圧に回していますとも
カイル・オックスも動いたようですよ
暴動も時期に納まるでしょ
う」

「だといいな」

「……レイムのやつは死んだのですか？」

「ああ」

「加えてレイ・バークラントまでも……？ ククク…… 素晴らし
い 上の席が一度に2つも空くとは……！」

「……野心旺盛なのは結構だが、俺様の前で堂々とそういう宣言するのはどうかと思うぞ 王国第2騎士団長シルバリオ・ガーゼス」

「失礼 こつも簡単に第一騎士団長の座が手に入るのかと思うとつい嬉しくてね」

「俺様はお前にやると言った覚えはないが？」

「では他に誰か候補が？」

「そうだな…… レグナ・ゼオングスなんてどうだ？」

シルバの顔から笑みが消えた。

「ご冗談を あのような獣を王の懐に置くわけには行きますまいなにせあれは……」

「それ以上言うなよ シルバ」

全てはあのおときから始まったのだ。

死なない獣は追憶し、思い立ったように一人にしか聴こえない声で僅かに吼えた。

「殺してやる……」

放たれた声を聞き取って、レイ・バークラントは涙する。それは悔恨か、慟哭か、自身にも区別はつかない。

「殺してやるっ！！！」

逃がされたベリアルホープは、ただ吼えた。

「行けよ」、と自身の片腕を切り落としたザックフォードは言った。

落ちた腕が膨張し、レイ・バークラントの姿と同じモノになる。

「ここにあるのはDNAレベルでお前と同一の死体だ お前が姿を見せない限り生存を疑われる可能性はほばないだろう

なにせ現物（死体）があるんだからな」

「情けを……かけるつもりか……？」

「慈悲、と言って貰いたいね 神獣つてのは本来神の従者だからな

とはいえ神獣の根本は無干渉だ

俺様のやったことは“契約”つて度を超えてる…… ま、この腕は謂わばその罰だな

許せとは言わんし、俺様は死ねん、というか死なん 一先ずこれ

で手を打ってくねや」

第32話：原罪（後書き）

ほぼ直ぐに投稿出来る状態のストックが切れました

明日からは多分に更新ペースが落ちると思われます m ((

m

第33話：死闘、そして（前書き）

あれに刃神ぶちこむヴィジョンが見えないが……

B L A D E

因果律を制御 “波長”をコントロール 出来るだけ間隔を長く
して威力を極小化…… “屈折率” 領域は三角錐をイメージ、威
力を円形に逃がすように…… “乱反射”、“透過” 半熟震
術師？ リース

打つ手が……ない……っ
アークエッジ

【銃の王】 シャルツ・デイバイト・

第33話：死闘、そして

「First……！」

レグナはウルスラグナを抜き払う。

シャルツが少しだけ表情の落ち着いたシークの側から立ち上がり、落ちたカイン&アベルの片方を拾い、構える。

「《反魔法》が……消えてる……？」

グラナが薄く纏っていた黒いオーラが、ない。

代わりに、ゴポゴポと沸騰するに似た音を立てて膨張と減退を繰り返す闇の塊が宙に浮かんでいた。

「よオ 【青の断罪】」

「【刃の王】だ」

「ツレねえな 自分の正体ぐらいいい加減わかってんだろ？」

「……」

「どっいっことっ？」

眩くようなシャルツの問い。

「なんだ、テメエ…… 仲間にも話してなかったのか？」

グラナの表情が愉悦で僅かに歪む。

「そいつは人間の味方として召喚された魔王『青の断罪』を殺して、その筋組織と脳基の一部を移植された魔力を持たないプロトタイプの【半神】だ。だいたいおかしいと思わなかったのか？ そいつのあまりにも人間離れした身体能力

何のサポートもなく身体能力特化型のドレイクと互角に斬り結ぶ人間なんざ居るわけがねえだろ？」

「そう……なの？ レグナ……？」

「……ああ、そうらしい」

シャルツは戸惑うように視線をさまよわせた、が一度目を閉じて開いた時には迷いはもうなかった。

「あとにしよう 全部あいつを倒してからだ」

「スマン」

「つまらねえ」

グラナが鎌を動かした。

ガキンツ と高い金属音を立ててウルスラグナがその切れ味を防いだ。

（“距離の無視”を見切られた　？）

「シャルツ　サポート頼む」

「OK」

レグナが加速する。

10と少しあった距離が一瞬で詰まる。初太刀は右の袈裟斬り。グラナはそれを大鎌の柄で受け止める。鎌の刃で左の剣を牽制出来る絶妙の位置。

（無視　！）

レグナは左の剣を引き、突き出す。

グラナの姿が真横にブレた。合わせて突き出されたウルスラグナが真横に動いた。

（捉えた……！）

ぐるんっ

（なっ……？！）

鎌が回転した。右の剣を絡め取られてレグナの体勢が大きく崩れる。左の剣に回転した柄が命中し斬撃が真下に逸れる。

首筋に鎌の刃が滑る。

ぶおんっ！

「!?!」

それは空を切った。剣を弾かれた勢いを利用してレグナは身体を沈めたのだ。

「ちいつ!」

舌打ちと同時にグラナは低い姿勢のレグナに蹴りを放つ。刹那、

ドオンっ!!

「ガッ?!」

45mmの圧縮震力弾が肩口に直撃してグラナは仰け反った。なまじ蹴りだそうとした分、片足が半端に上がり踏み留まることも許されない。

一ノ太刀

その隙をレグナは逃さない。

「呑み込め」

「っ!」

咄嗟に斬撃を止め真横へと跳んだ。

『有罪の漆黒』
ギルティ・ブラック

漂っていた闇が急激に膨張し、先程までレグナ達が居た空間を“呑み込む”。

破壊ではない無音の消滅。

(闇属性……！)

全属性の中で最大の威力を持つ、消滅の術。

闇が収束しグラナの姿が視界の端に映る。

(ツ……不味い…… この位置は)

跳びながらレグナはウルスラグナを掲げた。

縦薙ぎの『距離を無視』した一撃によりその上から負荷がかかり

真下の地面に叩きつけられる。

「ッあ……」

短い悲鳴、追撃を振るおうとしたグラナを3発、立て続けのカイン&アベルの銃声が阻む。

「千年はええ」

グラナは鎌を片手持ちに変えてそれに向かって空いた片腕を突き出す。

闇が膨張する。

『悪魔の降誕祭』
アザゼル・イヴ

グラナを中心に十字の闇がシャルツとレグナを貫いた。

『鎧神』

『慟哭する者』

各々の防御術で闇の侵食を防ぐ。

「くっ……」

レグナとシャルツは『王』と呼ばれる最強クラスの破壊者だ。バスター
並の悪魔ならば単体で凌駕するし、魔王クラスでも一対一で互角に近い戦闘を行うことができる。

それが二人がかりで、未だにたった一撃を加えただけ。それも大したダメージではない。

レグナ達はグラナの攻撃を防ぎ切ってはいるが、常に全力の回避や防御を行っていて『傷がない』というだけで体力の消耗は凄まじい。

(今日だけで鎧神三発に刃神一発…… 相当キてるな)

レグナは瓦礫の影に身を寄せて荒い息を整える。

「強すぎ……間違いなくベリアル級だ、二人でこれはかなりベビィだね……」

「接近戦、しかねーな…… あれに刃神ぶちこむヴィジョンが見えないが」

「大丈夫 隙は作って見せる」

雷撃の術式が一瞬で幾つも編み上がる。

《破滅の引き金 重装機兵団^{レギオンス}》

無数の魔方陣を銃口として雷の弾丸が発射された。

「呑み込め」

《有罪の漆黒》

「ッ、」

絶え間ない連射に押されて闇が、貫かれる。

「ちいつ……！」

グラナは鎌を動かし突破してきた弾丸を弾く。

闇によって威力を削がれた弾丸は容易に捻れ曲がる。

キィイ

(何の音だ……?)

弾丸の嵐に僅かに雑音が混じった。刹那、弾丸が急に止み、

「刃神イ!!!!」

磁力術式により加速したレグナがグラナに向かって突撃した。

轟雷一閃、超速と刃神が合わさった比類無き一撃。

グラナはそれを正面から受け止めた。

『魂を刈る者』
ソウルイーター

“距離の無視”の能力を持つカラミティの『至近距離用』の絶技。

バチイッツ!!

交差、脅力の差からレグナは弾き飛ばされた。

(不味い……っ……!!)

疾走する。だが2発の刃神と3発の鎧神を放った疲労により一瞬
反応が遅れる。

「避ける！ シャルツツツ!!」

「え？」

距離を無視した一撃がシャルツツに牙を剥く。

「なんだかよくわからないけどそれを撃てばいいのよね？」

《垣間見る地獄の業火》

「……仕留めてない」

リースは『障壁^{リフレクション}』を発動する。シャルツとグラナの間には相当な距離があつたにも関わらずレグナは避けると叫んだ。

なんらかの中々遠距離攻撃の手段が存在するのだと推測。

ガリイツ！！

カラミティの斬撃を障壁が阻む。

爆炎が“闇”に吞まれて晴れて行く。

「なんだテメエは？」

「リースよ 初めまして」

《火炎の弾丸》

《火炎の弾丸》

《火炎の弾丸》

《火炎の弾丸》

《火炎の弾丸》

火炎系最初歩の術式がグラナを包囲するように浮かぶ。

(遠隔起動……?! かなりのレベルの震術師だな)

「いけっ!」

リースの命令で一斉に弾丸が飛ぶ。

「くだらねえ」

闇が幕のように広がり火炎を阻んだ。刹那:

《地に堕ちた焰》

「んだとっ?!」

垂直に火柱が墜ちた。

グラナは闇を伸ばすが膨張の速度より炎が速い。

ドゴオオン!!

「炎の王は高らかに謳う その軀を、その魂を、その骸でさえも滅ぼすために」

《垣間見る地獄の業火》

更に、追撃。いや こちらが本命

《完全なる……》

闇属性の上位魔術、《完全なる破壊》を起動しようとしてグラナは手を止めた。

(闇が……動かねえっ!!!?)

グラナの使う“闇”は常時発動型の術に新たな術式を付加させて形や威力を変化させる。5発の《火炎の弾丸》、《地に堕ちた焔》にはそれぞれ内部に光の屈折術式が組み込まれており闇を真下に向かって屈折させ続けて居るのだ。

「ッ……!!」

何かで防ごうとしたがグラナの視界には炎しかなかった。

「なんだ、魔王なんて言っても案外……」

恐怖に身がすくんだ。

生身1つで《垣間見る地獄の業火》を切り抜けて来たグラナの鎌が一瞬で首を刈れる位置にあったのだ。

横合いから4連射されたカイン&アベルの弾丸を弾き、かわし、鎌を振り上げる。

「はアッ！」

レグナが跳躍と共に背後からの一撃で鎌を止めた。 衝撃を受けた鎌がグルリと一回転した。

(しまっ……)

グラナが鎌を止めたとき、その刃は真後ろのレグナに向いていた。グラナが振り返ることもせず、に刃が迫る。ウルスラグナを身体との間に挟むがレグナは最低でも片腕が削がれることを覚悟した。

リースの投げた短剣がグラナの手の甲に突き刺さった。

「迫雷」

短剣目掛けて短い雷撃が放たれた。雷を受けて鎌の動きが鈍る。

「!!!」

レグナはウルスラグナを加速させた。

ガキイツ

鎌を打ち払うことに成功する。着地、レグナがリースの首根っこを引っ掴むのとグラナが体勢を立て直しレグナ達を捕捉し一閃するのがほぼ同時。

『許されざる者』

咄嗟にグラナが後ろに跳び、閃光がグラナとレグナ達を阻んだ。

レグナがリースを抱えてシャルツの方へ跳ぶ。

「あ、ありがと……」

「一人で無理すんな」

リースはコクリと頷いた。

(3対1……、エメトやシークは一人も殺せずか)

おそらくは『王』と同レベルの震術師の加入、それだけで攻撃のバリエーションは膨れ上がる。

《反魔法》のないいま長期戦は不利、グラナの出した答えは単純かつ明確だった。

「ゴエティア テウギア・ゴエティカ パウロの術 アマルデル 七十二の柱に縛られし大いなる闇よ その力を我が前に示せ」

全部纏めて消し飛ばす。

「ソロモンの術式?!」

「っ……シャルツ、間に合うか?!」

「わからない でもやってみるよ」

シャルツの左腕が光を帯びる。

『レメゲトン』

極大の闇が駆け抜ける。

「神は我が力なり　来い、ガブリエルっ！」

シャルツの背から生えた片翼だけの不完全な翼が3人を闇から守った。

だが翼はボロボロに食い荒らされ、純白の翼は闇色に染まっている。

「……初めて自分が聖痕持ちであることに感謝したよ」

散在していた瓦礫の山が闇に吞まれてレグナ達3人の周り以外はほとんど平地と化しといた。

あの魔術をまともに受けたら跡形も残らなかっただろう。

「な……なにいまの……？」

シャルツとグラナを交互に見て困惑するリース。

「全部あとだ　いまは…」

「待って」

レグナの言葉をシャルツが遮った。

「ティア テウギア・ゴエティカ」

「まさか……2撃目?!」

「どうする? もう一発防げって言われたら流石に自信ないよ……」

「……あたしが、やる」

「策はあるのか?」

「うん……出来るかわからないけど」

リースは目を閉じて思い描く。

(思い出せ……あたしに出来ること全て)

術式は光、彩るは絶対の防御術式。

「因果律を制御 “波長” をコントロール 出来るだけ間隔を長くして威力を極小化…… “屈折率” 領域は三角錐をイメージ、威力を円形に逃がすように…… “乱反射”、“透過”……」

光属性の本質は防御だ。威力を殺し、逃がし、壊し、反射する。リースは頭の中でそれら全てを組み合わせる。

「っ、ダメ……時間が足りない」

「ねえ」

「ちょっと黙ってて、いま

「全反射しよう」

「えっ……そんなの破られるに決まって……」

「サポートする、僕は術式の組む速さならスティアにも負けない君は形だけ作ってくれば細部は全部僕が作る、君はそれに思いつきり力を注ぎ込んでくれればいい」

「鎧神で衝撃を受け止める おそらく一瞬なら止めれるはずだ 先端部のベクトルが0になった瞬間になら、どうだ？」

「不可能、じゃないはず…… だけどタイミングがシビア過ぎるよ」

「腹くくって決めて見せろ」

「……、わかった」

「来るぞ……！」

《レ メ ゲ ト ン》

「オオオッ！！！！」

『二ノ太刀 鎧神』

その真後ろでシャルツが作り出す複雑な術式が子供の落書きのように幾重にも重なり、巨匠の絵画のように立体を象る。

「いまだ！」

「命ずる、反、射、せよっ！！！」

闇が停止する。反射の術式と拮抗する。

「ダメだ…… パワーが足りない、向こうの威力が高すぎるんだ……」

どうする？ 『許されざる者』じゃあ反射術式まで壊してしまう。『慟哭する者』じゃあ凌ぎきれない。ガブリエルの雷撃でカバーを…… いや、いまから撃てる瞬撃系の術式じゃあ全然威力が足りない。羽根で、一撃目を凌げたのが既に奇蹟。反射術式にガブリエルを、他人の震力なんて混ぜたら余計に威力が落ちる。

(打つ手が……ない……っ)

「誰が神のようになれようか？ 来たれ、光の長」

「「?!」」

「土塊は土塊に、有は有に、無は無に、歪められたあらゆる物をあ
るべき場所に戻せ」

拮抗していた闇と光の中心で急激に光が増大した。

「て……メエ?!」

膨大な量の闇が、その流れを反転する。

「ちィッ!」

グラナは新たな闇を作り出し自身の放った闇を受け止める。膨大な負荷がかかる。

「ッ……」

空間が捻れる。闇同士の衝突により構成する物質が消滅しつつある。

闇が弾けた。

「がああっ!!!」

膨大な量の衝撃波の渦がグラナを呑み込む。だがグラナはそれに耐えきった。

「クソがアツ! そういうことかよっ 俺達はそいつの」

グラナはそこで言葉を切った。

「オオオツ!」

反射を追うように駆け出していたレグナ・ゼオングスが目前に迫っていたから、

「っ、ノ」

「終ノ太刀 八百万ノ神」

ツイノタチ ヤオヨロズノカミ

レグナの剣が青い光を帯びる。

グラナが漆黒を得た鎌を振り上げる。

「上等だ、テメエも銃の王もそいつも、纏めて消し飛べっ！！！！」

『魂を刈る者』

拒絶のテストAMENT、ウルスラグナの青。

復讐のテストAMENT、カラミティの黒。

衝突。

2人と2つの武器以外の全てがその場から弾け飛ぶ。

2つの威力は完全な互角だった。双方とも刹那でも力を緩めれば、死ぬ。

だから、

「許されざる者」

それは、ウルスラグナに重なるように撃ち込まれた。本来そんなことをすれば『魂を刈る者』と『許されざる者』に挟まれたウルスラグナは砕け散るだろう。

『八百万ノ神』

前方に対しては“刃神”を、後方に対しては“鎧神”を。表裏の能力の双解放によって刃神と許されざる者の2つの威力は重なった。

そして、

ビキビキ……びしい

「?!」

青い閃光の一閃を受けて、カラミティは砕ける。

ズバァン!!!

レグナ・ゼオングスは地面を踏み締めた。崩れそうになる身体をその両足でしっかりと支える。

「勝…つた……」

それは油断、だとグラナは思う。半身を裂かれた程度で最強クラスの魔王であるグラナは死にはしない。まだ僅かな余力がある。

グラナは一瞬のうちに地を蹴った。レグナが反転する。シャルツが身構える。どれも、余りにも遅い。

だから、グラナは片腕を突き出す。

《完全なる破壊》

「退けっ」

それはシャルツを目掛けて放たれたモノではなく、

「万色を排除する閃光」

刹那遅れて、白い炎がその場に立つ者を焼いた。

第33話：死闘、そして（後書き）

更新遅くなるって言った途端にPVがっくり落ちた

これが本来の数字なんだろうなあ

第34話：“支配者”（前書き）

たった6年程度でもう忘れたのオ　えらく薄情じゃないイ？　ねえ
“ゼオン”　　???

レグナ……　刃神はあと何発行ける……？　【銃の王】シャル
ツ・ディバイト・アークエッジ

やけに手に馴染む……　　B L A D E

第34話：“支配者”

「アハハハハッ！ 遂に手に入れたわア この力にこの身体ア、もうさいっこうたまんない！！！」

白色の閃光が全てを包み込む中でただ“彼女”の高い笑い声が響く。

その場に立っていた者は焼き尽くされた。

ただし、

グラナに突き飛ばされて、転げたレグナとそれに手を伸ばして疲労感から足を纏れさせたシャルツ。

その場に“立っていた”のは、グラナ1人だけだった。

「どづいっ……ことだ……」

虚ろな表情でレグナが呟く。あまりの高温に焼かれてプラズマ化する周囲の物体、レグナとシャルツの辺りだけが不自然に焼け残っている。

「なんでなんだよ……?」

レグナには、目の前の光景がどうしても信じられなかった。

「リースっ!!!」

恍惚に似た表情でレグナ達を見下ろすリースの姿を。

「あらア 生きてたのオ? ああ、引きこもりちゃんの“闇”かしらア? ほんつとにめんどくさい力ねエ」

「お前……、?!」

レグナはハッ、とした。

それは、聴いた覚えのある口調だった。

いつ ?、6年前に。

どこで ?、王都で。だ。

「たった6年程度でもう忘れたのオ えらく薄情じゃないイ? ねえ “ゼオン”」

その瞬間、半信半疑だったレグナの思考の全てが繋がった。

レグナのフルネームはレグナ・ゼオングスだ。かつて、彼のことを一度もレグナと呼ばなかった女がいた。

彼女は、はじめて顔を合わせ名乗ったレグナにこう言った。

“あんたはレグナじゃないわア”

いまになってレグナは思う、恐らく彼女は知っていたのだ。
人間の味方であった『青の断罪』を殺し半神とテストメントに作
り代えた人間の罪を。

その女は自らを“支配者”と称した。

その名はある大悪魔の死と共に意を歪められ、呼び名をそのまま
にこう表された。

M a g i c m a s t e r 『本の王』^{マスター}と、

「マス……、ター……？ どうして……死んだんじゃ……？」

「そうねエ 死んだわア、だけどオ、このあたしがあんたらみたい
なクソと一緒に仲良く勇者ごっこした意味をよく考えなさいよオ？」

リースの顔で、リースの身体で、リースの表情で、『本の王』は
嘲る。

「肉体の死を……超えたのか？ どうやって……」

「さアて、どうやったのかしらア？ ルシフ・エル・ウィンザード
は、ねエ」

レグナの思考にルシフの言葉が過った。

“まだ人間のつもりなら ”

「っ……悪魔化……?!」

「正解よオ あたしはあのときぶっころしたベリアル之魂を使つて自身の魂を悪魔化したのオ

でエ、この“死なない魂”でシファ・バルバローネの天使化した肉体を乗っ取つたのよオ こいつとおんなじようにねエ！」

人間、シファ・バルバローネを殺したという罪悪感。

3発の《垣間見る地獄の業火》やその他の多数の術式の行使による力の消耗。

何より《レメゲトン》を反射した極大の反射術式。

消耗した魂への侵入は彼女に取って容易だった。

「にしてもベリアルもアホねエ 【青の断罪】の仇を取りに来たのに、そいつに斬られるし自分の魂は利用されるしイ、間抜けとしか言い様がないわア」

「……っ」

「なにその顔オ？ まさか知らなかったのオ？ 魔界は広大、こんなチンケな世界なんか“72柱”クラスの悪魔が盗りに来る意味なんてないよオ その証拠にそれまで出てきてた悪魔共はベリアルを恐れて逃げて来るような雑魚ばっかだったわア」

「なんで……リースなんだ？」

「あらア 知らなかったのオ？」

マスターは両腕を真横に突き出した。

「誰が神のようになれようか、」

呟いた瞬間に、マスターの背から12枚の翼が爆発的に伸びた。
“光”が彼女を包み込む。

「神に似た者よ こいつ」

「《神に似た者》の聖痕……?!」

「そつ 最強の震術師クグルル・セント・エクセリオンと同じ力の持ち主ねエ」

「さアてエ…… 余裕の表情で首を気だるそうに回す。」

「そろそろいいでしょオ 死ぬウ？」

《万色を排除する閃光》

「神は、我が力なり ガブリエル」

「ああ、そういえばあんた“神の人”だったつけエ 炎と雷、生と死の支配者 解放すれば《万色を排除する閃光》も防げる訳ねエ」

白い炎が翼と雷撃の盾に阻まれる。

「自分の身を盾にすれば、ねエ」

シャルツはがっくりと膝を折った。

「レグナ…… 刃神はあと何発行ける……？」

「とつくに打ち止めだ……」

「どうする……？」

「考える、考える考える考える考える考える考える考える」

『神に似た者』 最強の聖痕

同じ天使の力でも僕の『神の人』じゃあ歯が立たない。

レグナはもう戦えない。こんな場所じゃあ増援もあり得ない。

僕の手だけでなんとかしないと……

「まっ もう一発撃つたら死ぬでしょオ？」

《万色を排除する閃光》

「死の……、」

シャルツの隣を誰かが駆けた。

「《偉大なる剣》……！！」

翡翠の刃に白い炎がねじ伏せられる。

「へへっ……ざまア……見るサ」

ザクッ

地面に剣を突き刺してシュークが荒い息を吐く。

「寄越せ……」

「……？」

「《機械仕掛けの神》って言ったか？ そいつを寄越せ 俺が使う」

「だけど「グダグダ言っつな 生き残るぞ……！！」

「……わかったサ」

機械剣がレグナの手に渡る。

「使い方は 「いい “知ってる” みたいだ」

トランス エクセリオン

《機械仕掛けの神》が20m超の大剣に可変した。

「な……」

「オオオツ！！！！」

レグナはそれを横薙ぎに振るう。

「因果律を制御　透過せよ」

リースの身体を刃が“透過”する。

「トランス　ヴァジュラ」

エクセリオンが分解され無数のチャクラムに変じ、飛来する。
同時にレグナは間合いを詰めるべく跳んだ。

《六柱障壁》

ガガガガガッ！！！！！！

チャクラムが壁に突き刺さる。
硬い障壁にヒビが入る。

「トランス　」

上段に高く“残り”を振り上げる。

「エクスカリバー！」

ヴァジュラが消滅しエクセリオンに比べれば圧倒的に小さい1mほどの剣が現れる。それを障壁に向けて一閃した。

サクツ と軽い音がして障壁は容易に裂けた。

「ちっ なんて武器っ……………」

マスターがバックステップでレグナと距離を取る。

《魔弾の射手》

それと呼応して翼から無数の光弾が分離する。

「飛べっ！」

360度を完全に包囲した光弾がレグナに向かって飛ぶ。

「トランス イー吉斯」

それら全てが、速度を失い、腐って、落ちた。

「無力化の盾……………神器クラスのアイテムをポンポンと…………… いかげんに、消えるオツ!!」

三つ首の赤い鱗を持つ竜の首だけが召喚される。

(“赤き竜” 帝国の神話に登場する古の神獣王……………!)

超高压のプレスが口内で圧縮され

「僕もこれで打ち止めだ……………あとは任せるよ」

《神の投げた槍》

シャルツが発生させた雷に撃たれて軌道を逸らされた。

「何をやってる 軌道修正、さっさとあのアホを」

「トランス アスカロン！」

巨大な剣がその首を引き裂いた。

「ッ……、魔竜殺しの剣っ……」

(この感覚、やけに手に馴染む……まるで何年も昔から使ってたような……『青の断罪』はこれを知ってるのか？ いや、この感覚は……)

よっ やつと会えたな？

「?!」

第35話・拒絶する（前書き）

おいおい、俺のでもあるんだぞ、それ　もっと丁寧に扱えよ
???

鎧…神…？　　【銃の王】シャルツ・デイバイト・アークエッジ

拒絶する　　BLADE

“力の解放を続ける”　　マスター

第35話：拒絶する

（誰だ、お前は）

レグナは炎をイージスに変わせて防ぐ。

わかってるだろ？ このままだとお前は勝てない

“神に似た者”の起動率はまだ40%程度、徐々に上がって来てる
6割りまでいけばもう人間に手に届く範囲の外だ

（だから、どうしたってんだ？）

垂直に落ちる震術の雷を回避する。同時に《機械仕掛けの神》を
『ゲイボルク』に変わせる。
投擲、光の翼がそれを弾き飛ばす。

代われよ 俺がやってやる 一瞬だぜ？

（知るか……！）

魔弾の射手、さっきのモノより遥かに弾数が膨れ上がって行
く。

（起動率とやらが上がってるのか……！）

トランス イージス

無力化の盾、障壁で攻撃を防ぐのではなく近づく物体の攻撃力を攻撃することで絶対防御を成す神器、それでも、

(消しきれねえっ……)

ガゴオンツー！

「っ……」

おいおい、俺のでもあるんだぞ それ
もっと丁寧な扱えよ

イージスで威力が落ちたとはいえ魔弾の直撃、それで

「なんとも……ない……？」

まったく、じれってえな 退けって

頭の中で声がまるで音叉のように反響を続けて、急激に意識が捻れた。

「っ……なんだっ……？！」

あまりの痛みにレグナは剣を手放して、頭を抱えてしまう。

その隙に更に圧倒的な量の魔弾が迫る。

レグナが顔を上げた。

「拒絶する」

その一言だけで全ての魔弾が停止して、消えた。

「鎧……神……?!」

シャルツが呟く。どうして、ウルスラグナは鞘に納まったままなのに……

万色を排除する閃光

圧倒的な破壊力を持つ白色炎が周囲の全てを吹き飛ばす。

「拒絶する」

レグナに届かずに炎が消失する。

雷神の弓矢

無数の雷撃の矢が光速で放たれる。

「拒絶する」

失速し矢の形を保てなくなった雷が霧散する。

赤き竜の王

三つ首の竜王が召喚され、ブレスを放つ。

「拒絶する」

地上最強の威力を持つとされるドラゴンブレスでさえも無力化。

「なによ それエッ」

「“拒絶”だよ」

レグナは腰のウルスラグナを抜く。

「ウルスラグナ、ね 俺の力を結晶化させて剣の形に集約、発想はいいが所詮は人間の作った武器だな オリジナルからは数段劣る」

乱雑に、投げ棄てた。

「お前……?!」

「魔王レヴィアタン・グナスファルガ 親しいやつは“レグナ”って呼ぶけどな」

にやけるような薄い笑みを浮かべる。その表情は、

「こいつの“元”だよ」

あきらかに悪魔のモノだった。

レグナは地を蹴った。

「グングニルの槍」

マスターの背の12翼が1本の光の槍と化す。

(グングニルまで出せるのか 大分起動率が上がってるな……)

さて、100パーまで行ったときに人間の“皮”が持つのかね？

レグナは片手を槍に向かって突き出した。

「互いに媒体が人間じゃ苦勞するなあ ミカエル」

拒絶する。

その一言で光の槍が消え去る。

「まあ、俺の方がオリジナルに近いのか」

ガッ

予備動作なくレグナが加速した。マスターの喉元を一瞬で掴み地面に叩きつける、寸前でその手が止まった。

「テ……メッ」 邪魔をするなッ

「!!--」

12枚の翼が展開してレグナを吹き飛ばした。

「ぶざけんなよ…… “邪魔をするな”ってそりゃこっちのセリフ

だつての」

光の12翼、物質化された“光”の性質を持つマナの個体。大気を薙ぎ払い、物理を無視して宙に浮かぶ力を持つ秒速30万kmで噴出する翼。

それを受けたというのにレグナは無傷だった。

たんつ、と軽く着地すると大気を“拒絶”して高圧をかけた空気の弾丸を生み出す、それを弾こうとしてレグナは手を止めた。

シャルツ・ディバイト・アークエッジがレグナに銃を向けていた。

「何の真似？ それ」

「冗談のように『レグナ』は両手を上げる。

「仲間が死んで終わりなんて……、そんな結末は誰も求めてないんだよ」

「……ヘエ 面白いな じゃあどうするつもりだ？ 現状の脅威は間違いなくあれだぜ？」

「つ、つ、」

「既に『神に似た者』の起動率は7割を超えてる 現実を見るよ、さもないとお前も死ぬぞ？」

ふざけんなっ

お前は刃だ。刃に感情は要らない。斬り伏せる。その身体を返り血に染める。その眼に肉塊だけを映せ。その力を破壊にのみ使え！

頭の中で無数の声が聴こえてレグナは額を抑えた。

小さく息を吸い込み、

黙れエツ!!!

吐き出した。

(っ……これが悪魔の破壊衝動ね……)

たしかにこりゃきつついわ……

一瞬でも氣い抜くと持ってかれそうだ

けど……、やれる。

身体の底から力が溢れてくる。

「……シャルツ、ミスったら俺を殺せ」

「！レグナっ」

グングニルの槍が飛来する。

レグナはそれに向かって片腕を突き出した。

『機械仕掛けの神』のときと同じだ。使い方が頭の中に直接流れ込んで来る。

「拒絶する」

槍は弾かれて消え去った。

この能力は鎧神と同じだ。空間結合の拒絶。空間そのものの繋がりを断絶する能力。

どんなに強大な力でも伝動する媒体が備わっていないから無力化される。

ただ鎧神と違うのは

「拒絶する」

後方の空間を拒絶。阻まれた空間に弾かれて、レグナは加速した。

(速いわねエッ……！)

拒絶出来るモノに、制限がない。限界値が存在しない絶対の防御能力。

(万色を排除する閃光、雷神の弓矢、赤き竜の王、グングニルの槍

“拒絶”とやらは全部防ぎやがったわア　ならア……！)

障壁。障壁。障壁。障壁。障壁。

無数の壁を創成する。

「拒絶する」

ベキベキベキッ！！！！

「ツカナ……一撃イツ?!」

間合いが詰まる。

(迎撃の術式を……何をすればあの拒絶を抜けられる……?!)

マスターは白い炎を地面に向けて放った。

超高温を受けて土が融解する。

足場が消失、空中のレグナの着地点が消え失せる。

「拒絶する」

ダンッ

「なっ……?!?!」

平面形に空間を拒絶して足場を……、

ガクンッ

「!」

「ッ……」

ダンッ

(いま飛ぶまでに瞬間に一瞬体勢が崩れたア……? 結論は、あれ

は持続時間が短い！ 跳躍まで平面の拒絶を保てなかった、ならアツ！（）

『神へ還す火』

「拒絶する」

青い炎が見えない壁に弾かれる。

「力の解放を続ける”！」

しかし弾かれた炎は消えずに周囲の酸素を巻き込んで燃焼を続ける。

やがて、拒絶の防御を無くしたレグナが超高熱の青い炎に包まれた。

「さてエ 次はあんたねえ シャル 「おいおい 気が早いな トドメも刺さないうちからもう次か？」

「クリメイション 火葬”、その名の通りに対象を灰を通り越して塵と化すそれを、レグナは突き抜けた。

「そっか………そっいやあんたア………元々魔封剣使いだっただわねエ」

レグナの手には炎属性の魔封剣があった。

「あたしの負け、ねエ……」

この距離ではレグナの刃がその首を断つまで、おそらく一瞬もかからないだろう。

だからこそ彼女は切り札を見せびらかす。

「だけど、どーするのオ？ この身体ごとあたしを殺す？ あんたにそれが出来るわけエ？」

時間だ。彼女は時間が欲しかった。『神に似た者』の起動率は着々と上がりつつある。いまはおよそ9割ぐらいだ。

それはインターネットからのダウンロードをイメージするといい。100%になるまではその力を本当に自在に振るうことは出来ないのだ。あと数十秒の時間さえ稼げば、最強の天使『神に似た者』の力がほぼ完全に手の内に入る。

そうなれば、彼女の勝ちだ。

「拒絶する？ 魂に関する知識なんてあんたにあるのオ？ 本来の魂とあたしの区別なんて出来るのオ？、ねエ？」

勝てる。彼女は確信していた。

たった1つの綻びを見落として。

「……済まない」

レグナの低い声が鼓膜を揺らす。

「あ？」

謝罪。その意味が出来なくて彼女は一瞬呆けた。
まさか、この身体を斬り殺すつもり……？

そう思考して彼女は綻びに気づく。

(こいつ……?!)

生まれた瞬間に誰もが魂には記号をつけられる。

名前だ。言霊と呼ばれるその力を標にして魂は形を変える。震術の属性は名前に左右されるという説すらある。レヴィアタンの知識がそこまで知っている。

だがリースの魂は眠っている。リースの名ではマスターの魂を区別出来ない。

だから、レグナは

「アルカディア・WS・エクセリオンの存在を、拒絶、する」

彼女の名を呼んだ。

第36話：戦いの終わり（前書き）

そう…… 覚えてて、くれたんだ…… 【本の王】アルカディア

ほう…… よもや人間がグラナを破るとは我々の誰もか思いもしな
かっただろうな ????

せっかくだから俺にエグくサクツとやられとくか？ 【拳の王】

クリーヴァ・ライオネル

あたしの中で誰かが…… リース

限界……か BLADE

お前は消えるな、レグナ “ありとあらゆる者”

第36話：戦いの終わり

アルカディア・WS・エクセリオン

クグルル・セント・エクセリオンの実娘にして『穢れ名の姫君』と呼ばれた王国の姫。

彼女は天才だった。聖痕以外のクグルルの全ての才能を受け継いでいた。

それが、幸運だったのか、仇となったのか、

幼少の頃に誘拐され暴行を加えられた際にその力を暴走させて実行犯を皆殺しにした。それからの彼女の扱いは、皇女ではなくただの爆弾だった。暴走させないように、みな一様に彼女を恐れた。

不安定、だったのだ。彼女の力は。

クグルルの絶大な力を受け継ぎながら、それを制御する聖痕がない。

そしてのちに現れたザックフォードがクグルルの長男だと判明し、彼女は王国を逐われた。

恨みしかなかった。なぜ？ どうして？ 泥を啜らざるを得ないような空腹と貧困の中で彼女は考える。私は王国を逐われるようなことをしたのだろうか？

やがて彼女は病にかかる。必ず死に至る不治の病。それがベリアルとの戦いの2年ほど前だ。

このまま死んでなるものか

焦る彼女は古文書にあった1つの秘術を完成させる。

魂の悪魔化、他人の身体を乗っ取る術。

目をつけている肉体は既にある。半天使、シファ・バルバローネの身体だ。だが1つだけ障害があった。魂を悪魔化するには強靭な悪魔の魂が必要なのだ、だから“暴君”ベリアルが存在に彼女は驚喜した。彼女は王国戻る。言葉使いから容貌まで何もかもが変わった彼女をアルカディアだと気づいた者は誰1人居なかった、はずだった。

ああ そういえばそんなだったわねエ……あたしの、ほんとの名前

「6年前にあんたの前で、名乗った覚えはないん……だけ……どオ……？」

「覚えてるよ…… 20年も前のことだが」

20年前、医者にも手の施しようのなかった原因不明の激痛（いま思えば悪魔の細胞を埋め込んだ拒絶反応だったのだろう）をその小さな掌で治めてくれたのはそんな名前の小さな女の子だった。

「そう…… 覚えてて、くれたんだ……」

不意に彼女は憑き物が落ちたような笑みを浮かべた。それは怒っていない、嘆いていない、ましてや狂ってなどいるはずもない、“ただ”の笑み。

シユウ……

何か溶けるのに似た音がして、リースの身体から細い煙が立ち上った。

さよなら……

どちらからともなく彼らは呟いた。リースの身体は土に横たわった。念のために脈を取るとしっかりと鼓動を刻んでいる。目覚めるのも時間の問題だろう。

不死と化した魂は穢れが抜け落ちて、たったいま死んだ。

「ほう…… よもや人間がグラナを破るとは我々の誰もが思いもしなかっただろうな」

悪魔の声、レグナは咄嗟に剣を引き抜き声のしたほうへ振り返った。が、圧倒的な疲労感がそれを阻害し倒れ込む。

「止めよ 最早互いに戦う力など一片も残ってはおらんだろう？」

悪魔は驚くほど敵意のない声で言った。

姿、形こそ違うがそれはレグナが一度対峙した悪魔の仕草と相違なかった。

「Fourth エメトか……？ 生きてたのか」

「我はEMETHの魔術師などと呼ばれて久しいがその本懐は“死^ネ体行使術”にあるのだ 最も鞍替えしたばかりの慣れない身体では満足に動けもしないがな」

「そうか…… あんたは『屍喰らい』の魔王なのか」

エメトは頷いた。

『屍喰らい』とは死体に乗っ取って扱う種族だ。そのせいで彼らの集団に襲われれば戦場から死体が消えるという奇怪な現象が起こる。

その本体が彼等の操る身体に刻み込まれたEMETHの文字であることを知る物は極めて少ない。

「ラーシャルやエヴァンスも死に、7人居た魔王も最早我1人

人間と戦ったところでタカが知れているだろうし、グラナを失ったいま我に戦う意思も存在しない

我と同胞を魔界へ帰すと約束するならば、我が説得するが、どうだ 我と取り引きせぬか？」

「んなこと言っても……お前らを呼んだやつはもう居ないんだし……」

エメトは横たわるリースを指す。

「その娘はどうだろうか おそらくシファ・バルバローネの魂に内蔵されていた力が大量に残っているだろう、加えて『神に似た者』」

という加速器付きだ

送還の術を使える可能性は高い」

「……わかった こいつが起きたらもう一度同じ話をしてくれ」

「かぁー またエグいぐらいボロボロだなあ ブレイド せっかくだから俺にエグくサクツとやられとくか？」

ズタボロの僕達の前に【拳の王】クリーヴァ・ライオネルが現れ、エメトの説得に応じなかった悪魔を殲滅して、リースの目覚めを待った。

やがて、目を覚ましたリースはほんやりと視線をさまよわせてそれからレグナの顔を見た。

「大丈夫か？」

柔らかい声でレグナが訊ねる。

「うん…… だけど……」

リースはゆっくりと半身を起こし目尻に指をやった。

「あたしの中で誰かが泣いてた……」

ホロリと一粒だけ涙が溢れた。

リースが大多数の悪魔を送還することに成功しボロボロの身体をクリーヴアに引き摺られてレグナ達はヴァルクリフに戻った。

大陸間を隔てる海はクリーヴアの持つテストAMENT、ミヨルニルの物体の結合能力を使って水面の空気を固体化し渡った。

帰還。送還の行使による大多数の悪魔の消滅。

その日、ヴァルクリフは沸きに沸いた。

シャルツは自分が【銃の王】だったことを街人に開かし、“怠け者のリトル”として改めて受け入れられた。

みんな、シャルツが突然居なくなったことへの心配のほうが大きかった。

宴は幾日も続き、人々は平和を噛み締める。

そして、

レグナが、倒れた。

医者の診断では下半身の神経が丸々ぶつつりと切断されているらしい。

半身不随。戦人としての終わり。

「限界……か」

だけど重要なことはそんなことではない。

違和感はずっと感じていた。最初に感じたのはベリアルとの戦い。20歳を過ぎたあたりからより一層違和感は酷くなっていった。そしてそれ以来戦闘の時に意識した以上の力を引き出せたことがあった。

ドレイクとの戦いが、それだった。

グラナとの戦いで見せたのは謂わば蠟燭の最後の輝きだったのかも知れない。そして遂にレヴィアタンが、レグナの中の悪魔が意識の表層に現れた。

悪魔の侵食、25年の歳月を経てゆっくりと増殖した悪魔の細胞がレグナを食らっていたのだ。

力の対価。それが早すぎる寿命。

「普通に生きても30……までは持たないかな」

薄ら笑い。死にたくない、と考えたことはなかった。殺すには覚悟が要った。死線を潜り抜ける戦いが全てだった。

この程度で済んだら安いモノだ。

レグナは思う。充分に生きた。なのになぜだろう。

死にたくない、と考えたことはなかったはずだった。ただど考えてしまった。生きたい、と……

最早悪魔の胎動さえ感じ取れる。動かない下半身の悪魔化がはつきりとわかる。

魔王レヴィアタン、この世界に伝わっている魔界の伝説の中で7人の魔王の第4位とされる、大悪魔。

かつて人間が裏切った悪魔。身体を切り刻まれてウルスラグナという剣とレグナという半神に詰め込まれた悪魔。

人間を恨んでいるだろう。これを解き放つてはいけない。

レグナは、死ななければいけない。

「はぁ……」

レグナは一度大きく息を吐いた。ウルスラグナを抜く。自分の首を断つのは意外に力を入れ辛い。

「約束、守れなかったな……」

結婚しよう。って言ったのに……

レグナは剣を振り抜いた。

「諦めるのはまだ早いんじゃないか」

グチュ 増殖した“なにか”の細胞がウルスラグナを阻んでいた。

「王、ザックフォード……?」

「ああ 王様ならクビになった」

あっさりとザックフォードは言う。

「『BH計画』を中心にした人体実験が露見してな 引きずりおろされたわ」

「……俺に何の用だ?」

「堅いねえ おたくは相変わらず」

やれやれ と言った表情を作るとザックフォードはレグナの腹辺りに手を添えた。

「わりい ちょっと寝てけ」

唐突にレグナの意識が飛んだ。

「もしもし、聞こえるか? レヴィアタン」

お? なんだ、お前は

「いまからお前の肉体を再構築するから、お前 そっちに移れ 出来れば魔界への門も開いてやる」

「この世の全ての生物である“ありとあらゆる者”ならばそれが出る。」

バカかお前は　んなことしたら肉体だけ貰ってお前と人間を殺しておさらばに決まってるんだろ

「やってみろよ　その前に俺がお前を滅してやるよ」

、、、、お前　サタンか？

「……………どうする？」

どーりで『三つ首の赤き竜の王』なんて伝説が伝わってるはずだ、OK　ただし肉体が不完全ならお前に殺られる前に殺れるだけやってやるぜ？

「行くぞ……………！」

神獣　、　力を持つモノに相応の願いを叶える存在。

道を開き閉ざす力を持つセラフィム

滅ぼし肥やす力を持つワイバーン

そして、進化と減衰の力を持つサタンウォーグ

「お前は消えるな、レグナ」

お前はクグルルとは違う。かつて悪魔との戦いの際に、ミカエルを100%で起動して弾け飛んだクグルルと同じ運命を辿ってはな

らない。

同じにさせはしない……！

自身の存在をかけて神の従者は契約を果たす。

再びレグナが目覚めたときには誰も居なかった。ザックフォードも、レヴィアタンも。

相変わらず半身は動かない。だけど悪魔の疼きも消えていた。

(ザックフォードが……何かしたのか……?)

「レグナ いきなり病院運ばれたって聞いたけど大丈夫？」

リトルが入ってきた。

「なあ、リトル 俺は、生きてて、いいのか……？」

「なに言ってるんだよ、当たり前」

レグナは細い身体を抱き寄せた。

「どう……したの？」

「約束……したろ？」

レグナは紅潮するリトルの頬の隣で囁いた。

結婚しよう
リトル

第36話：戦いの終わり（後書き）

多分次で最終話です

最終話：「 (前書き)

ああ あなたには言ったんだっけ ルシフェル・ウィンザード

強いて案外つまんねーな 【青の断罪】

ねー カイゼル・グランローグ

私の冒険はまだ続くみたい

最終話：」

」

私が目を覚ましたとき、強引に脇に抱えられた状態であることに
先ず悪態をついた。

「む、スマンな」

彼は口では一応謝罪はしたが抱え方を変えることはしなかった。

「どうして、連れてきた訳？」

私、ルシフェル・ウィンザードは彼をいぶかしんだ。

「あのまま放置すれば貴様の傷が治癒することはなかっただろう
そつすれば貴様の目的が叶えられることもまた、無いだろう」

『Fourth』エメトは無表情で言う。私は彼と初めて出会っ
たときのことを思い出した。

「ああ…… そついえばあなたにだけは言ってたんだっけ」

エメトは頷く。かつての彼の言葉を私はなんとなく思い出した。

“わからぬな 貴様は人間から悪魔になった、限りある命から永遠
に近い生を得た それがなぜ ”

「人間に戻りたい、と、かつて我はたしかに聴いた」

彼は悪魔らしかめ穏やかな表情を作って言った。

「……俺様の服を用意しろ」

彼は自身の屋敷に突然現れた。彼は現れるなり不遜に言い放つ。いつものように彼の帰還を、その部屋で待ち望んでいた従者は飛び上がった。

従者は毎日清掃を忘れなかった彼の部屋を訪れると忘れずに着てもいないのに洗濯し続けた彼の衣服を届けた。彼はそれを身に纏うと従者にキスをした。そして次に旗を掲げた。

レヴィアタンの帰還は瞬く間に魔界中に知れ渡る。あるものは歓喜し、あるものは絶望を募らせた。

そしてまたあるものは

「お帰りなさいませ」
「4番様」

彼を殺そうとした。

レヴィアタンの眉がピクリと動く。

「あなたを追われた『1番様』は？」

「死んだよ」

レヴィは軽く言う。彼の眼前に立つ男はニヤリと嫌な笑みを浮かべる。

「それは大変よいことだ 序列が1つ上がった
更に、もう1つ上もいまの弱ったあなたを消せば手に入る！」

じゃらじゃらと音を立てて男の手から数え切れない量のナイフが現れた。その一本一本が魔力によって統制されてレヴィを襲った。

レヴィはそれに片腕を突き出した。短く宣言する。

「拒絶する」

見えない壁にぶちあたって全てのナイフが停止した。

「それがあなたの“拒絶”か 一度この目で見ておきたかった」

「72柱同士の争いはご法度のはずだがな “殺人”のグラシヤラボラス」

「なんと我輩の名までご存知とは 光、栄 です」

次のナイフ、レヴィが単調だ。と感じたのは間違いだった。宙に浮いたナイフは左右に大きく展開する。そして、

最初に放ったナイフが突然上に向けてレヴィに襲い掛かった。

「!!!!」

レヴィは斜め前方へと跳んだ。もし刹那でも判断が遅ければ、また後方や真上に跳べばナイフはたちまち彼を貫いただろう。逃げ場はそこしかなかった。後方や宙空に刃が踊る。

だがグラシャラボラスはレヴィが必ず斜め前方を選ぶことを知っていた。

「12の紋章これ我発つ上の力なり」

句読点や些細な解釈を放棄した簡潔な呪文でグラシャラボラスはそれを引き出した。

『王の剣』

地面から突きだした家ほどもあるつかと言う12本の大剣がレヴィを貫こうと、あるいは斬り刻もうと殺到する。

「ちいっ……!!」

彼は“拒絶する”と呟いたがそれで足りないことは知っていた。

がriいっ　と思いい切り石を噛んだような歪な音がして拒絶の力は碎けた。

しかしその一瞬でよかった。

彼の“腕”は一瞬蛇のような形に化けるとそれらの剣を絡めとり一拳に押し伏せた。

「久々の“真の姿”にも慣れとくか」

彼は少し嘲るように笑った。その笑みが、凍り付く。

「……は喉を貫かれた

キュリアスは幻想に心を奪われた

ブルータスは高潔を貫いた」

「オオッ！」

蛇のように伸びた全身で刹那にしてグラシヤラボラスを包み込む。レヴィはそれだけ俊敏にグラシヤラボラスを殺害する必要があった。

「ジュリアス・シーザーの最も気高き剣！」

結論から言うとレヴィはグラシヤラボラスの殺害に失敗した。グラシヤラボラスは刀を振り抜いた。万力を持って締め上げようとした長い胴体が一閃の元に断ち切られる。

勝った。とグラシヤラボラスは思う。それは油断だ。だからたっ
たいま切断した巨大な尾が、“そのたった一部分”であることに
気づかなかつた。

「……アホめ」

ドゴオオンっ！！

刀を振り抜いたばかりで身動きが取れないグラシヤラボラスに、
レヴィはただ“のし掛かった”

「……お 生きてやがる タフだねえ」

人型の形質を取りつつレヴィは地面にめり込んだグラシヤラボラスを見下ろした。

「次は俺様のことをもう少し勉強してから出直すんだな 坊や」

レヴィアタンとは本来海に棲む怪物だ。その身体はどこまでも巨大になれる。そしてその質量をレヴィは自在操作出来る。その極大の質量を一点、もしくは一面に向けて発揮するのが彼の“拒絶”だ。それは細く集約すればあらゆる物質の結合を切断する刃となりまた空間の結合すら歪める絶対揺るがない盾になる。

自身の持つ能力を攻防に対して最強の物だと確信する。

しかし一方で彼は思う。レグナの中に居たとき脆弱な肉体で立ち向かう悪魔との戦いは実にスリルに満ちていた。

序列は下とはいえ同じ『ソロモンの72柱』クラスの悪魔でさえ一捻りに出来てしまうレヴィには、おそらくあんな戦いはもう出来ないだろう。

「……強いつて、案外つまんねーな」

ふと、レヴィは虚しさを感じて呟いた。

それは、あるいはナタク・エルステインが非常に美人だったのが災いしたのかも知れない。

ナタクはある書状を受け取った。それは北の国『アイスログ』からの宣戦布告だった。大震のトップも騎士団長も近衛兵長も留守にしているこの機会に、ナタクがこれを受けとるのは致命的に運命的だったと私は思う。

あるいはそれを届けに来た使者が若い男でしどろもどろでろくに説明せずに帰ったのもいけなかった。

ナタクはそれを軟派かなにかだと思ったたらしかった。ナタクは北の紋章を知らないし北の文字も読めない。だからそれをゴミ箱に丸めて捨てた。

だから3日後に「あの妙に部厚い書状はなんのゴミだ？」と私がそれをゴミ箱から拾い上げたとき。そうしなければ我が国は何の準備もなく北と戦争しなければならなかったのかもしれないと思ったのだと思うと、正直ゾツとした。

「ベル よく報せてくれた……」

と、先日その椅子に座ったばかりのかつての反逆者は苦い顔で額を押さえた。

「ほれ きびきび歩けー」 先導する君が首だけで振り返ってえらつそうに、それからめんどくさそうに言う。ムッ ときた私は小さな炎を投げて君の後ろ髪を焦がした。

「おわっちいいっ!？」

君は大慌てでそれを消した。私はそれを大笑いする。

「わたしにめーれーしなーい」

剣呑に、安穩に言う君は振り返って私を睨み付けてそれから呆れ顔になって肩を落とした。その様子に隣の彼も微笑む。

「ったく みんな揃って緊張感ないサー……」

私はシーク・ツェイベルとカイゼル・グランローグの2人と、ある場所へ向かっていた。

あれから2年の月日が流れた。私が少し前に『境界線』の完全封鎖に成功した。悪魔が境界を越えてやってくることはなくなる。普通の獣や魔物の残党では並の戦人でも容易に退けられるので旅をすることはいままでより遥かに容易になった。

とはいえこの面子なら悪魔が襲って来ても全く問題ないんだけどねえ。

近衛兵長のシークに、第一騎士団長のカイゼル。それに大震のトップの私だから。

「レグナさんの足治すためにワイバーンに頼ろう つつたのはお前サ ンであの森までの道案内を俺っちに頼んだのもお前! なんでそのお前がカイゼルととるとるととるとと歩いてるサ!？」

焼けた赤髪を手入れしながら君は涙目で少し怒る。

そう、破壊と豊穡の力を持つワイバーンの元に。君と出会った森に私達は向かっていった。

「いいじゃん ゆっくり行けば ねー？」

隣のカイゼルに同意を求める。

「ねー」

と、カイゼルは微笑んで頷く。

君は更に険しい顔になって長い髪の焦げた部分をバツサリと切り落とした。

「……見えてきたサ 氣い引き締め……」

君は続きを引っ込めた。

「わかってる」

私もカイゼルも、完全な戦闘モードだったからだ。君は少し呆気に取られたけど直ぐに余裕のある笑みを見せた。

「森中、入って橋の近くで貢ぎ物と儀式を……」
「んなまどろっこしいことやっつてられないっしょー！」

私は震力を高めた。巻き添えを恐れた君とカイゼルが横に飛び退く。

私は炎を空に向かって放った。
それはどこまでも、どこまでも天を衝く。

「……これで向こうも気づくでしょ」

「この……アホっ……」

君の咳きと同時に、森から一陣の風が建った。

「「!」」

土煙を帯びた旋風を君が風の魔術で弾き飛ばす。

「……来ちゃったサ 俺っちまだ心の準備出来てないサ」

君が咳いた。翼竜がその巨大な姿を見せていた。

「手間が省けていいじゃん？」

「僕も同意」

「っ…… まあいいサ」

全員が武器を構えた。

「《機械仕掛けの神》、ON!」

君の声を皮切りに戦いが始まった。

悪魔が消えても他にやることはたくさん、たくさんある。結局レグナはもう剣を握れなかったけど、その意思を受け継いだ私の冒険はまだまだ終わらないらしい。

B L A D E E N D

最終話：」

」（後書き）

という訳で完結です。最終話に主人公のことほとんど書かないと
かありなのか と思いましたがあんまり長く放置し続けるのもあれ
かとおもい妥協いたしました（蹴

あと1つ、別バージョンのBLADEの第一話だけを載せておき
ますがこちらはBLADE本編とは一切関係ありません

ってか続きは書くかもしれないし書かないかも知れません
まあ次にバトル物を書くとすれば『BLACK ART』ってタ
イトルは決めてあるんですが……

BLADE (前書き)

— m (この話はこれで終わりのただの短編です 続きません m) —

BLADE

『刃の国』と、呼ばれる国がある。10年と少し前に魔王を倒した『刃の王（ブレイド）』ってやつが作り上げた剣術の盛んな国だ。

そこで俺は、国から少し離れた場所にある小屋にいた。

パリパリとポテチを食う女があぐらをかいて行儀悪く座っている。俺と師匠であるそのポテチ女は格ゲーの対戦中だったりするわけだが、

「クソ……また負けた」

師匠は右手でポテチを摘みながら左手一本で器用にコントローラーを操作している。しかもめっさ強い。

「修行が足りんぞ」

横目でジロリと睨む着物に長い黒髪を一本に縛った和風系の美人。そそるやつにはそそるんだろうな うん。

……周りがゴミ山じゃなければ

「格ゲーの修行なんかしてどうすんだよ バカ師匠
つかなんか用事あったんじゃないのか？」

……

「ああ！ そうだった」

思い出したようにポンッと手を叩く。どうやらバカなだけじゃなくボケが加わりつつあるらしい。おもむろに立ち上がった師匠は、積み上がったゴミの山と格闘しはじめた。

「おい 師匠？」

「あれ？ どこにしまったっけな たしかこの辺に……なんか、引っかけ……きゃあ？！」

捜し物は見つかったらしい。が、引っこ抜いた勢いで盛大に転じた。

更に、

「ちょ 助け、きゃあああ？！？！」

……その上にバランスを崩したゴミの山が降り注いだ。

「えーっと……じゃそうゆうことで」

「待て！ 帰るな！ 見捨てるな！ この薄情者おお！！！」

……結局、俺は1時間ほどゴミの撤去に時間を費やした。

「ふう……えらい目にあつた
では、気を取り直して、だ」

ぱんぱんっ とスポンを叩き、言う。

「エンシエントアーツ、《ウルスラグナ》
私が魔王と戦ったときに使ってた真正正銘、世界最強の伝説の剣だ。
免許皆伝にくれてやる」

「は？」

「とはいえウルスラグナは二対一式、いまくれてやるのは片割れだけだ。存分に世界を見て周り、私の元に戻ってこい
そのとき私が貴様を認めてやったら、ウルスラグナのもう片方を譲る」

「ちょっと待て、俺はまだあなたに教わりたいたいことがある……」

「ちなみにいま出て行かんと殺すぞ」

「え……」

「死ぬか？」

ウルスラグナに手をかけ真顔で言う。殺気すら漂うガチの表情。

「……わかったよ、行けばいいんだろ 行けば」

「うむ それでよい」

師匠が鞘に収まったウルスラグナを投げて寄越す。俺はそれを受け取り鞘から抜き払い、短い感想を口にした。

「……ポテチの油でベタベタなんだが」

……かくして、俺の冒険は始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2640h/>

BLADE 連載版

2010年10月10日06時22分発行